



山形県 大蔵村

第26回 全国棚田(千枚田)サミット
大蔵村実行委員会・大蔵村運営委員会
(大蔵村役場内)

〒996-0212 山形県最上郡大蔵村大字清水2528番地
TEL:0233-75-2105 FAX:0233-75-2231
E-mail:tanada@vill.ohkura.yamagata.jp



第26回 全国棚田(千枚田)サミット

テーマ

「2021 棚田再生」

— 中山間地農業の新たな出発…灯そう地域の明かり —

□開催地／山形県 大蔵村 □開催日／令和3年9月9日(木)～10日(金) ※中止

● 報 告 書 ●



全国棚田(千枚田)連絡協議会

山形県 大蔵村





大蔵村公式キャラクター 「おおくらくん」

雪だるまの妖精。頭についた
大玉トマト、お腹のミニトマトの
ボタン、おしりの蛇口がトレー
ドマークです。

アクセス

●列車（JR線利用）

東京駅→（山形新幹線/3時間35分）→新庄駅→（大蔵村営バス/55分）→肘折温泉
仙台駅→（仙山線/1時間20分）→山形駅→（奥羽本線/75分）→新庄駅
→（大蔵村営バス/55分）→肘折温泉

●飛行機

羽田空港→（JAL/55分）→山形空港
→（空港ライナー/1時間15分）→肘折温泉
羽田空港→（ANA/60分）→庄内空港
→（レンタカー/1時間30分）→肘折温泉
伊丹空港→（JAL/1時間15分）→山形空港
→（空港ライナー/1時間15分）→肘折温泉
名古屋空港→（FDA/1時間10分）→山形空港
→（空港ライナー/1時間15分）→肘折温泉
新千歳空港→（FDA/1時間20分）→山形空港
→（空港ライナー/1時間15分）→肘折温泉

●車

東北自動車道→山形自動車道（東根IC）
→（国道13号経由）→大石田村山IC
→（尾花沢新庄道路）→舟形IC
→（県道56号・県道31号・県道330号・
国道458号）→肘折温泉



大蔵村PR動画



面積

211.63km²

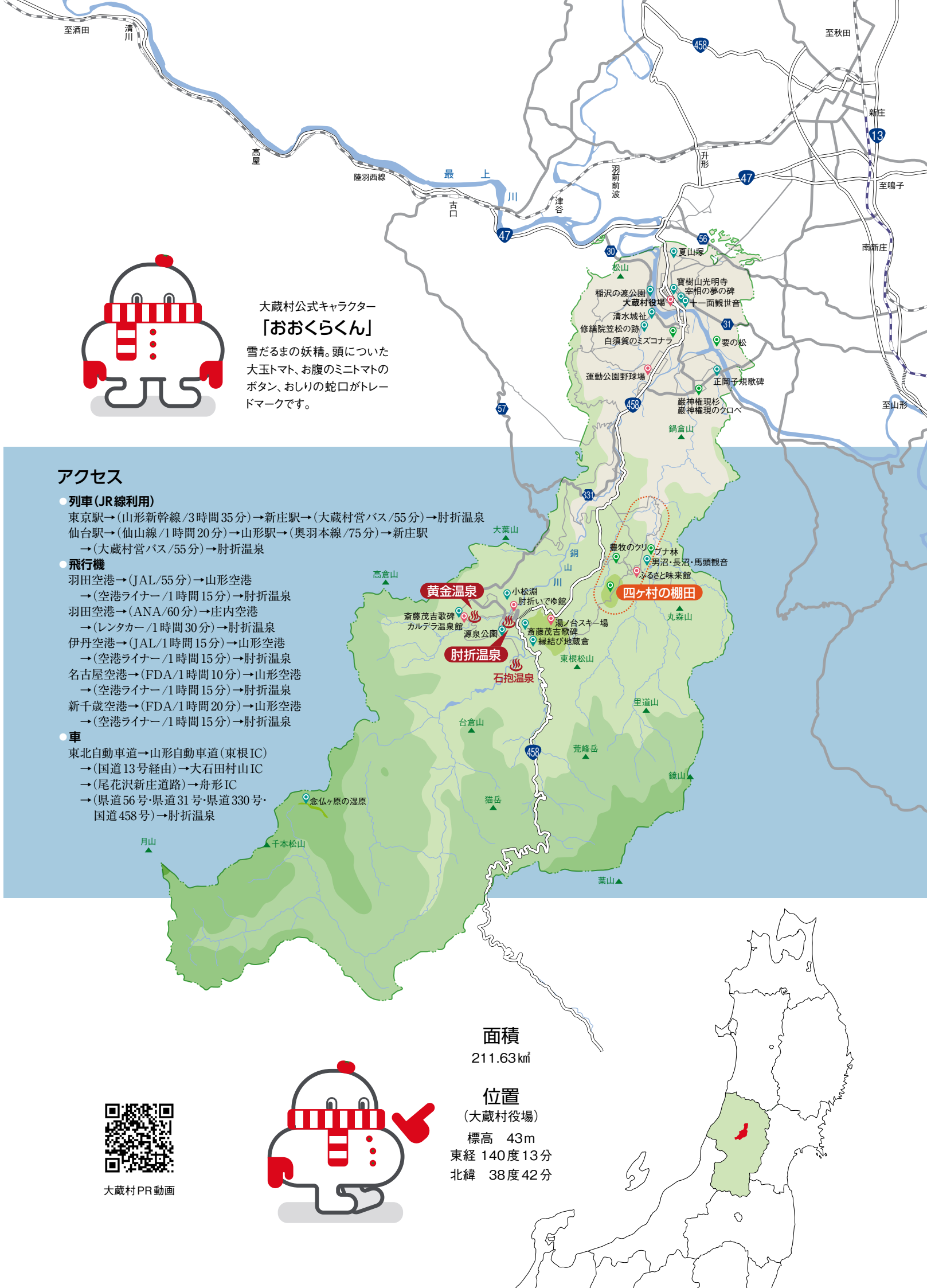
位置

（大蔵村役場）

標高 43m

東経 140度13分

北緯 38度42分



目 次

延期、中止に至る経過と報告書の発行について	5
開催概要（計画）	6
開催プログラム（計画）	7
あいさつ	
○会長あいさつ	9
○開催地あいさつ	10
○開催県あいさつ	11
基調講演	13
研究発表	17
分科会	
○第1分科会	23
○第2分科会	33
○第3分科会	71
○第4分科会	81
見学会（計画）	
○見学会コース1	89
○見学会コース2	90
○見学会コース3	91
2021 棚田再生宣言	93
次期開催地あいさつ	95
四ヶ村の棚田の概要	99

延期、中止に至る経過と報告書の発行について

第26回全国棚田(千枚田)サミットは、新型コロナウイルス感染症の感染拡大をうけ、令和2年度の開催を1年延期し、向えた令和3年度は開催中止という苦渋の決断をさせていただき、会員の皆様のご同意を得ましたことに心より感謝を申し上げます。皆様には、大変ご迷惑をおかけいたしました、何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

つきましては、サミット開催に向け準備を進めてまいりました内容を冊子にまとめ、第26回全国棚田(千枚田)サミットの報告書とさせていただきますので、ご覧下さいますようお願い申し上げます。

第26回全国棚田(千枚田)サミット実行委員会
〃 運営委員会
(山形県大蔵村)

年 月 日	内 容	備 考
令和2年		
1月16日	国内初のコロナウイルス感染者	
3月20日	大規模イベントに係る方針政府より提示	
3月31日	山形県内初のコロナウイルス感染者	
4月5日	大蔵村内初のコロナウイルス感染者	
4月7日	緊急事態宣言(1回目)	
4月13日	事務局とコロナ禍の状況と開催の可否等協議	
4月30日	実行委員会として延期を決断し事務局へ報告	
5月8日	令和2年度第1回幹事会(開催延期に賛同を得る)	書面決議
5月26日	令和2年度第1回理事会(〃)	書面決議
7月1日	令和2年度総会(開催延期が承認される)	書面決議
8月1日	大蔵村「四ヶ村の棚田ほたる火コンサート」中止	
9月10・11日	第26回全国棚田(千枚田)サミット	延 期
令和3年		
1月7日	緊急事態宣言(2回目)	
4月23日	緊急事態宣言(3回目)	
5月7日	事務局とコロナ禍の状況と開催の可否等協議	
5月12日	実行委員会として中止を決断し事務局へ報告	
7月12日	令和3年度第1回幹事会(開催中止に賛同を得る)	書面決議
7月26日	令和3年度第1回理事会(〃)	書面決議
8月7日	大蔵村「四ヶ村の棚田ほたる火コンサート」中止	
8月20日	令和3年度総会(開催中止が承認される)	書面決議
9月9・10日	第26回全国棚田(千枚田)サミット	中 止

開催概要(計画)

開催日程 令和3年9月9日(木)～9月10日(金)
(※9月8日(水)、理事会、総会)

開催地 山形県 大蔵村

主 催 全国棚田(千枚田)連絡協議会

主 管 第26回全国棚田(千枚田)サミット大蔵村実行委員会

テ ー マ 「2021 棚田再生」
ー中山間地農業の新たな出発・・・灯そう地域の明かりー

開催趣旨 棚田は、そこに暮らす人々が、耕し育て「生活の糧」として生きてきた歴史があります。この営みは、日本の原風景であると同時に、多面的に持つ機能は長い時間をかけて培われてきた貴重な財産となっており、私たちは今後も絶やすことなく守り続けていかなければなりません。

一方で棚田の独特の地形は、作業面や管理面において平野部とは違った苦労も多く、担い手不足や耕作放棄、離農などに繋がっているのも現実です。

このような中において私たちは、棚田を守ることにとどまらず、暮らしを支える生業として、中山間地域での農業と正面から向き合い再考しなければなりません。

2021サミットでは、棚田地域振興法が施行されたなか、中山間地農業、棚田地域農業の課題を整理し、たくさんの仲間と棚田地域の再生に向けた議論を交わし、その魅力と意義を全国に発信する機会とします。

参加者募集人数 ○令和2年度 400人(延期)
○令和3年度 150人(中止)
(※令和3年度は、コロナ対策による参加募集規模縮小)

開催プログラム（計画）

◎9月8日(水)

時 間	内 容	会 場
16:00～	全国棚田(千枚田)連絡協議会 理事会	大蔵村中央公民館
16:45～	全国棚田(千枚田)連絡協議会 総会	大蔵村中央公民館
18:30～	全国棚田(千枚田)連絡協議会 情報交換会	肘折温泉

◎9月9日(木)

時 間	内 容	会 場
9:30～	オープニングイベント	大蔵村中央公民館
10:00～	開会式	大蔵村中央公民館
10:30～	基調講演 - 棚田地域の暮らしと大学の関わり -	大蔵村中央公民館
11:30～	研究発表 - 四ヶ村の棚田での活動報告と提案 -	大蔵村中央公民館
12:00～	昼食・休憩・移動	大蔵村中央公民館
12:20～	中学生によるポスターセッション (休憩時間利用 - 参加自由)	大蔵村中央公民館
13:15～	第26回全国棚田(千枚田)サミット	大蔵村中央公民館
	*第1分科会 - 棚田保全の方向性 -	大蔵村中央公民館
	*第2分科会 - 棚田地域で外部人材ができること -	大蔵村中央公民館
	*第3分科会 - 中山間地域のスマート農業を考える -	沼の台生涯学習センター
	*第4分科会 - 棚田地域振興法成立の背景とその活用 -	大蔵村中央公民館
18:00～	交流会	肘折いでゆ館

◎9月10日(金)

時 間	内 容	会 場
8:30～	現地見学会 ・コース1→日本の棚田百選「四ヶ村の棚田」とパワースポット地蔵倉散策 ・コース2→日本の棚田百選「四ヶ村の棚田」と小水力発電見学 ・コース3→日本の棚田百選「四ヶ村の棚田」とトマト団地見学	村内各地
11:30～	閉会式	大蔵村中央公民館
12:30～	解散・観光エクスカーション ・会場→最上川舟下り→JR新庄駅 ・会場→出羽三山(羽黒山)→庄内空港 ・会場→山寺→山形空港	県内各地

あ い さ つ



令和2年開催予定会場(大蔵小学校)



令和3年開催予定会場(大蔵村中央公民館)

※会長及び開催地のあいさつは、令和3年9月9日にホームページ等でご覧いただいた内容です。

会長あいさつ

全国棚田(千枚田)連絡協議会会長
山口県長門市市長 江原 達也



皆様こんにちは。全国棚田連絡協議会の会長を務めております山口県長門市市長の江原達也でございます。

まず、今年9月、山形県大蔵村において開催を予定しておりました第26回全国棚田サミットの中止につきまして、会員の皆様をはじめ、関係者の皆様に心よりお詫び申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により昨年サミットの開催を延期させていただいたところですが、現在も全国各地で変異ウイルスによる感染が流行し大変憂慮される状況となっていることから、参加者全員の安心安全をお約束できないと判断された大蔵村実行委員会の意向を尊重し、今年のサミットを中止とさせていただきます。大変心苦しい限りではございますが、何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

また、棚田サミットに限らず、多くのイベントが延期または中止せざるを得ない状況が続いたことで、全国各地で甚大な影響が出ており、皆様のご心労はいかばかりかとお察し申し上げます。このような状況が一日でも早く収束することを切に願っております。

さて、全国棚田サミットは、これまで25回の開催を数え、棚田地域が抱える課題を議論し、多くの方が棚田の有する多面的機能への関心を高め、棚田の魅力を再発見し、美しいふるさとの風景を後世に残すため尽力してきました。この棚田サミットをはじめとした棚田の振興・保全を訴え続けてきたことが実を結び、令和元年、棚田地域振興法の施行という大きな成果が出ました。なお、施行にあたっては、関係する国会議員の先生方のお力添えを賜りました。改めて心から感謝申し上げますとともに今後ともご支援ご助言いただきますようお願い申し上げます。

棚田地域振興法の施行後、今年6月時点で、指定棚田地域は39道府県665地域にのぼり、全国各地で棚田地域を守っていく気運が高まっております。今年のサミット中止は誠に残念でありませんが、棚田の保全・振興は待ったなしの状況でございます。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から活動が制限される中ではございますが、今できる精一杯のことをやっていきたいとの思いから、山形県大蔵村様より、これまで村全体をあげて準備してこられたサミットの内容をまとめた冊子の作製など、次期開催地であります滋賀県高島市様のサミットの成功に繋げる活動を行いたいと提案をいただき、その実施をお願いいたしました。サミット中止という大変苦渋の判断をされた中、全国の棚田地域を強く思う心遣いに深く感謝申し上げます。

結びになりますが、今年のサミットのテーマでありました「灯そう地域の明かり」のとおり、コロナ禍の暗い社会に棚田地域の明かりを灯すこと「地方の元気を発信すること」で、行き先不透明な現状を打破する大きな希望を見出すことができると信じております。

今後とも棚田地域の保全・振興にご尽力を賜りますよう切にお願い申し上げますとともに、来年皆様と滋賀県高島市で元気にお会いできることを祈念し、挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

開催地あいさつ

第26回全国棚田(千枚田)サミット実行委員会会長
山形県大蔵村長 加藤 正美



皆さん、こんにちは。山形県大蔵村長の加藤でございます。

はじめに、大蔵村では第26回全国棚田(千枚田)サミットの開催地を仰せつかり準備を進めて参りましたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、昨年は1年延期、今年は中止という苦渋の決断をさせていただいたことにつきまして、まずもって会員の皆様をはじめ関係者の皆様に心よりお詫びを申し上げます。

緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が各地に発出され、外出移動の自粛や飲食の制限、交通機関が減便されるなどの状況下において、全国規模の大会は参加される皆様のリスクが高いと判断させていただいたものでございます。大変ご迷惑をおかけいたしましたは何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

さて、私の後ろに広がる棚田は、日本の棚田百選のひとつ、本村の「四ヶ村の棚田」でございます。125haに及ぶ広大な棚田は、この地区の皆さんが、生活の糧として手塩にかけ培ってきたものです。私たちは、国土や環境の保全にも繋がるこの棚田の価値を再評価するとともに、しっかりと継承していかなければなりません。

今年のサミットのテーマを「2021 棚田再生」、－中山間地農業の新たな出発…灯そう地域の明かり－と題しまして、これからの棚田地域農業の在り方と正面から向き合い、皆さんと議論を交わすサミットの開催を目指して参りました。

棚田は、独特の地形から作業の効率性や管理面などにおいて、平野部とは違った苦労も多く、担い手不足や耕作放棄、離農などに繋がっているのも事実です。このような中、令和元年に私どもの悲願ともいえる「棚田地域振興法」が成立し、棚田地域の振興に大きな明かりが灯り始めました。サミットでは、これを受け棚田地域の振興に向けて課題を更に掘り下げ、これからの棚田の保全・整備の方向性や棚田地域のスマート農業などハード面から考えるとともに、外部人材の活用などソフト面から、そして、棚田地域振興法の今後の活用などをコンテンツとした基調講演や分科会等を用意しておりました。

棚田地域は、特に高齢化や過疎化が進んでいる地域でもあり、棚田地域に明かりを灯すことは、棚田を持つ市町村全体の活性化に繋がると同時に、「地方の元気」に直結する道標として重要な意味を持っています。棚田を通して今後も、全国の仲間の皆さんと更に交流を深め、棚田地域の振興をより図っていければと思っております。

本村では、サミット開催に向け、実行委員会や運営委員会を組織し、村をあげて準備を進めてまいりました。皆様には、交流会や現地見学会を通して、山形名物や大蔵名物を堪能していただき、出羽の名湯「肘折温泉」でゆっくりとくつろいでいただく予定でしたが、重ね重ね残念でなりません。会員の皆様をはじめ、事務局の長門市様、次期開催地の高島市様、いろいろとご指導いただきました関係各位の皆様に衷心より厚くお礼申し上げます。

結びになりますが、一日も早く日常生活が戻ります事を切にご祈念申し上げながら、次期開催地の滋賀県高島市、福井市長様に全国棚田(千枚田)連絡協議会旗をこの場から引き継ぎさせていただきます。よろしくお願い申し上げます。

令和4年開催、第27回全国棚田(千枚田)サミットの成功を心よりお祈り申し上げます。ありがとうございました。



はじめに、本年9月に、本県の大蔵村にて開催を予定しておりました第26回全国棚田(千枚田)サミットが、新型コロナウイルスの全国的な感染拡大により、現地での開催が中止とされました。サミット実行委員会の皆様をはじめ、全国棚田(千枚田)連絡協議会の関係者の皆様におかれましては、開催の中止は苦渋の決断であったものと思いますが、現在の全国的な新型コロナウイルスの感染拡大は、いまだ収束する気配が見られず、様々なイベントや大会の多くが延期や中止とされていることもあり、適切に御判断いただいたものと考えております。

このような中、これまでサミット開催に向けての準備に多大なる御尽力をいただきました実行委員会の皆様をはじめ、関係者の皆様に心から敬意を表するとともに深く感謝申し上げます。

さて、今回で26回目となりました全国棚田(千枚田)サミットのテーマは、「棚田再生—中山間地農業の新たな出発…灯そう地域の明かり—」であります。棚田の美しい風景を見ると、人は心が癒されると感じます。日本人の心の中にある原風景、懐かしい風景が棚田にあると思います。さらに、棚田は洪水の防止や水源かん養といった、多面的な機能を有しています。このような棚田の持つ様々な魅力、役割は地域の財産であり、未来の子供たちの世代に受け継がれていかなければならないと思いますし、そのためには、そこに住んでいる人々が、これからも農業を営み続けていくことが重要です。今、棚田地域をはじめとする中山間地域における農業を取り巻く環境には様々な課題もありますが、地域に住む人々が心の灯を燃やし続け、これからもそこで暮らしたいと思えるように、全国の関係者の皆様と交流を深めながら、棚田地域を守っていく活動の推進に、より一層取り組んでいかなければならないと考えております。

本県には、今回開催する予定であった大蔵村「四ヶ村の棚田」をはじめ、多くの棚田があり、それぞれの地域では「棚田米」ブランドとして販売するなど、地域の特色を工夫してPRしています。もとより、本県は「つや姫」や「雪若丸」をはじめとしたおいしいお米を生産する全国有数の米どころであります。お米はもちろんですが、日本一の生産量を誇るさくらんぼやラ・フランスなどの果物、全国的なブランドである総称山形牛など、おいしい農産物がたくさんあります。残念ながら、今回はこちらにおいでいただくことは難しい状況ですが、この新型コロナウイルス感染症が収束した際には、ぜひ本県を訪れていただき、こうした山形の食を十分に堪能していただきたいと思います。

終わりに、第26回全国棚田(千枚田)サミットの開催に向けて御尽力されました関係者の皆様の御健勝と御多幸をお祈りするとともに、来年滋賀県にて開催されます、第27回全国棚田(千枚田)サミットの成功を心からお祈りし、あいさついたします。

基調講演・研究発表



四ヶ村地区で調査研究する早稲田大学落合先生と学生のみなさん



地元住民へのヒアリング



地元住民へのプレゼン



「ほたる火コンサート」会場設営に参加



「棚田地域の暮らしと大学の関わり」

早稲田大学社会科学総合学院准教授 落合 基継 氏



はじめに

今回の講演をお受けするにあたり、大蔵村のみなさまからは「明るい話をしてほしい」というご要望がありました。ただ、あまり無責任に明るい話をするのもどうか、など悩んでいたところ、新型コロナの流行で会場でのイベントが中止となり、改めて何をお話したらよいのか考えました。そのような中、今自分が本当に感じていることをお伝えすることしかできないのではないかと考え以下のような内容といたしました。「講演」の代わりに原稿ということで、話し言葉にいたしましたことご了解ください。

1. 自己紹介と大蔵村との関わり

早稲田大学社会科学総合学院で准教授をしております落合基継と申します。専門は農村計画、地域づくり、農村景観です。学部では「農村デザイン研究ゼミナール」を担当しております。もともとは農学部の農業土木出身です。農業土木の中で農村計画について研究してきました。ですので、早稲田の「社会科学部」で農村デザインのゼミを担当しております。

今回の山形県大蔵村での「棚田サミット」で講演をさせていただくことになったのは、わたしがゼミの学生と大蔵村に定期的に訪問していたことからでした。大蔵村の四ヶ村の棚田や四ヶ村地区を調査対象として、3年前の2018年より学生と一緒に訪問させて頂いております。そのきっかけは、落合が2018年に早稲田大学に着任し、新たにゼミナールを担当することとなり、ゼミ学生が実際の農村地域を訪問し現場で勉強させてもらいたいと考え、以前よりお世話になっていた山形県職員のかたに相談したところ、大蔵村をご紹介いただいたことです。

2. ゼミ学生訪問のお願いの際に

大蔵村役場にゼミ学生の訪問のお願いに最初にうかがった際には、「都市部出身が多い中でも農村デザインに興味を持っている早稲田の学生に、中山間地域の実情、棚田地域での暮らしなどについてご教示いただきたい。ただ教えてもらうばかりではなく、地域のみなさまから10教えて頂き、1か2でも学生の若い視点でなにかお返しできれば」というお願いをしました。学生にも、同じ話をして、そういうことで先方にはお願いをしていますのでそのつもりで現地を訪問してください、と伝えています。

役場や地域のみなさまからしたら、農業や農村の事情も知らない東京の学生が来るのだから「客」として迎えよう、というご対応となるかと思います。いくら「学生からお返しを」と言われても、農業や農村のことをなにも知らない学生になにかできるとは思えない、とお感じになるのは当然かと思います。教員として学生に期待しているのは、もちろんすべて解決することなどではなく、東京の学生なりに、農業や農村のことを今まで知らなかった若者なりに提案できることを謙虚な姿勢で考えてほしい、というものです。ただ、少しはなにか地域の役に立つてほしいと思うことは間違いありません。

3. 学生と大蔵村を訪問して

ゼミの学生と一緒に始めて大蔵村を訪問したのは2018年9月でした。それから2019年2月、

2019年8月、2020年2月と学生と一緒に4回訪問しました。東京から山形は近くはないので、どうしても夏休みや春休みなどの長期休暇中での訪問となってしまいます。学生の多くは都市部の出身で、農村や農業には興味があるが実際には農村の現場に行っていないという学生が多く、大蔵村に来て、はじめて本物の棚田を見てみな感激していたことを思い出します。

2018年9月の最初の訪問では、まずは実際の農村を体感する、大蔵村や四ヶ村の棚田についての話を聞く、ということが大きな目的でした。はじめての訪問でしたので、まずは大蔵村や四ヶ村の棚田を知るところからはじめました。

2019年2月の2回目の訪問では地域のみなさんからもう少し深く話を聞く、としました。また豪雪地域である大蔵村や四ヶ村地区の雪を学生は体感し、長い期間雪に閉ざされる生活について、実際に雪を見ることで少しでも感じられたのではないかと思います。

2019年8月の3回目の訪問では、四ヶ村地域で毎年開催されている「ほたる火コンサート」の準備のお手伝いをさせていただきました。学生にとってこういったイベントの準備に参加できることは、大変貴重な経験であったようです。食文化班は味来館で軽食の販売の手伝いをさせていただき、観光班は会場で来場者を対象にアンケート調査をさせていただきました。また全員で「ほたる火」であるペットボトルのろうそくに火をつけてまわりました。

2020年2月の4回目の訪問では、3年生が4回目の訪問であったのに対して2年生にとっては最初の訪問となりました。3年生からはこれまでの訪問や訪問後に東京での座学で検討した内容をもとに役場や地元のみなさんへ提案をさせていただきました。農業班からは四ヶ村の棚田のお米をいかにブランド化し販売していくのか、6次産業化班からは大蔵村での6次産業化について、観光班からはほたる火コンサートの運営方法について、さらには四ヶ村の棚田を案内する看板についての新たな提言などでした。お米の販売では学生によってツイッターを活用したプレゼント企画などによる広報を実施し、四ヶ村内の看板についてはデザインが実際に採用されるなど実現しているものもあれば、6次産業化については加工場や販売所など施設のこともありなかなか難しいなど、東京の学生ができる範囲で関わらせて頂いております。そのほか、集落班は四ヶ村の4つの集落全戸へのアンケート調査の実施、環境班は四ヶ村の農地利用の現状についての調査を実施しています(詳しくは学生発表にて報告いたします)。

4. コロナになって

2020年2月くらいより日本でもコロナの話が出始めていましたが、学生と一緒に大蔵村を訪問したのはその2020年の2月が最後でした。個人的には、3月にドイツからの交換留学生を関西の農村地域への現地調査に引率した際に、現地の知り合いの隣に住む人から「東京からの人はちょっと怖い」と言われ、京都市内に宿泊し片道2時間ちかくかけて往復し調査をしました。それがコロナ前の最後の調査になりました。4月には緊急事態宣言が発令され完全に移動ができなくなり、大学の講義もすべてオンラインになりました。農村地域を調査・研究の対象とするゼミやわたしもそもそも移動ができず、ましてや農村地域に行くことなどできなくなりました。

新型コロナの流行によって、農村地域に行けなくなり、改めて自分のしていることを考えるようになりました。農村地域を対象として、なんのために研究をしているのだろうか。なんのために農村地域を訪問しているのだろうか。大蔵村も定期的に訪問させていただいてきたが、どうなんだろうか。ゼミ学生はどうなんだろうか。現地のみなさんからは「お客さん」として受け入れられているのだろうか。それとも少しでも役に立っている「外部人材」として見て頂いているであろうか。それとも煩わしい「よそ者」であろうか。ゼミの学生を農村地域に連れて行くことができず、自分の研究でも農村地域に行くことができず、どうしたものかと悩みはじめました。

コロナ以前、まだ大学で教員をする前の時代に、むらづくりが活発に行われているある地域に話を聞きに行ったときに、こんなことを聞いたことがあります。「なぜこの地域がこんなに活発に活動してうまくいっているかわかりますか？それは大学が入り込んでいないからです」。それを聞いたときは、まあそういうこともあるよな、くらいの受け止めだったのですが、それがボディブローのように効いてきて、その大学教員になってからはトラウマのように残っています。同じように、「中山間地域の住民はみんな助け合ってなんとか生きている。中山間地域の問題をつくり出しているのは専門家だ。」ということも聞いたことがあり、やはり同じく心に残っています。また、「地域の役に立ちたいと言うが、じゃあここに住めるのか」と言われることも少なくありません。個人としても、父方の祖父が宮崎県で農業高校の先生をしていましたが、わたしは神奈川県都市近郊で生まれ育ち農村に住んだことはなく、大学に入るまで農業や農村と関わったことがなく、いくら農村のことを研究しているといってもそれでいいのか、なども以前より薄々感じていたことでした。

コロナになっていろいろ悶々と考えるようになると、これらのことが頭に蘇ってきました。大蔵村での自分を考えると、どのような立ち位置でいるべきなのか、どのように大蔵村のみなさんと接するべきなのか、とても不安になってきます。こうしたことに加えて、現地に行けない学生に教員としてなにもしてやれないなどの思いが重なり、自分はまったく大丈夫だと思っていたのですが、このように悪い方悪い方に考えてしまい、わたしにとってはコロナの影響がこんな形で出てきました。

5. 非当事者としてできること

2021年春から放送されていたNHKの朝ドラ「おかえりモネ」では、東日本大震災の津波で大きな被害を受けた地域に住む主人公が、そのときにたまたま仙台市に行っていて津波を見ていなかったことから、津波を実際に見た家族や友人たちとの間に心の距離ができてしまったという物語でした。このドラマを見ていて、当事者と非当事者について考えました。ドラマでは、津波やその被害を直接的に経験した当事者と経験しなかった非当事者でした。経験をしたかしていないかで、そこには違いが生まれてしまいます。自分の状況に置き換えて考えたのは、当事者は大蔵村のみなさんで、非当事者はわたしでありゼミ学生です。またわたしが全国の農村地域に調査のために訪問する場合も、常にわたしは非当事者となります。大蔵村に住んでいるのではなく出身でもないわたしや学生はどこまでいっても非当事者であり、さらには農村出身でなく農業の経験がないという意味でも非当事者と言えるでしょう。そして、大蔵村に引越さない限りは永遠に非当事者であり続けることになります。では、非当事者としてなにができるのか、非当事者としてどのようにふるまったらよいか。そもそも関わってよかったのでしょうか。

こんな風に考えてきて、そもそもなぜわたしは農村に関する研究をしているのか、ということを考えるようになりました。当たり前すぎて今まで考えたこともなかったことでした。農村地域のみなさんにいつもわたしは「当たり前と思っているものでも、それは地域の大切な資源ですよ」と言っていたのですが、結局は自分がそうだったのです。農村地域のために役に立ちたいということはもちろんですが、それと同じくらいわたしは研究者として農村地域のことを知りたい、専門としている農村景観のことを知りたい、と考えているようです。農村景観の魅力はなにか、農村地域の人びとの暮らしと農村景観はどのような関係があるのか、農村景観を考えることは人びとの暮らしを考えることではないか、都市住民は農村景観をどのように捉えたらよいのか、棚田はよその人間がよいと思っているけど地元の人はどう思っているのか、などを突き詰めて考えること自体に魅力を感じているのだと思います。そして、そうして得られた考えや知見が農村地域のためになるのであればそれに越したことはない。今まで、「農村地域のた

めになにかできれば」ということを心の底から思っていることと、それをどこか綺麗ごとのように冷めた目で見ていることが自分の中で同居していて居心地が悪かったのですが、間違っていなかったようです。

朝ドラでは、当事者と非当事者の関係は震災前には完全には戻りませんが、想像力をはたらかせてお互いの悩みや苦しみを理解し合うようになりました。わたし自身としては、農村地域のためということはもちろんなのですが、まずはそれよりも自分の知りたいことを誠意を持って貪欲に追求すること、そして得られたことをもとに地域のために役に立つようなことをすることという順番を頭の中に持って訪問するようにしたい。ただ、地域の役に立つといっても、やはり非当事者にとっては当事者のことを完全に理解することは幻想であり傲慢であると思います。一方で当事者が見えないことが非当事者には見えるかもしれません。当事者が思いつかないようなことは思いつくかもしれません。だからこそ、謙虚に、そして想像力をフルに働かせ、非当事者ではありますが、非当事者なりに大蔵村や農村地域のことを考え、それが回り回って地域の役に立つようになれば、という姿勢で今後も調査研究を続けるようにします。また学生にもそのように伝えていきたいと思います。

おわりに

今回の原稿を執筆するにあたってまず考えたことは、今回読んでくださる人は棚田保全に関わる地元の方々が多いので、そういった地元のみなさまに、よそ者である大学教員や学生はこういう思いで訪問しています、ということをお伝えしたかったことがあります(他の研究者もそうかはわかりませんが)。改めてこうした場で申し上げるほどのことでもなく、当たり前のことなのかもしれませんが、コロナ禍でのこうした機会に原点に立ち返ることも必要なことだと改めて感じました。コロナ禍になってから学生には「コロナ禍で大変かもしれないけど、このままでは悔しいので、転んでもただでは起きない、という強い気持ちで日々過ごしましょう」と言っていたのですが、まさにコロナ禍だからこそ考えることができたと言えます。

最後に、ゼミでの訪問の際にいつもご対応いただいております大蔵村のみなさま、山形県最上総合支庁のみなさまには、大変お世話になっております。この場をお借りして感謝を申し上げます。

〈落合 基継氏 プロフィール〉

- 京都大学農学部(農学博士)
- 財団法人農村開発企画委员会主任研究員
- 2018年 早稲田大学社会科学総合学院准教授

「四ヶ村の棚田での活動報告と提案」

早稲田大学社会科学部 「農村デザイン研究ゼミナール」の皆さん

はじめに

大蔵村での棚田サミットで、学生自ら発表してもらう予定でした。しかしこういった状況になったことから、大蔵村へ度々訪問・調査し新たな提案などをしてきた学生は卒業してしまい、現在のゼミは大蔵村への訪問経験がほとんどない学生ばかりになってしまったので、担当教員の落合よりこれまでのゼミ学生の活動の紹介をいたします。

1. ゼミの紹介

早稲田大学社会科学部には社会科学分野に加えて、人文科学分野や自然科学分野のゼミナールが合計60以上あります。社会科学部という名前のおり、法学、政治学、経済学、経営学などの社会科学分野が多く、その中では異端ではありますが、本ゼミは農村を研究対象とする「農村デザイン研究ゼミナール」です。落合が3年前に嘱任するまで農村に関するゼミナールが本学部にはなかったので学生が志望するか心配だったのですが、熱心な学生がゼミに所属してくれています。現在4年生が22名、3年生が24名、2年生が14名の合計58名が所属しています。このうち約半数がそれぞれ山形県大蔵村、静岡県伊豆市を訪問対象とし、また数名が対象地区を決めず個々の研究分野(耕作放棄地対策、都市農業、食農教育、農村交通)を対象としています。

社会科学部では、2年生の後期からゼミ所属になります。現在の4年生は2019年秋から所属し、大蔵村への訪問は2020年2月が最初で、すぐに新型コロナ感染の流行により、その後訪問ができていない状態が続いています。ですので、学生で大蔵村を最も多く訪問したのは、2021年3月に卒業した学生20名でした。彼らは2年生の夏・冬、3年生の夏・冬と4回大蔵村を訪問できました。今回は、これらの学生の活動についてご報告いたします。

2. ゼミでの班とグループの紹介

ゼミの大蔵村での活動に際して、当初学生の希望する活動内容に関するアンケートをとり、その回答から、農業班、集落班、環境班、食文化班、6次産業化・直売班、観光班の6つの班を設置しました。また、これらの班を横串にさすように、映像グループ、GISグループ、SNSグループ、ジオラマ作成グループの4つのグループを設定しました。ですので、学生は6つの班のいずれか1つにかならず所属し、4つのグループには興味のあるところ少なくとも1つ所属することとしました。

3. ゼミの班・グループの活動内容の紹介

ゼミで最初は大蔵村を訪問したのは2018年9月でした。当時2年生で農村に来るのが初めてという学生がほとんどでした。四ヶ村の棚田を見て驚き感動していたことを思い出します。学生と教員あわせて約20名での訪問でしたので、役場からはマイクロバスや車を出して頂き、最上総合支庁からも車でご案内いただきました。2泊3日の調査で、まずは大蔵村および四ヶ村の棚田の基本的なことを知るところからスタートしました。宿泊は肘折温泉にお世話になりました。

2回目は2019年2月初旬でした。最も雪深い時期で、最近の学生はスキーやスノーボードにも行かないので、あれだけの雪を見るのははじめてという学生が多かったです。大蔵村や四ヶ村

のみなさんはこれだけの雪の中でどのような暮らしをされているのだろう、ということが肌感覚で感じられたのではないのでしょうか。訪問も2回目でしたので、半年前の訪問時に感じたことを秋の間に大学で班のメンバーと意見交換し、独自に調べるなどし、1回目訪問以上に深い調査に臨みました。班の中には、単純に質問をするだけではなく、東京の学生なりに考える「大蔵村のみなさんへの提案」を準備し、関係の方々にぶつけていました。ただ、地域の事情に適さないことやすでに実施されているなど、そう簡単には実現しそうではなかったです。

3回目は2019年8月で、学生は3年生になりました。また、訪問時にはちょうど「ほたる火コンサート」が開催されたので、その準備の手伝い、コンサートの来客へのアンケート調査や軽食販売のサポートなどを実施しました。またコンサートの前後で、それぞれの班の課題ごとに関係者に聞き取り調査を実施しました。

4回目は2020年2月で、3年生は4回目、そして2年生がはじめての訪問となりました。4回目となる3年生からは、役場や棚田米生産者組合など地元のみなさんに新たな取組の提案もさせていただきました。そのうちいくつかは実施に向けて調整することになりました。

ただ2020年3月以降はコロナ禍となり、大蔵村の訪問はできなくなりましたが、班の中には電話やメール、LINEでのやりとりを通じて、現地を訪問しなくてもできることを模索しながらの活動を実施しました。以下に班ごとの活動内容についてご紹介いたします。

(1) 農業班

農業班では、大蔵村の四ヶ村棚田で今後も米作りを続けるためには、棚田米の販売やブランドづくりが重要との考えから、マーケティングの面からできることを検討し提案しました。またコロナ禍の2020年末から2021年にかけては、訪問しての活動ができなくなったことから大蔵村役場や棚田米生産者組合のみなさんとリモートでやりとりをして、twitterを活用した「四ヶ村の棚田米プレゼント企画」を実施しました。この企画は引き続き次の学年が実施を準備しています。



ほたる火コンサートでの手伝い



雪の中での調査

(2) 集落班

集落班は、四ヶ村の棚田のある四ヶ村地域の4つの集落の社会面・生活面全般を研究対象として活動しました。住民のみなさんへのインタビュー調査を実施し、またコロナ禍になってからは、4つの集落のすべての世帯を対象にアンケート調査を実施し、家族構成、普段の買い物や病院について、またコロナ禍で以前と生活面(地域の会合や草刈り、外部からの来訪者への印象など)で変わったところについて、また棚田の保全についてのお考えなどについて回答していただきました。



棚田米生産者組合のみなさまと打合せ



地元のみなさまへのプレゼンの様子

(3)環境班

環境班は、四ヶ村の棚田の環境の保全を対象としたことから、四ヶ村地域の有志で結成されている棚田保存会へのインタビューや、景観悪化の一因となる耕作放棄地に関する調査、またそもそも棚田での生産活動あってこそその環境保全との考えから、関係者への聞き取り調査によってそれぞれの農地での生産の状況(水田か畑か、または自分で耕作しているか、人に貸しているかなど)について一筆毎に調査しました。



集落班による地元のみなさまへのインタビューの様子



(4)食文化班

大蔵村の食文化や伝統文化について調べる班です。特に食に関することとして、四ヶ村地域にある「味来館」のみなさんと交流をさせていただき、ほたる火コンサートの際の軽食販売のお手伝いやメニュー表のリニューアルの提案などをしました。



現地での調査の様子



地元のみなさまへのインタビューの様子

(5)6次産業化・直売班

名前のとおり、6次産業化や直売といった通常の農業生産とは少し違う視点から農業や加工、販売について調査をした班です。大蔵村では6次産業化を個人でしている人はいらっしゃってインタビュー調査をしました。ただ、村全体では加工場や販売所など施設の面などでそう簡単に対応できるものでもないことから、班の学生からいくつか提案もしましたが現地での実現は難しかったです。



ほたる火コンサートでの物販



地元のみなさまへのインタビューの様子

(6)観光班

四ヶ村の棚田を観光面から調査する班で、大蔵村観光協会へのインタビュー調査や、四ヶ村の棚田では棚田への案内看板のリニューアルの提案、ほたる火コンサートでの来訪客へのアンケート調査を実施し、またコンサートへの来訪者の棚田までの移動用のバス待ちの方法や物品販売について提案しました。四ヶ村の棚田の案内看板については、実際に看板のリニューアルにピクトグラムを提案するなど、学生からの提案内容が実際の看板の製作に反映されました。



地元のみなさまへのインタビューの様子



肘折温泉での朝市

(7)映像グループ

デジタルカメラ、デジタルビデオ、スマートフォン、ドローンなどを活用し、四ヶ村の棚田の景観や大蔵村の暮らしなどを映像(画像や動画)として切り取り蓄積をしています。また動画については、Youtubeチャンネル「早稲田アグリTV」を開設し動画を紹介することで大蔵村や四ヶ村の棚田の宣伝につなげる活動をしています。また後述するSNS班で活用できるような映像の作成も行っています。



ほたる火コンサートでの準備



地元のみなさまへのプレゼンの様子

(8)GISグループ

GISは地理情報システム (Geographic Information System) の略で、地図の情報にデータを関連させることができるものです。棚田であれば、その農地一枚ずつを図面に落として、その農地の所有者、面積、地目、実際の作物、耕作者、耕作放棄地になっているかどうか、などのデータと関連付けることで、地図上に様々な情報を落として「見える化」ができるようになります。農業班、集落班、環境班などのメンバーがGISを活用してそれぞれの班の取組に活用しています。

(9)SNSグループ

東京の学生が大蔵村のみなさんの役に立つことが期待できるのがSNSの活用ではないかと考えております。SNSグループでは、ゼミのホームページを作成・管理することでゼミ全体の紹介をし、より個人に情報を届けるためにtwitter、Instagram、facebook、Youtubeでゼミ活動や大蔵村の情報を発信しています。

(10)ジオラマ作成グループ

これは教員であるわたしより学生に提案したグループです。四ヶ村の棚田を訪問するたびに思っていたのですが、四ヶ村は地形的に起伏が激しく、いくつかの谷と尾根の中に4つの集落と棚田が点在しており、数回訪問しただけでは感覚的に方向をつかむことが難しかったことから、立体の地図をつくることではじめて訪れた人でもわかりやすくなるのではないか、という思いからジオラマをつくりました。ジオラマづくりはわたしの研究室で興味のある学生に作ってもらっていたことから、コロナ禍になり大学に入れなくなってしまったことから現在作成は中断してしまっています。

おわりに

ゼミでの訪問の際にいつもご対応いただいております大蔵村のみなさま、特に大蔵村役場のみなさま、四ヶ村地域のみなさま、山形県最上総合支庁のみなさま、宿泊では肘折温泉のみなさまには、調査のご対応に加え、移動のサポート等で大変お世話になっております。みなさまのご支援がなければゼミ活動はまったく成り立たず、本当にありがたく存じます。この場をお借りして感謝を申し上げます。コロナ前は一度にゼミ生全員で訪問をしていたのですが、現在は大勢での訪問が憚られることから、班ごとでの訪問やオンラインでのご相談などとさせていただいております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

分科会



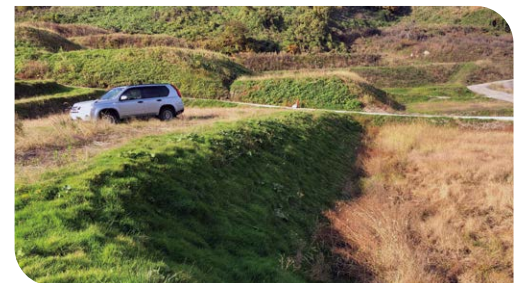
棚田オーナーの皆さんと体験交流



毎年、8月第1土曜日に開催される「四ヶ村の棚田ほたる火コンサート」



ラジコン草刈機による除草作業



芝の播種による畦畔管理(除草の軽減)



ぬかるみ圃場等解消のための棚田整備

テーマ 「棚田保全の方向性」

東京大学名誉教授 山路 永司 氏



1. 棚田の現在

棚田は文字通り「傾斜地に立地する棚状の水田」である。であれば、傾斜の急緩は問わないはずである。実際、極めて緩い傾斜に立地する水田を棚田と呼ぶ人もいる。とはいえ、一般には比較的傾斜が大きいものだけを棚田と言うのが共通認識であろう。

広島県立農業試験場の田中正邦・岡田正行は、「棚田の再開発(1978)」において、棚田を次のように定義した。

棚田は一般的には、「丘陵や台地地帯の地すべり地、狭小な谷底平野、台地の縁辺、小扇状地及び山麓の崩積地などに分布している。概して形状は細長く、その多くは樹枝状に造成され、階段工により自然傾斜を緩和した水田」を指す。この報告では資料整理上、傾斜1/20以上の水田を棚田として取扱う。(p.5)

彼らが棚田を傾斜1/20以上の水田としたのは、農林省農地局による農地面積調査の傾斜の区切りが、1/20, 1/100, 1/300, (1/1000)であったことが強く影響しているが、耕作者の実感にも合っており、特段の異論がなく、現在もその定義で合意されている。

その調査によると、1970(昭和45)年時点での傾斜1/20以上の水田面積は、34.50万ヘクタールであり、全水田面積343.48万ヘクタールのちょうど10.0パーセントだった。その後1993(平成5)年調査では、傾斜1/20以上は25万820ヘクタール(農振農用地区域内のみ)と集計された。こうした農地面積調査は何度か行われているが、毎回の調査方法が同じとは限らない。そこで中島(2007)の推計をも参考に、筆者は、現時点で傾斜1/20以上の棚田は、約20万ヘクタールと推定している。しかし、その全てが耕作されているわけではない。2000(平成12)年に開始された中山間地域等直接支払制度の交付金が支払われた急傾斜水田(=棚田)の面積は近年では15万ヘクタール前後であり、この面積が耕作されている棚田と言えよう。なお、交付金支払い面積があまり変動せずに維持されてきたことを、中島(2021)は本施策の効果として高く評価している。

田中・岡田(1978)に戻ると、本の表題は「棚田の再開発」であった。それは、棚田の労働生産性・土地生産性は平坦地水田に比べて低いために、再開発(=圃場整備)が不可欠と考えているからである。そして、圃場整備後には、稲作のみではなく、野菜、飼料、果樹、花卉花木、養鯉、工芸、鶏舎の導入を想定している。

棚田面積減少の最大の理由は、その労働生産性の低さ(=農作業のきつさ)である。自宅から棚田までの往復は坂道であり、それだけでもきつい。棚田に到着しても、区画が小さいため大型機械は入らず、小型機械さえ入らない田も多く、農作業の多くは手作業となる。機械作業においても、通作道や進入路が狭く傾斜がきつい場合が多く、農作業事故のリスクが大きい。土坡の棚田の場合、法面が広く除草に手間がかかると同時に、危険でもある。石垣の棚田の場合も除草は必要で、梯子を架けて作業することもある。単位面積あたりの農作業時間について、いくつかの測定が行われており、全国平均に比べ、1.5-2.0倍くらいの農作業時間を要している。末永ら(2010)は、福岡県星野村の棚田で調査し、全国平均の3.2倍、2.1倍という結果を報告している。

棚田稲作においては、圃場作業以外にも不利な点が多い。項目だけを列举すると、農道が整備されていない、水量や水温など用排水の制約が大きい、湿田状態が多い(これは農作業性にも影響する)、日照・通風が不十分なことが多い、である。一方、棚田は気温の日較差が大きいという

特徴を持っており、これを利することも可能である(詳細は後述する)。以上まとめると、棚田稲作には不利な要素が多く、耕作放棄が起きることを止めることは難しい。

一方、棚田は、稲作以外の多くの機能(多面的機能と称される)を有している。農業総合研究所(1998)は、洪水防止機能、水源涵養機能、土壌侵食防止機能、土砂崩壊防止機能、有機性廃棄物処理機能、大気浄化機能、気候緩和機能、保健休養機能を列举し、それぞれの価値を金銭評価している。これら諸機能のうち、とくに棚田(棚田地域)では、土壌侵食防止機能、土砂崩壊防止機能、保健休養機能(=良い環境と景観の提供)が大きい。この評価時点においては含まれていなかったが、現代では、棚田に暮らす生き物を守ること、すなわち生物多様性の保全を重視したい。

2. 棚田の価値と魅力

(1)棚田と芸術

棚田が「棚田」として認識され、多くの人がカメラのレンズを向けるようになったのは、それほど古いことではない(海老澤、2012)。しかし、日本人は古くから棚田景観の持つ文学性・叙情性に目を向け、和歌や俳句などの対象としてきた。

長野県千曲市の姨捨棚田は、古来「田毎の月」と呼ばれ、斜面に連続して存在する小さな水田が注目された。図1は歌川広重が描いた田毎の月である。現実にはあり得ない光景ではあるが、ここを歩くとこのように感じる景観が描写されている。

また、この棚田は、多くの俳人に詠まれている。

『おもかげや 姨(姥)ひとりなく 月の友』松尾芭蕉

『元旦は 田毎の月こそ 恋しけれ』同

『名月や どこにおっても 人の邪魔』小林一茶

『遠近(おちこち)や 月待つ夜の とまり客』柳沢簾雨



図1 信濃更科田毎月鏡台山

(2)棚田米の価値

近年、お米は品種のみならず、産地で選ぶ時代になっている。生産地の名前を付す場合もあれば、棚田で生産したことを強く主張する場合もある。筆者の経験ではおよそ20年前から、飲食店に「棚田米」の表示(ポスター、幟)を見かけているが、その数は多くはない。

棚田学会では、第10回のシンポジウム(2008年8月3日開催)で、「棚田米はどうして美味しいのか?」を開催した。生産者3名、消費者1名、お米屋さん1名、研究者1名の報告のあと、コーディネータにより議論が進められた(棚田学会誌第10号、2009)。

そこで提示されたのは、①清浄な水、②清浄な空気、③優しい風、④夜の涼風(気温の日較差)、⑤痩せた土(栄養過多でない土)、⑥ハゼ掛け(天日干し)、⑦耕作者の汗、⑧耕作者の温かい心、⑨オーナー制で自分でつくった、⑩粳で貯蔵、であった。全ての要素が棚田独自のものではないが、①②④は棚田独自のものと言えよう。⑦⑧⑨は、信頼感、安心感と言える。なお、前項では「日照・通風が不十分なことが多い」と記したが、外向きの棚田で、南ないし西向きであれば、むしろ良好な条件であると考えている。

表1 ふるさと納税返礼品における「棚田米」商品(菊地、2021)

返礼内容	件数	割合(%)
棚田米	537	73.0
棚田米加工品	125	17.0
地域の紹介	53	7.2
棚田地域旅行	17	2.3
棚田保全体験	7	1.0
棚田米の食事	5	0.7
その他	1	0.1
合 計	745	101.3

注:複数の返礼品があるため、合計は100%を超える

なお、お米屋さんからは、知名度の低い品種を売ることの難しさ、そして棚田米を販売することの難しさが報告された。

以上は10年以上前の議論であり、現在は、棚田米の認知度は高くなり、販売チャンネルも増えていると考えられる。そこで菊地(2021)は、ふるさと納税の返礼品としての「棚田米」を詳細に整理した。

表1は、返礼品に出てくる「棚田米」商品の累計である。棚田米が返礼品の一つとして位置づけられていることがわかる。続いて、返礼品「米」の中での返礼品「棚田米」のブランド価値を寄付額で比較している。それによると30品種の平均は1,952円/1kgに対し、棚田米の平均は2,012円/1kgと、若干の優位性を示している。本整理において「棚田米」の品種は特定されていないが、「特定の品種」+「棚田米」という整理がなされれば、より優位性が高まると推測される。

3. 棚田への着目と復権

棚田への着目は、故石塚克彦(劇団ふるさときゃらばん)の「発見」と紹介が大きかったとされている。石塚は、1998年10月に星野村棚田見学ツアーを実施し、多くの人々の目を棚田に向かわせた。前後するが、現在も続く棚田サミットが高知県檜原町で開催されたのは、1995年9月であった。これを機に全国棚田(千枚田)連絡協議会が結成され、現在に至っている。

市民団体としては、1995年12月に棚田支援市民ネットワークが設立された。その後2002年2月に棚田ネットワークと改名し、さらにNPO法人となった。

全国の優れた棚田を顕彰する棚田百選は、1999年7月26日に農林水産省により認定された。百選ではあったが、117市町村134ヶ所が選定されている。

同年8月3日には棚田学会が設立された。同学会は、さまざまな活動を繰り広げてきたが、棚田検定(2010年秋～2011年)を定着させることはできなかった。この頃より、棚田米への好イメージが形成されてきたのは、先述の通りである。

海外でも、バリ島の棚田景観が話題となり、棚田眺望の良いところにはレストランがあり、1泊数万円もする高級ヴィラ、リゾートホテルも営業している。棚田で最初に世界遺産に登録されたのは、フィリピンのイフガオ棚田(コルディリェーラの棚田群、1995年)であるが、後継者難で管理不十分となり、危機遺産指定された。これに対して地元自治体および大学は保全活動に力を入れ、危機遺産指定は取り消されたが、今後ともに良好な管理を続けるためには、たゆまぬ努力が必要である。なお世界遺産については、その後、インドネシア・ジャティルウィの棚田(トリ・ヒタ・カラナ哲学に基づくスバック灌漑システム、2012年)、中国・紅河ハニ棚田群(2013年)が登録されている。これら棚田は、良い意味でも悪い意味でも観光地化され、世界中から多くの観光客を集めている。

国内でも、日本遺産、世界農業遺産(世界重要農業遺産システム)、重要文化的景観の指定を受けた棚田がいくつか存在する。こうした景観の顕彰について、筆者なりに表5にまとめた。

ここで、文化的景観とは、地域における人々の生活または生業の理解のため欠くことのできないもの(文化財保護法第二条第1項第五号)と定義され、その中でも価値ある景観地について、重要文化的景観と選定できる。2021年10月現在で、71地区が選定され、そのうち約10地区が棚田および段畑を中心とした景観地である。

4. 中山間地域等直接支払制度(直接支払い、直払い)の効果

先に、本制度の効果は有効であったと述べたが、具体的な政策・取り組みについて、振り返っておきたい。本制度は、EUで1972年から徐々に整備されてきた条件不利地域施策を参考に、

2000(平成12)年から開始されたもので、中山間地域(≡傾斜地、棚田地域)の農業生産の維持を図りながら、農業の多面的機能を確保することを目的としている。

2020(令和2)年度の実績を見ると、集落協定数23,421、交付面積63.9万ha(対象農用地面積79.2万haの84.9%)であった。地目別には、田30.1万ha(うち急傾斜は139,800ha)、畑4.9万ha、草地27.5万ha、採草放牧地1.3万haであった。なお、別途個別協定が564ある。

集落協定は、単純平均で1協定あたり参加者23名、27haであり、220万円(1人あたり9.7万円)が支給されている。この僅かな金額が大きな効果をもたらしている。

実施すべき農業生産活動等では、耕作放棄の防止等の活動が重要であり必須となっている。

そのために、賃借権設定・農作業委託(32.8%)、荒廃農地の復旧(0.1%)、荒廃農地の林地化(0.0%)、既荒廃農地の保全管理(4.5%)、農地の法面管理(75.5%)、柵・ネット等の設置(50.9%)、限界的農地の林地化(0.1%)、簡易な基盤整備(6.8%)、担い手の確保(4.4%)、地場農産物の加工・販売(0.8%)、土地改良事業(0.4%)、自然災害を受けている農地の復旧(0.8%)、地目変換(0.0%)、その他(2.8%)が行われている。また、水路・農道等の管理についても、水路の管理(93.8%)、農道の管理(97.7%)、ため池や揚水機等その他の施設の管理(3.4%)がある。

農業生産活動等のもう一つの柱は、多面的機能を増進する活動である(こちらも必須)。国土保全機能を高める取組(周辺林地の下草刈り:68.0%、土壌流亡に配慮した営農:1.3%)、保健休養機能を高める取組(棚田オーナー制度:0.3%、市民農園等の開設・運営:0.4%、体験民宿(グリーン・ツーリズム:0.4%、景観作物の作付け:27.7%)、そして自然生態系の保全に資する取組(魚類・昆虫類の保護:1.6%、鳥類の餌場の確保:1.2%、粗放的畜産:0.7%、堆厩肥の施肥:8.5%、拮抗作物の利用:0.2%、合鴨・鯉の利用:0.2%、輪作の徹底:0.2%、緑肥作物の作付け:1.2%)、および、都市農村交流イベントの実施・学童等の農業体験の受入等その他活動(3.5%)である。

5. 棚田オーナー制度

多面的機能を増進する活動の一つの棚田オーナー制度について、少し述べておきたい。本制度は、棚田を都市住民に貸し出し、そこで農作業体験をさせ、収穫物を提供する制度である。都市住民に田植えや稲刈りの体験や農村空間でくつろぐ場を提供するのみでなく、都市農村交流を通じての当該地域の活性化や棚田の維持、耕作放棄の抑制といった効果も持っている。

名称は「オーナー制度」であるが、所有権、借地権、耕作権が都市住民側に発生する制度ではない。棚田トラスト制度あるいは棚田パートナーシップ制度と呼ぶ方がより適切であろう(まくだなど、2002)。

表2 棚田オーナー制度の実施地区数

都道府県	棚田ネットワーク調査	中山間直払での取り組み
1 北海道		
2 青森県		
3 岩手県		
4 宮城県		
5 秋田県	1	
6 山形県		
7 福島県	2	1
8 茨城県		
9 栃木県	5	2
10 群馬県	2	
11 埼玉県		1
12 千葉県	7	3
13 東京都		
14 神奈川県		
15 新潟県	7	9
16 富山県	2	3
17 石川県	1	2
18 福井県	1	2
19 山梨県	1	3
20 長野県	5	9
21 岐阜県	2	3
22 静岡県	1	1
23 愛知県		1
24 三重県	1	
25 滋賀県	2	3
26 京都府	1	3
27 大阪府		
28 兵庫県	5	4
29 奈良県	1	2
30 和歌山県		1
31 鳥取県	1	2
32 島根県	3	3
33 岡山県		
34 広島県		4
35 山口県	2	1
36 徳島県	1	
37 香川県	1	
38 愛媛県	2	1
39 高知県	1	1
40 福岡県	1	2
41 佐賀県	1	
42 長崎県	1	3
43 熊本県	3	1
44 大分県	2	1
45 宮崎県	1	1
46 鹿児島県		2
47 沖縄県		
合 計	67	75

本制度は全国で広く行われており、全国棚田(千枚田)連絡協議会によると、1990年に高知県梶原町で始まり、少しずつ全国に広まり、1999年には全国で28地区その後も微増を続け、近年ではおよそ70地区で行われている。その方式は少しずつ異なり、次のような分類が一般的である。

- I. 農業体験・交流型:田植え、草刈り、稲刈りなどの来訪が2〜3回。
- II. 農業体験・飯米確保型:一家の飯米を確保することが主目的。来訪は2〜3回。
- III. 作業参加・交流型:来訪の回数や作業の種類が増え、農業体験から一歩進んだ類型。
来訪の回数は、田起こし・田植え・草刈り・稲刈り・脱穀などの作業に4回以上参加。
- IV. 就農・交流型:来訪頻度が最も高く、年10回以上。作業には農機具を使用。
- V. 保全・支援型:金銭的支援、オーナー田の管理費や保存会等の組織の運営費にあてる。
NPO法人棚田ネットワークの調査によると、67地区のオーナー制度が表2に紹介されている。
(http://www.tanadaowner.com/all_list.html)。

上記のオーナー制度は、ホームページに記載され、誰もが応募することができるが、前項で示した中山間地域直接支払制度における棚田オーナー制度は、原則として応募者が当該地域に限られている。2020年度は75地区(0.3%)だったが、この地区数は毎年の変動が大きく、ピーク時には305地区で行われていた。このことは、オーナー制度の活動を長期的に維持することが難しい結果とも言える。

この持続性について、寺田・吉田(2005)は、指導者数や受け取る米の量が正の要因に、宿泊施設が負の要因になるとし、指導体制の充実、アクセシビリティの整備、資金・制度面での行政の支援が必要と述べている。これらを踏まえ、山路(2006)は、以下の提言をおこなっている。すなわち、①地権者・支援者・相続人の協力 ②事業収入の確保 ③地域としての魅力維持、である。

6. 四ヶ村の棚田保全の取り組み

本年7月に、サミット開催地である四ヶ村の棚田を見学する機会を得た。四ヶ村とは、豊牧、滝の沢、沼の台、平林の4集落の総称である。「四ヶ村の棚田」は、その4集落に広がる125haの棚田を指す。その概要は表3、位置関係は図2に示した通りである。勾配は1/10〜1/20と急であり、区画規模も小さい。

この4集落の水田面積、作付面積、水稻生産量は、表4の通りである。棚田での生産ではあるが、土地生産性(単収)は500kg/10aを超えている。

当地においては、「四ヶ村棚田保存委員会」が2002年に立ち上げられ、地元有志が地域活性化活動の中心となっている。

保存委員会の活動の概略は以下の通りである(山形県HP、および中島敏幸会長へのヒアリングによる)。

表4 四ヶ村棚田の面積と生産量

地区名	水田総面積 (㎡)	作付面積 (㎡)	水稻生産量(kg)			
			備蓄米	加工用米	主食用	合 計
豊牧	474,250	261,181	210	11,010	115,860	127,080
滝の沢	233,717	80,267	420	2,100	39,060	41,580
沼の台	379,516	221,627	4,590	12,030	96,300	112,920
平林	227,845	148,475	3,390	5,280	69,300	77,970
合 計	1,315,328	711,550	8,610	30,420	320,520	359,550

- 1) 景観整備:ビューポイントの整備、草刈り、説明看板の設置、案内看板の設置
- 2) 写真コンテストの開催
- 3) 地元園児たちによる田植えや稲刈り体験
- 4) 収穫祭
- 5) ほたる火コンサート:棚田をステージとし、ペットボトルにろうそくを灯した揺らぎのある灯りの下で、オカリナやピアノ等の演奏会が行われる。

7. 棚田保全の方向性

(1) 棚田の美しさを維持した基盤整備

棚田での稲作を続けるための第一は、生産環境の改善である。農道や用排水路を整備し、区画規模を大きくし、労働生産性を上げる必要がある。ただし、その整備の際には、棚田の美しさを保持する必要がある。美しさの感覚は人それぞれであるが、共通するのは、「整然としている」「きちんとしている」状況と、筆者は考えている。

棚田の圃場整備においては「等高線区画」という考え方がある。これは原地形の等高線になるべく沿って新しい区画を設計するという考え方である。そうすれば土の移動量も少ないので工事費も安く、かつ崩れにくく安定した水田に整備される。しかし原地形の等高線が複雑な場合は、多少の切り盛りは不可欠で、その際、区画の長辺が平行になるよう(=短辺方向の幅が一定になるよう)整備されることが望ましい。そうすれば、高い機械作業効率が期待できる。その意味では、こうした整備は「等幅区画」と呼ぶ方が適切と考えている。図3は、バリ島の等幅区画の棚田である。大型機械を使うわけではなく、耕起作業等は牛の労力に頼っているが、等幅であれば、作業に手戻りがない。

一方、長方形区画が悪いわけではない。原地形によっては、段差が急すぎたり、進入路が急になったりするため、どこでも適しているわけではない。樺平の棚田(山形県朝日町、土坡)、坂元の棚田(宮崎県日南市、石垣)は、長方形に整備して作業性を確保した上で、管理が良く、いずれも棚田百選に選ばれている。

基盤整備は、農道・用排水路・区画だけでなく、土壌改良、土層改善等も必要である。さらには、営農側の改善も不可欠で、共同作業、営農組合の設立、中核農家への委託等が計画される。これらをより効率的に進めるためには、適切な換地計画、所有権と耕作権の分離等も考える必要がある。

なお、農作業機械は、中山間地域には適さないという声もあるが、スマート農業技術の進展によって、自動法面除草機械、自走式小型ロボットトラクタ等の開発・導入をも見越すことが必要である。



図3 バリ島の等幅区画の棚田

(2)棚田米の販売チャンネル

消費者は棚田米に良いイメージを持っていることは先に述べた。その結果、多少高価であっても購入してくれる消費者は多い。しかし、より付加価値を付けることが望ましい。また、出所のはっきりした「純粋棚田米」、可能であれば「有機無農薬棚田米」を市場に流通させるチャンネルが必要である。ふるさと納税の返礼品はその一つであるが、東京・銀座の「おいしい山形プラザ」に、「やまがたの棚田20選」の棚田米を常備し、たとえば2合パック500円前後で販売し、味を知ってもらう。

(3)後継者の育成と「新たな棚田農」

棚田が高品質の棚田米を生産する可能性は述べたとおりであるが、(1)の基盤整備を行ってもなお、大幅な規模拡大は難しい。すなわち、棚田稲作のみを主たる収入源とすることは難しい。そこで、これまで棚田稲作を行ってきていただいた方々の後継者に加え、新たな就農者に期待する。

多くの業界で週休2日制が定着し、3日制を試行する企業も現れている。週末農業というよりも、週の半分を農に打ち込める人々が誕生している。コロナ禍を契機にリモートワークも業務によっては定着している。2地域居住という需要も大きい。農業を主としながら、他の仕事も行う「半農半X」という言葉は定着しているが、ここで言いたいのは、「半X半農」である。他産業を主にしながら、農業は片手間ではなく、しっかりと半分弱に従事するのである。

また、会社を退職する定年年齢は二極化が進むと思われる。これまで通りの60-65歳定年でも10-20年農業が可能であったが、早期退職者の受け皿も含めた「定年帰農」にも一定の人員が期待できる。

全国各地での棚田オーナー制度は、棚田稲作のみならず、地域活性化に有効である。しかしその継続が課題であることは先に述べた。継続の要は、非農業者を中心とするサポーターであり、その育成が必須と考えている。そこで、サポーターの育成に関して、二事例を紹介する。

一つは棚田ではないが、平地の荒廃農地・里山保全の市民団体の活動である。NPO法人手賀沼トラストは、手賀沼北岸の荒廃農地や里山を管理している市民団体である。荒廃農地では、もともと栽培されていた米、野菜、柑橘類を作るが、新たな作物や農法等も導入している。たとえば、ハーブ、養蜂、有機生態系稲作である。より楽しく、チャレンジングな農作業が可能となる。生産されたそば打ち、ヒマワリの種を取るだけでなく迷路にする、田んぼアートを行う、竹細工、わら細工をするなどの楽しみも忘れていない。ここでの最大の特徴は「里山農教室」である。年間20回程度、有機生態系農業を学び研究史、実践している。ここでの実践によって、学ぶ側から指導できる側への人材が育っており、この人材が遊休農地対応グループとして、活動を広げている。

もう一つは、棚田の事例：久留女木棚田(静岡県浜松市)である。まず1)棚田生産米を買うサポーターである。一般市民に呼びかけ数十名がサポーターになってくれている。サポーターは5000円を支払い、棚田稲作を支援し、お米2kgを受け取る。2)サポーター経験者のうち希望者は稲作体験ができる。参加費は無料としている。さらに、3)久留女木棚田塾を開催し、田起こしから精米までの稲作の全工程を学ぶことができる。受講料5000円を支払うが、お米を5-10kg受け取ることができる。そして、4)耕作会員である。全ての作業を自分で行なう。会費5000円を納めるが、収穫した全量を受け取ることができる。

このような段階を設定し、段階を踏んで、より自立的に耕作する制度によって、非農業者ではあるが、稲作技術を身につけた人々を育成することができる。もちろん、全員が一律の作業を行う一般のオーナー制度であっても、何年か継続した上で、より自立的な稲作に移行する

ことも可能であるが、久留女木のような設定があれば、非農業者である参加者も、目標を持って取り組むことができよう。

(4)棚田の顕彰

1999年の棚田百選は、棚田の価値を国民に広く報せ、百選の棚田では、維持する意欲が増したところが多い。このような顕彰制度は、国内的・国際的にさまざまなものがあり、それらを表5にまとめた。

もっとも有名でかつ価値あるものとされているのが世界遺産で、独特の自然景

観や、歴史的建造物が多く選ばれているが、農業関係もいくつか選ばれている。アフラージ灌漑施設(オマーン)、ビニャーレス溪谷(キューバ)、リュウゼツランの景観とテキーラ工場群(メキシコ)、オルチャ溪谷(イタリア)、エーランド島南部の農業景観(スウェーデン)などである。

棚田は、表5に示した通り、インドネシア、中国、フィリピンの代表的な棚田が選ばれている。なお、フィリピンのコルディリエーラの棚田は、イフガオ族の人々が管理してきた棚田そのものに加えて、長い間、口承で歌い継がれてきた詠唱も評価されている。「フードフッド」と呼ばれるその歌は、田植えや稲刈り、葬儀のときに歌われてきた。

わが国には日本遺産があるが、世界遺産に対応しているわけではない。その文化が形成されてきた歴史・ヒストリーに重点が置かれている。棚田では、2で紹介した娵捨が選ばれている。

農業関係に特化したものは、世界農業遺産(正確には世界重要農業遺産システム)と日本農業遺産である。どちらも、多くの棚田・傾斜農地が選ばれている。重要文化的景観については先に述べた。2004年成立の景観法に基づき、農振(農業振興地域)指定に、景観農振が加わった。景観を維持しながら農業振興をはかるという画期的な制度である。この景観農振に限らず、農業農村整備事業においては、環境や景観に配慮することが義務づけられ、「農業農村整備事業における景観配慮の手引き(2007)」、「農業農村整備事業における景観配慮の技術指針(2018)」が刊行され、また解説動画も作成されている。

「わが村は美しく」はドイツで始まった農村美化・活性化運動であり、これに学んで「農村アメニティコンクール」が実施された。ドイツの事業は「美しく」に重点を置くことから「活性化」に軸足を移し、「わが村には未来がある」コンクールに模様替えし、継続している。わが国では、2005年に「美の里づくりコンクール」に模様替えしたが、その後、一定の役割を果たしたとされ、事業は終了した。

以上は、いわばトップダウンの顕彰事業である。一方、フランスで始まった「フランスの美しい村連合」は、地方自治体の発議、ボトムアップによるもので、世界数カ国に広がり、わが国でも「日本で最も美しい村」連合が2005年に立ち上げられた。大蔵村は、設立当初より加盟しており、美しい村連合認定に必要な地域資源を維持し、磨きをかけている。

日本に棚田百選があり、棚田を愛する人が大勢いるのは知っていたが、世界にも棚田を含む傾斜農地を愛し、その保全に尽力するグループがあることを知った。世界傾斜農地会議(ITLA)は、日常的な活動を続け、数年に1回、大規模な集会を開催している。これまでに、ペルー

表5 農村地域資源の認定と顕彰	
世界遺産(自然遺産・文化遺産・複合遺産)(UNESCO)……日本遺産(文化庁) 農業農村関係は僅か バリ州の文化的景観:トリ・ヒタ・カラナ哲学に基づくスバック灌漑システム 紅河ハニ棚田群の文化的景観 フィリピン・コルディリエーラの棚田群	
世界重要農業遺産システム(FAO)……………日本農業遺産(農水省) 重要文化的景観(文化庁) 観法—景観農振(農水省)	
わが村は美しく(ドイツ)……………(農村アメニティコンクール) わが村には未来がある……………美の里づくりコンクール(農水省) フランスの美しい村連合……………「日本で最も美しい村」連合 世界で最も美しい村連合……………(当該自治体の連合) 世界傾斜農地会議……………棚田百選 ーやまがたの棚田20選、etc. 全国棚田(千枚田)協議	

のジャガイモ畑、中国の棚田、イタリアのブドウ畑、カナリア諸島の畑で開催されている。開催日数は10日近くに及び、2-3日の開会セッション、3-4日のフィールドワーク(数カ所に分かれる)、2-3日の閉会セッションと充実している。

棚田百選の各県版がいくつかあり、山形は20選の連合がある。この連合の力を結集し、活かすことが大切である。

(5)国民意識の醸成と政治の力

棚田地域の維持保全が、国土保全、地域保全・活性化の有力手段であることは、関係者は十分にわかっているが、広く国民に知れ渡っているわけではない。この周知と合意形成は、棚田学会・NPO法人棚田ネットワーク、全国棚田(千枚田)連絡協議会、いわゆる棚田3団体の重要な使命である。

この秋には、ポスト棚田百選(仮称)の募集・選考が行われる予定である。こうしたイベントを機に、多くの国民に棚田の必要性・重要性を知らせてゆきたい。

もちろん政策のサポートも重要であり、議員連盟の力に加え、棚田3団体のキーパーソン中島峰広早稲田大学名誉教授の尽力もあり、棚田地域振興法が2019(令和元)年に成立した。この法律に基づき、「指定棚田地域」の指定の申請、「指定棚田地域振興協議会」の設立、「指定棚田地域振興活動計画」の策定・認定の申請へと進めてゆく。そして、保全活動の実施にあたっては、表6に示した施策や、各省庁の関連事業を活用できる。棚田地域振興は、農林水産省のみの縦割りではなく、総務省、文部科学省、文化庁、林野庁、国土交通省、観光庁、文化庁、環境省、内閣府の40以上の事業が活用できる。

8. 四ヶ村の棚田地域の振興

(1)圃場整備の実施

まずは、四ヶ村の棚田4地区の区画規模の現状を知る必要がある。

ほたる火コンサートが開催される豊牧の棚田について航空写真地図をもとに耕区規模を測定してみた。棚田百選選定の12.5ha、134枚に限ると、その単純平均は933㎡である。これは法面部分も含んでいるので、実際の耕作面積は9畝に満たない。また長辺長は、40-70mくらいの

ものが多い。これをどう整備するかについては、今後の営農者の可能性を検討しながら、ボトムアップでの計画づくりに期待したい。

(2)地域資源を活かしたツーリズム

大蔵村には「単品の棚田だけ」ではなく多くの地域資源がある。コロナ禍で止まってはいたが、既にほたる火コンサート等が定着しているのは、前述の通りである。棚田の中では、ふるさと味来館、長沼のブナ林と展望台、排水トンネルの出口等も楽しめる。棚田に近い肘折温泉は、歴史ある湯だけではなく、朝市、ひじおりの灯、肘折幻想雪回廊等が魅力的である。村を出るが、最上川下りもセットで楽しめる。こうした地域資源群を広く発信し、多くの交流人口を育てることに期待したい。

引用文献

- 海老澤 衷(2012):棚田の魅力と棚田保全、千賀裕太郎編著「農村計画学」165-168.
- 菊地 稚奈(2021):ふるさと納税に見る「棚田米」のブランド構造、棚田学会誌、22、98-110.
- 末永 隆裕・平井 康丸・濱上 邦彦(2010):棚田の米生産における労働時間・生産費・所得の実態調査、システム農学、26(3)、119-126.
- 田中 正邦・岡田 正行(1978):棚田の再開発、日本の農業明日への歩み、
- 棚田学会(2009):棚田米はどうして美味しいのか?、棚田学会第十回シンポジウム、棚田学会誌、10、2-29.
- 寺田 憲治・吉田 謙太郎(2005):棚田オーナー制度の持続性に関する要因分析、農村計画論文集7、211-216.
- 中島 峰広(2007):全国市町村別の棚田分布について、8、69-74.
- 中島 峰広(2021):棚田の定義と谷地田、棚田学会誌、22、79-85.
- 農林省農業総合研究所(1998):代替法による農業・農村の公益的機能評価、農業総合研究、52(4)、113-138.
- 農林水産省農村振興局(2021):令和2年度 中山間地域等直接支払交付金の実施状況、1-33.
- まくどなると、あん(2002):棚田学会誌、3、34.
- 山路 永司(2006):棚田オーナー制度による農村アメニティの享受、農村計画学会誌25(3)、206-212.

参考文献

- 中島 峰広(1999):日本の棚田、1-252、古今書院.
- 棚田学会(2014):棚田学入門、1-228、勁草書房.
- 大蔵村資料

〈山路 永司氏 プロフィール〉

- 1989年 東京大学農学部助教授
- 1999年 東京大学大学院新領域創成科学研究科教授
- 2020年 東京大学名誉教授
- 棚田学会会長
- 農村計画学会顧問
- 日本景観学会理事
- 山崎農業研究所所長

第2分科会報告

テーマ 「棚田地域で外部人材ができること」

コーディネーター 落合 基継 氏 (早稲田大学社会科学総合学術院准教授)
パネラー 井上 果子 氏 (宮崎大学地域資源創成学部准教授)
内川 義行 氏 (信州大学農学部准教授)
武山 絵美 氏 (愛媛大学農学部教授)

落合： 第26回全国棚田(千枚田)サミットの分科会として、「棚田地域で外部人材ができること」サブテーマで「農村地域での調査研究や教育に関する大学の悩みと本音」を進めさせていただきたいと思います。

まずは、この分科会の趣旨について簡単にご紹介します。そもそも棚田サミットは、山形県の大蔵村で現地開催でしたので、私が分科会の1つを担当することになって当初考えていたのは、いつもお世話になってる四ヶ村の棚田の人にも出てきてもらって、あとは、学生にも並んでもらって話をしてみたいなというふうに思っていたんですけども、コロナの関係で現場での実施ができなくなってしまったということで、じゃあ、どうしようかなと。

今回オンラインでせっかくやるんだったら、日本で各地に散らばっている研究者と直接会うという機会もなかなかないので、であればオンラインでできることをやってみようというふうに考えて、今回、みなさんに一緒に集まっていたいて、この分科会を開くというふうになりました。

中身ですが私が学生を引率して農村地域で調査をする際に、単にお客さんになるのではなく、何か地域のためにできるような活動をするにはどうしたらいいかというふうな思いを持ちながら地域に入っていますが、一方で、経験の少ない学生が限られた訪問回数の中でどのような貢献ができるのかと、また、こういった大学の活動が地域の皆さんからはどのように思われているのかというふうな不安もあります。

地域づくりをすごい活発にやっているとところに行くと、視察をしたときには、「ここでなぜこんなにうまくいったと思いますか」と。「大学が来なかったからです」というふうな嫌味を言われたりとか。ある地域に行ったら、直接私に言ったわけじゃないんですけども、「中山間地域の研究っていうのは、中山間のためにやっているとよりは、研究者のためにやっているとじゃないですか」とかっていうことを言われたりとかいうふうなことで、日々、地域に貢献ができてくるのかということは、悩みながら活動してるということがあります。

そういったこともありましたので、外部人材の1つである大学が、地域とどのようにお付き合いや交流をして、どのような形で貢献ができるのかと、こういうことについて、全国でいそしんでおられる大学教員と、これまでの経験や問題意識を共有し、棚田サミット参加者に多くいらっしゃる地元の棚田保全のグループ、それから、自治体職員の皆さまにも共有していただき、今後の交流や連携をより良いものにしていきたいと考えている、これが今回の趣旨になります。

登壇者のご紹介です。私を含めて、今回は4人でと考えています。宮崎大学の地域資源創成学部、井上果子さんです。よろしくお願ひします。それから、信州大学農学部の内川義行さんです。よろしくお願ひいたします。それから、愛媛大学農学部の武山絵美さんです。よろしくお願ひいたします。それから、私、早稲田大学の社会科学部の落合と申します。この4人でやってきたいと思います。

地域での活動、それから、ご自分の研究も非常に活発にやってらっしゃるという方に今

回依頼をしたということでございます。大変心強い仲間が集まってもらったというふうに思っています。

では、ここからですが、私の大学、学生と一緒に地域にお世話になってる状況について少しご紹介をして、学生に対してとか、地域に対してどういうふうな考えを持ってやってるのかということをお話しできればというふうに思っています。

◆早稲田大学・落合より活動の紹介

他の皆さんと少し違うのは、私だけが私立大学の教員であるということと、それから、東京のど真ん中にある大学ということ、学生数が多いということです。それから、大学院よりも学部の学生が多いということと、現地とどうしても距離があるということがあります。そういった事情の中でやってるところが他の3人とはちょっと違うところかなと思います。

私、今、農村デザイン研究ゼミを担当しています。ここは、学部生のゼミになります。配属が2年生の秋学期、後期からになります。ですの、もう間もなく新しい2年生が入ってくるという予定になってます。それから、4年生でおおよそ卒業していきますので、合計2年半、このゼミには所属をするということになっています。

現在の状況ですが、4年生が23名、3年生が24名所属しています。この10月から2年生が13名所属しています。小学校で言うと、2クラス分ぐらいです。

人数がちょっと減ってるのも、ちょっとのんびりしてる学生も多かったの、で、「いやいや、地域に入って、大変責任あるような活動だから」という話をしたら、少し少なくなってしまったと、そんなような事情もあります。

今、学生は、山形県の大蔵村の四ヶ村地区と、静岡県伊豆市の茅野地区というところにお世話になっています。その山形と静岡では、学生がそれぞれ班、グループをつくって活動してる。これについては、後ほどお話をしたいというふうに考えてます。

こういった訪問や関わりっていうのは、継続的なものと考えています。1回行っていろんな話を聞いて、おしまいってことじゃなくて、何回、5回とか、6回とかいうふうに通って、その中で、学生なりに地域で何かできることはあるのかなということを考えてもらってるということになります。

これら2カ所以外にも、独自に、1人で、耕作放棄地の研究してる者と、食育のこと、農村の交通の問題とか、都市農業と、こういったことを研究してるというふうな人たちになっています。

少し、山形と静岡の状況について具体的にお話をさせていただきます。山形の大蔵村四ヶ村地区で、この四ヶ村の棚田が、日本の棚田百選の地域にもなっていて、夏はこんな感じ、冬は山形でも非常に雪の多いところで、4メートルの積雪があるような地域です。そういうところも学生に見てほしいなということもあって、こういう地区にお願いをしました。

このように地元の方に学生がインタビューをしたり、コロナ前なのでこんな感じでやっていますが、それから、自分たちで考えてきたことを地元の皆さんとか、役場の皆さんにプレゼンをして、「この地域、こんなことを今後していったらいいかでしょうか」というふうな話もしたりしています。

この山形についてなんですけれども、訪問のきっかけは、山形県庁に知り合いの方がいらっしゃいまして、学生と一緒に勉強できるような場所がないかということでご相談をしたところ、こちらの大蔵村の四ヶ村地区をご紹介いただいたということでございます。

ですの、役場の皆さんとか、地区の皆さんにしてみれば、降って湧いたような話ということですね。私のほうからは、地域の皆さんとか役場の皆さんには、「早稲田の学生、都市の出身者が多くて、農村部のことは全然存じ上げないということなので、まずは訪問をさせていただきたいと。で、いろいろ見せてほしい。話を聞かせてほしい」というふうな話をしました。

それから、「継続的に訪問させていただいて、10教えてもらったら、1でも2でもお返しができる」というふうに考えています」というふうなことで、お話をさせていただきました。ですので、お客さんとしてということよりは、少し、何か地域のためにできればなというふうなことを申し上げたということでございます。

学生は、農業班、集落班、環境班、文化班、6次産業化班、観光班と、6つの班編成ということにしました。この6つについては、学生に最初に、どんなことに興味があるのかということいろいろテーマを出してもらって、その中から私のほうで6つ班を構成して、希望の班ということで手を挙げてもらって、班編成にしました。あんまり、学生はやりたくない班に入れても全然動いてくれないかなというふうに思いましたので、こういうふうにしました。ですので、ある班は2人しかいないけれども、ある班は5人いたりとか、そんなような状況になっています。

これらの班の横串を通すように、SNS班、映像班とか、GIS班というのを組んで、それぞれの班の事情でSNSで発信したりなどしています。ですので、SNS班なんかは、ツイッターの発信をしたりとか、インスタで発信をしたりとか、フェイスブックでと。それから、ホームページつくってもらったりとか。映像班、映像撮って、ユーチューブのチャンネルをつくって、そこで出してもらったりとか。それから、GISの班には、地域の土地利用とか、そういうのを落としてもらってと、そんなような活動をしています。

訪問については、基本的には、夏休みと春休みの1回ずつで、年に2回。1回当たり2泊3日というふうな形で訪問しています。山形の大蔵村までは、東京からだとは新幹線で3時間かかって、そこから車で30分ということで、お金もそれなりにかかってしまうので、学生が行けるのもこれぐらい。4年生までですので、4回、5回とかから、それ以外にも通うと6回とか、それぐらいの回数になるということなんですね。これが多いか少ないかというのは、何とも言えないところなんですから、こういった形で通っています。

年2回ですけれども、その間に学生と地元の皆さんで、例えば農業班だったら、棚田保存会の方とかと連絡を取り合ってとかいうふうな、観光班だったら、観光協会の人と連絡をしたりとかいうふうなことで活動しているということになります。

学生としては、学生に必ずしも確認してるわけじゃないんですけれども、学生がどういう思いで行ってくれてるかっていうのは、学生なりに地域に貢献できればというスタンスで行ってもらってるというふうに思っています。

現地の皆さんの考えは、私の想像なんですけれども、山形県の職員の方からは、大学・学生には地域活性化に貢献してほしいと。地域で暴れ回ってほしいっていうと、ちょっと語弊のある言い方かもしれないんですけども、やっぱり、高齢化が進んで、過疎化が進んでる地域で、学生に地域を元気づけてほしいというふうな思いで、お話を普段させていただいております。

一方、役場の皆さんとか四ヶ村の地域の方なんかは、何となくですけれども、やっぱり、お客さんとして受け入れていただいているというふうな形になるかと思います。東京から年に2回来るということで、何か地域のためにできるとかいうこともなかなか難しいんじゃないかと、そんなふうな思いをお持ちになられてるのかなと思っています。

ただ、去年卒業した学生なんかは、お邪魔する回数を重ねて、かなりいろいろな提案なんかをしたところ、それ自体が採用されるっていうことはなかったんですけども、ただ、学生、何かやってくれるんだなというふうなことで、少し、お客さんとしての受け入れから、少しだけ先に進めるかもしれないと、そんなような雰囲気があったんですけど、コロナになってしまって、ちょっと、その辺りが今、滞ってしまっているという状況になります。

次が、静岡県の伊豆市の茅野地区というところ。浄蓮の滝があって、天城越えのある地区になります。伊豆半島の真ん中ですね。このようにワサビ田がたくさんあるところです。田ん

ぼよりもワサビ田のほうがたくさんあるような地域に今、学生と通っています。

訪問のきっかけは、静岡県庁の職員の方から。県庁の職員の方が、静岡県内のいろんな地域に、いろんなアンケートをする中の1つに、「大学と連携をして、いろいろ活動したいような地域ありますか」というような質問をアンケートの中に入れてもらったので、そこで、やりたいというふうにご回答いただいたところから、何か所とかとお話をさせていただいて、具体的に受け入れていただけたのが、こちらの茅野地区というふうなことでした。そういう点で、山形の場合とは少しスタンスが違います。

役場・地域への説明、全く同じです。継続的に訪問させてもらって、10教えてもらったら1でも2でもお返しできればと考えてますと申し上げました。

班については、観光・レジャー班、広報班、食資源活用班、少子高齢化・移住対策班、獣害対策班と、ちょっと山形とは違うんですけど、これも、最初に通った学生たちの希望ということで、このような形にしました。

それから、訪問は年2回、2泊3日と。山形とこちらの伊豆で違うのは、伊豆のほう東京からだとはアクセスがしやすいということもあるので、夏休み・春休みに限らず、少し、学生に通ってもらえればと思ったところで、コロナになってしまったというふうな状況になっています。

学生としてはやはり、地域に貢献できればというふうなところはあるんですが、現地のお考えとしては、県の方は、やはり地域活性化に貢献してほしいという感じです。市役所の方、静観って書いてるのは、県から直接、地元のほうをご紹介していただいたということもあるので、市役所の人は、「何かあればサポートしますよ」というふうなことは言っていたという意味です。地区の皆さんは非常に、前から地域づくりというのを一生懸命やられてる地域で、ぜひ、地区の活動に参加して、何か、学生なりに貢献をしてほしいという思いでいらっしゃる。

先ほど紹介した班ごとに、地域の住民の方3名ぐらいを担当として付けていただいて、ラインのグループをつくって普段から連絡を合っています。ただ、学生からの連絡があまりに少ないので、「おいおい、何してんだ、おまえら」と、逆に、向こうからつつかれるような状況になると、そんなようなところになっています。

以上、ゼミで通ってる2カ所での状況について簡単にご紹介をしました。

ここからが、後でお話いただく3人の方と共通で少し考えていきたいというところなんですけども、大学の地域での活動の目的っていうのは、大きく分けて、教育効果と地域貢献があるのかなと。もう一つは、自分たちの研究という面があるかと思いますけれども、実は、私がまだ、そこまで手が届いてないところが正直あるので、今回はこの2つというふうなことにさせていただきました。皆さんからは、ぜひ、研究面でのお話もあれば、ご紹介もしていただけるとありがたいと思います。

この教育効果と地域貢献を考えると、学生が現場・実践で農業・農村を知ることが大事だし、それが、地域が学生を受け入れることで維持・発展につなげるということ、これが一番大きな目的になるのかなと思います。

それに対して重要なことは、受け入れ側・地域側と、こちら側・訪問側との思いというか、考えというか、つまりというか、それを共有するのが大事なかなと考えています。

つまり、こちらががっついて行って、向こうがお客さんとしてとか、こちらが割と、ちょっと勉強させてくださいっていうスタンスで行って、向こうは、いやいや、もっともっと来なさいよと、そこら辺の「すれ違い」みたいながあると、あんまり、お互いにとって良くないかなと。そこら辺をどういうふうに関共有するのかというふうなところが大事なかなと思っています。その上で、地域の維持・発展に少しでも貢献できればいいなということです。

一方、大学側としては、特に私たちは、訪問でただけで、学生にとって教育的に得るものが

非常に大きいということがあります。ただ、それだけじゃものをもらうだけもらって帰るみたいなことになるので、10のうち1でも2でもってというのは、そういう意味で、何かお返しができればなど日々思っているところです。

これ、神戸大学の中塚さんが、小田切先生と一緒につくられた論文の中で紹介している、大学と地域の連携のタイプについて紹介しているものです。連携の深さによって、交流型、価値創出型、課題解決実践型、知識共有型というのを紹介されています。

簡単に紹介すると、交流型は、農作業・イベントを地元の人と行ったり単発的に一緒に活動する。価値創出型は、地域の新しい価値発見を目指す。まちの学生が地域外から入ってきて、地域の人たちが気付かなかったこと、もう忘れてしまってたことを地元の人たちに思い出させる、そんなようなタイプ。3つ目の課題解決実践型は、新しく見つけた課題とか発見に対して、一緒に地元の人と学生と活動していくようなタイプ。だから、この交流、価値創出、課題実践型っていうのは、少しずつ学生の関わりが深くなっていく、地元の方々の思いも深くなっていく、そんなように捉えられます

知識共有型というのは、教員や大学院生が中心となって、専門知識をもって地域課題の解決に貢献しているタイプ。ですので、ちょっと、私がイメージする学生の交流のものとは少し違うんですけれども、大学と地域のお付き合いの仕方としては、こういう形も結構あるんじゃないか。例えば、地域づくりのワークショップなんかをやるときにファシリテーターで入って、じゃあ、地域のビジョンをみんなでつくりましょうみたいな、そういうときはこういうのも入ってくるのかなと、そんなふうに思っています。

それから、これは地域連携じゃないんですけれども、見学受け入れ型。これ、勝手に私つくりました。この交流型より、さらに、もっと、もっと、浅い関係というか、学生が一時的に地域を訪問して、インタビューなんかをして勉強するタイプというふうなことです。

こういうふうなことが地域の連携として、いろいろな深さっていうのがあるがと思います。大学側としては、どの辺りを目指してるのかということを地域の人にお話をしたりとか、地域の人たちも、この中でどういうタイプで大学と関わりたいのかと、関わってもいいのかというふうなところをうまくちゃんと共有をしないと、ミスマッチになってしまうところもあるのかなというふうに考えています。

別に、こんな大々的に表をつくる必要もなかったんですけども、例えば、教員の思いは、学生にも地域にも一緒に活動してもらいましょうよっていうふうに張り切っても、学生としてみれば、交流ぐらいで考えて地域に入りました。行政の人は、暴れてくださいって思ってたんだけど、地域の方は、そこまでできないだろうぐらいの感じで、みんな、お互いに考えがばらばらになると、大学としても、効果があったと思って、効果と思ってもらえないっていうこともあるだろうし、いろいろな、うまくいかないところがあるのかなと考えています。

ですので、これを、じゃあ、課題実践型に無理やり持っていくのがいいことなのか、それとも、それをみんな、少し、交流型までハードルを下げたほうがいいのか、それとも、地域に合わせてやる、いろいろなパターンがあると思います。ただ、こういったところをしっかりと合わせておかないといけないのかなと思います。

ただ、合わせるといっても地元の人からしてみれば、大学がそこまでできっこないだろうって思われるところもあるかもしれないし、学生だって、俺たちそこまでやるつもりないのになんと思ったりとか、教員側からしてみると、もうちょっと学生に頑張ってもらいたいとか、地域の皆さんももうちょっとやる気になってもらえないかなとか、そういうふうなところがあって、矢印書いたはいいけれども、こんなふうに簡単にいかないんじゃないか。そこをどんなふうに乗り越えていかなきゃいけないのかなというふうなところを知ればなっていうふうに思ってる

ところがあります。

まとめとして、私の考えるところでは、学生側と地域側へのアプローチがあるのかなと考えて、こんなふうにまとめてみました。レベルの設定と深化ということで、学生がどこまでできるかっていうのをまず判断しなきゃいけないということがあります。あんまり深く求めたところで、学生側だってそこまで付いてこれないということもある。ただ、教育効果を考慮すると、なるべく高く設定したいっていうところが、教員としてもあります。そこは、ちょっと見極めが難しいなど日々思っています。最初は低く設定しても、学生が地域を理解したり、地域とお付き合いをするっていうこと自体を理解して、その連携を深化させるような形にどう持っていくのかと、この辺りも今、試行錯誤しながらやってるところです。

それから、これを学生にどう伝達するのかっていうところが難しい。学生に地域で活動することの意義を説明しないとイケないし、それから、当事者性の説明。学生の中には非常に張り切って、意識高い系という言い方をしてしまうと良くないかもしれないんですが、俺が地域を変えてやる、俺がやるんだみたいな、すごい思いを持ってくれる学生もいるんですけども、しょせん東京から行く学生で、ずっとそこに住むわけでもなくて、年に2回行く学生で、向こうの地域の人たちの暮らしもそこまで分かってなくてというふうな人たちが、よそから行ってどれだけのできるのかと。鼻を折るわけではないんですが、やっぱり、現実を知ってもらうっていうふうなこともお話をしたりとか。

ただ、一方で、やっぱり、地元の皆さんがもう高齢だし、次の世代の多くお出でっちゃったしなって、地域の将来に対してあまり明るく思っていない人たちに対して、どういうふうに明るくならしてもらって、何か次にやろうというふうな気持ちになってもらうのか、そういったところにも何とか学生に関わってほしいなっていうところを伝えたいとは思ってるんですが、どこまで、そこら辺が学生に理解してもらってるのかということを考えたりしています。

そういった地域の人たちの思いも学生に伝えなきゃいけないということで、日々やってるんですけども、自分が学生だったら、そんなこと教員に言われても、多分、理解できないだろうなって思ったりもしています。それをどういうふうに伝えるのか。それが、現場に行くことが大事なのかなっていうことの1つというふうに思ってるんですけども、そんなふうに、学生へのアプローチとしてはそんなことを考えたりしてます。

一方、地域側へのアプローチについては、地域への伝達ということで、大学側の考えとか、状況、学生っていうのはそんなに、何でもかんでもできるわけじゃなくて、地域にそんなに回数も来なくてと、お客さんだけでも何かできれば、ぐらいで、そこら辺の状況も事前に、正確に伝えたいなっていうこともあります。

それから、当事者性について大学は理解をしているということを伝えるのは大事かと思えます。「しょせん、よそから来たんだろ。お客さんだろ」っていうふうな目じゃなくて、それは分かった上で、何かしたいんですっていうふうなことを理解してもらえればいいなっていうふうに思ってるということと、それから、地域にも深化をしてもらいたい、深くなってもらいたい。継続的に訪問して、実際に学生の姿勢を確認してもらって、ただのお客さんじゃなくて、何か地域のためにやってくれそうだなと思ってもらえるような、地域側にも変化をしてもらえるような、そういうことも、こちらとしてはできればなど。ここら辺は理想になってくるんですけども、そんなふうに考えてます。

ですので、このマッチングについては、最初はハードルをいったんぐっと下げて、できるところから入って、少しずつ学生と教員が、こんなことがしたいんですということを地域の人たちと話をしていって、地域の人たちも、じゃあこれもやってみるかっていうことで、少しずつ次のステップに行ければなというふうに考えてます。

ただ、ここまで行くためには、時間にかかるし、通うためのお金にかかるし、後の方からもお話があると思うんですが、学生も入れ替わるということもあったりとか、それから、行政の担当者の方も代わるしとか、いろいろな問題があったりして、なかなかスムーズに行かないところもあって。今回のコロナみたいなことがあると、今度は移動ができないなどの新しいハードルができたりして、なかなか難しいんですけども、こういったことで将来的には進めていければと個人的には考えているところです。なかなかこういった話ってというのは、地元の役場の皆さんとか地元の方と、ざっくばらんにお話ができるようなこともないということもあって、今回、研究者の中で話をする中で、そういったことも情報共有ができればなと、今後の議論のスタートにできればなというふうに考えていたところです。

これから3人の皆さんにお話をさせていただきますが、後で、こんなふうなテーマで少しお話ができればと考えています。学生と地域に訪問するときには、学生に注意して伝えていることはあるか。一方、役場の方とか、地元の方に伝えるときに、何か注意していることはあるか。学生と訪問していて、ちょっと困ったなというような経験はあるか。今後、学生と地域を訪問するときに、受け入れ側の方をお願いしたいことはある。一方、大学側として気を付けることは何か。こんなことで、少し、共通のお話ができればと思っています。

私からは、以上になります。

そうしましたら、次、お三方から、いろいろご紹介をいただければと思います。じゃあ、井上さんからお願いしてよろしいでしょうか。

◆宮崎大学・井上果子さん

井上： では、私のほうから、宮崎県に来てちょうど丸6年経過して、これまで経験したことをベースにお話しさせていただきたいと思います。まず、学生を連れて地域に行くことの前提となる情報を最初にちょっとお話ししたいと思います。

私自身は、地域資源創成学部という、地域の資源を創成していくということが宣言されているような学部におりまして、地域資源創成学部が設立されたのが2016年の4月で、地域からの期待を受けて、地域からの求めもあった上で、地域と共に歩むというミッションもある程度ある中で始まった学部になります。

1学年90人程度の学生がおりまして、学生を連れて地域に入るという意味では、私自身の関わりとしては2パターンあります。1つは、1学年90人全員が、1年生の前期から必修で地域に、入らなくてはいけない。その実践教育を担当する教員の一員として関わるということが、最初のパターンです。

次のパターンとしては、落合先生と類似していて、ゼミの活動としてゼミの学生と共に地域で活動する、そういった2パターンがあります。その1つ目の必修の場合は、カリキュラムの枠がある程度ありますので、あまり一教員がクリエイティブにデザインすることが難しいところもある。一方、ゼミの方は何でも思うように、学生の状況を見ながら、まさに、落合先生のように、自分でいろいろと企画したり、学生や地域と一緒に考えることができる活動になります。ゼミには、大体毎年、3人から5人入ってきまして、入ってくる時期というのは落合先生と一緒に、2年の後期からになっています。だいたい少人数です。

今日は、「気持ちでつながる農村網の構築を目指して」と題して、お話しさせていただきたいと思います。

最初に、他の先生方と私、ちょっと違う経歴を持っていますので、自己紹介をさせていただきます。まず、農村ネーティブと書いているのですが、長崎県北松浦郡佐々町の出身

です。緑豊かで、特に、佐々川という川の資源がとても豊かにあるところで、近所に専業農家・兼業農家のおじさん・おばさんがたくさんいて、同級生もそういう農家の娘・息子もたくさんいて、私自身すごくインドア派なんですけれども、無理やり、川とか山で遊ばせられていたとか、竹馬をつくって乗るために竹を山に取りに行ったりとか、たまに川でシラウオ取りをしたりとか、そういったことをやっていました。

そんなところで育ったのですが、留学とか海外での経験を長く積みまして、15年ぐらい海外の地域づくりに関わるようなことであったりとか、政策協議であったりとか、いろいろな経験をさせていただきました。2009年に思い立って、社会人博士課程に入りまして、ベトナム北部の紅河デルタの農村研究を博士論文研究で行いました。

博士課程の研究で紅河デルタに入っていて、何となく、私の研究のために農村の人を使ったような罪悪感が生まれてきまして、フィールドワークたくさんして、地域の方にすごくお世話になっているにもかかわらず、これは私の研究の博士課程を取るためだけに、私はベトナムの農村の人たちと関わっているのか、と。やっぱり、もやもやするような気持ちがあって。研究成果として、こういうふうになったら地域が発展するのになとか、発展するという言葉、ちょっと語弊があるかもしれないんですけど、皆が生き生きとより希望に満ちた暮らしができるんじゃないかっていう、そういうメカニズム、内発的発展のメカニズムが研究である程度、私なりに納得できるものが成果として出たにもかかわらず、それを実践せずに去っていくっていうのが、やっぱり、どうしてもできなくて。そういう経緯もあって、JICAさんから支援をいただいて、博士課程の成果を踏まえながら3年間、現地でNGOを登録するような形で実践活動を行いました。その地域とは、研究も含めて、2009年、2010年ぐらいからのお付き合いとなっていて、NGOの実践者としても、研究者としても、後でちょっと触れますが、教育者としても関わり続けているという状況です。

そのように宮崎に来る前に、いろいろと実践し、成果を出すようになると、大学に限らず、いろいろなところから受け入れを依頼される立場も経験しました。そういったことで、今回の発表の中には、受け入れを依頼されて私自身が経験したことを踏まえて、今まで、この6年間、宮崎県で、教育ないし、研究で地域を訪問する際に、どういったことがあったのかっていうことのご紹介と、それらを踏まえて私なりに、地域の課題、人づくり・教育と向き合うっていうのはどういうことなのかということを試行錯誤しながら感じていることを今日お話ししたいと思います。

まず、最初に、ベトナムでの実践で、どういったことをしたのか。端的に言うと、6次産業化をベトナムでやりました。北部の紅河デルタ地域は零細農家が多くて、自給のためのコメづくりがされているところなんですけど、食の安全が問題になる中で、無農薬、無化肥、SRI農法による稲作の推進と、あと、記録を付けたりとかしながら、トレーサビリティできるようなトラストシステム、自分たちで名付けたシステム使って、消費者・都市と直接結ぶというような活動をしました。

ちょっと日本と違うのは、女性がかかなり主要な労働力、農業従事者となっているのですが、プロジェクトに参加してたのはほとんどが女性だったんです。集落でみんなで一体となって、ロゴをつくったり、商品名を検討したり、ワークショップしたりとかしながら、自分たちのプロジェクトとして温めていったという経緯があります。

やっぱり、収穫のときが一番楽しい。みんな楽しそうな写真ですね。みんなで作ったんだってということで、ラベルとかもつくって、直接販売して、都市の人たちに直接デリバリーする。配達するような係の人にも集落の中から出して。それから、価格ですね。仲買

人とか流通を通さないことによって、消費者にとってはちょっと高いぐらいで、生産者にとっては、元々の3倍ぐらいの実入りがあるような形で活動が続けていったら、だんだんと注目されるようになって、参加する農家も増えてきたというようなこともありました。

そうなってくると、初めて6次化成功した事例だったみたいで、ベトナムで、かなりテレビが来たりとか、新聞で取り上げられたりとか。あと、面白かったのが、これで頑張っていた農家さんが、いきなり共産党の偉い人になったり、結構プロモートされて、注目されるようになってくるんですね。そうすると、研修も含めて現地を訪問したいという問い合わせがたくさん来るようになって。具体的にどういうことがあったかという、ベトナムの研究者が、ここで別の事業をしようと入ってきて、ただ、やっぱり、うまくいかず撤退したり。あと、日本企業も生産地として注目し、労働力としてもベトナムを注目していることが多かったので、視察に来たりするんです。これはちょっと大変だったんですが、直接は来なくて、ベトナムのコーディネート団体が手配するんですが、結構、詐欺っぽいというか、大変なことがあって、私、日本の企業に助けてもらおうと思って直接電話したら、何のことも全然分からなかったりとか、すごく温度差を感じました。

大学から教育プログラムの受入をお願いしたいという依頼があって、それもお受けしたんですが、大学は全然問題なく、すごく意思疎通もできたんですが、やっぱり、お金を出す側、そのほうが、ほんとにここは教育の対象として値するのかっていう協力する私達が評価の対象になってしまったり、こちら、善意で対応してるんですが、逆に、テストされているような感じがありました。

そのとき落合先生と同じように、何かちょっとでも地域のためになることでできませんかと相談されて、地域の方とも考えて、何か形に見えるものを受け取ってあげたほうがいいみたいよといった感じで絞りだしました。ベトナムではごみ箱という発想がないので、みんな食べたものをぼんってそこら辺に捨てたりとかするので、農地のあぜ道とかにごみ箱を置いてきれいにする習慣をつくろうかということで、ごみ箱を寄贈いただいたことがありました。

あと、日本の調査研究者も、よく分からないですけど、メールでほんと来たり、JICAさん通じて依頼が来たりして、協力もするんですが、あれは何だったんだろうっていうようなことが、やっぱり、多いですね。フィードバックがない。

受け入れる側の視点からは、具体的なメリットは思いつきません。特にベトナムの場合は人も多いです、貧困ではあるんだけど、それに直接、一時的に来た人が何かしてくれて、貧困の状況が改善するというわけでもないです。来たいんだったらどうぞと、お役に立てることがあればという善意で対応していることが多い。

ただ、それとは裏腹に、この事例の場合は目立ったからたくさん受け入れ依頼が来たというのものもあるかもしれないのですが、目立たなくても、例えば、農家さんたちは仲買人から買ったたかれた経験であったりとか、弱い存在としていろいろと使われてきた、それこそ、収奪されてきた経験が、やっぱり、根っこのところでずっと積み重ねてきたものがある地域もある。そういうところは、外部者が来たということで、素直に接することはしにくい地域、警戒している地域でもありうる。

なので、私自身も最初、地域に研究者として入ったにもかかわらず、仲買人と間違えられて、「幾らで買ってくれるんだ」って交渉されたこともあります。過去の経験の積み重ねであったり、地域の状況によって、だいぶ違うのかなという気もします。

そういった経験を踏まえて、2015年の9月に宮崎大学に着任したのですが、さっきの落合先生のお話で、やる気満々の学生と全く同じような状況で、よっしゃと、日本を変えて

やる、みたいな勢いで私は宮崎に来たんですね。どんなことができるんだろうって。私は農村出身で、農村のこと分かってますみたいな感じで。ただ、そんなに甘くなかった。

それに関しては、具体的にご紹介しますと、やっぱり、「国際協力学」という、ぼやっとした博士号の意味が分かりにくいっていうのと、あと、思った以上に女性って大変なんだということをこの歳になって初めて気がついた。今まで海外では、日本人というアイデンティティーでずっと仕事をしていて、あんまり女性っていうアイデンティティーを自分自身で気にしたことはなかったのですが、日本に帰ってきて初めて、仕事の上で女性であることが関係するということに気が付くことになりました。具体的には、例えば「地域の国際事業に協力してください」と言われたときにあったのは、何か私がクリエイティブな企画をすると、すごく拒絶反応があったりとか。やっぱり、女性はサポート役に徹しなければいけないのかと。こちらは協力している気になってるのですが、私、今もそうですけど、はっきりと意見を言うので、それで結構、好ましく思われてなかったんじゃないかなってということもありました。あと、英語の先生と見られたり、国際の先生と見られてるので、地域づくりの仲間に入れていただくこと自体が発想としてないというか、そういうのはありました。

地域と、人と人との間でトラブルというのは付きもので、そういうトラブルが起こったときに、日本全体的に、誰かの責任を問うような、そういう文化があるのかもしれない、結構、教員が背負うものっていうのは大きいなと思いました。例えば、車を運転して学生を乗っけてどこかに行くときも、何か事故が起こったら、とても、教員が背負う責任っていうのは大きいですし、うまくいくのが当然で、悪くなったときは責任を問われる。

他にもいろいろあるのですが、やっぱり、ベトナムで地域の方とやってきたから、日本でもできると、ものすごく勘違い、私自身していたわけです。こういうことを経験して、これは単なる、女性とか、そういう男尊女卑の問題で片付けられることなく、それ以外にも、これまで、地方、宮崎に限らず地方一般に言えることかもしれないんですが、同じ価値観を共有している人たちのみで構成されて、異質な人とコミュニケーション機会がない組織とか、社会でやってきた方々にとって、いくら私が農村出身だと言っても、どう考えても、私はちょっと浮いているというか、異端の存在だろうなっていうのを思うんですね。

その背景にある難しさで最近気が付いたのは、やっぱり、社会的にも、経済的にも、地方っていうのは疲弊していて、そういう疲弊している中で、リソースが限られてくる。その中に、私みたいな分かりやすい、女性とか、よそものとか、しかも、楽しそうな感じの人がいると、ちょっと違和感を感じるっていうのも当然ある。そういう人たちと一緒にやろうという発想よりも、囲い込むというか、動員する、そういう発想が当たり前になっているようなことも、あるんじゃないかなと。

ただ、もちろん、こういう経験ばかりではなくて、とても親切に、ほんとに豊かな気持ちで接していただいた方々にも数多く出会ってきたので、いろいろなパターンがあるということです。

気になるのは、農村のどこにいても若い女性とあんまり会わない。実際、過疎化、高齢化も進んでいて、2018年の農林水産研究所のデータでは、子育て世代、25歳から44歳の農山村女性の人口が年々減少していて、2010年、2015年の5年で10%ぐらい減少している。無言でそっと去っていく若い女性が多い。それは、男性も女性も、やっぱり、人間で、やりがいを感じる機会にアクセスできて、その場所にいてもいいんだ、いたい、そう皆が思えるような開かれた地域づくりがあったら、結果的に、私にも居場所があると思って農

村と関わる若い女性も増えていくんじゃないかなと、しみじみ、最近は思っているところです。ちょっと、こういうこと言うのはどうかなって思ったんですが、私は女性だからということで、女性の集まりで話す機会を最近頂いて、「怖いから、私は何も発言できないんです」という女性の声を聞く中で、今日は話すことにしました。

そういったことを踏まえながら、大学と地域の関係に関連して考えると、大学は、やっぱり、専門性が分かりやすいっていうか、地域のニーズがあったらそれを解決することを期待される存在になりうる。海外で事業を行ったときは、私もこのA象限にいたと思います。

人によって異なるかもしれないですが、地域おこし協力隊とかは、地域の期待がある程度あって、ただ、大学と違って、この人何をしてくれるんだっていうのは分かりにくくて、もしかすると、最初は葛藤が多いんじゃないかなと思いました。ただ、時間がたつにつれて、大学と同じような立ち位置に行くかもしれない。

あと、望ましくないものとして、社会的に蔑視されたり、十分に受け入れられなくなってしまうような属性をスティグマと言うんですが、そういったスティグマ、烙印(らくいん)を押されてしまいかねないような、障がい者、外国人、女性という属性を持つ人にとっては、分かりやすく地域からは見られるけど、期待はあまりされてない。ただ、最近は、農福連携とか、技能実習生とか、現場で社会と接点がある中で、コミュニケーションとか交流が進んだら、期待を受けるような存在にもなり得るのかなと。

私自身は、学生と共に、このBか、Cか、Dのどこかの象限にあったような気がしています。ある意味、大学でというよりも、外部人材、地域おこし協力隊の体験を聞いて、分かる、分かると思ったり、「地域の中でずっと頑張ってるけど、なかなか話を聞いてくれない」って悩んでる女性に対して、分かる、分かるって思ったり。こっち側(B, C, D)の人と話が合うことが多いと思ったりもしています。

初めて会う人は、私のことを英語の先生とか、国際の先生と思うのですが、実際、最初に地域から依頼されたのが、私、ヨガのインストラクターの資格も持っているので、ヨガの先生やってくれないかっていうのもある。で、つまりいて、「あれ？」って感じなんです。私自身は、実は、農山村の社会経済や、地域づくりとかしたくて来たんですよね。一步譲って、実務経験を生かそうと思ったら、事業マネジメントとか、事業評価、国際協力・交渉っていうのは、実務でやってきたことなので、それもできるかなとは思っているところです。

そのような状況で、何ができるかという、結局、できることを地道に積み重ねることかなと思いました。その中でも、ベトナムで実習を企画・実施するとか。これは、大学が持つ国際教育のニーズとも合致して、受け入れられたものがあります。

次に、研究を頑張る。研究で地域に何度も入っていく。そして、生活者として地域に溶け込むのが最もいいかなと、最近思いつつあるんですが、直売所のおばさんたちと仲良くなったりとか、散歩するだけでもいいんです。散歩して、地域の人に一住民として接してもらって、そこから発展的なものが出てきたり。これは面白いなと最近思っているところです。

最後に、教育者として、地域で生活・活動する学生を応援しながら、私の研究・教育にも生かしていくってことがある。このベトナムの経験と、棚田での活動の経験をちょっと共有させてもらいます。

ベトナムに関しては、私のフィールドに学生連れて行って、地域の方だけではなくて、私自身も受け入れる立場もやっています。これは、日本人学生とベトナムの学生が共同学習するというような形で、教えるというよりも、学生たちに考えてもらう。最初は、日本

人の学生は、日本の環境が恋しくて、「ベトナム大嫌い」とかって言ったりするんですが、途中からちょっと様子が変わって来る。ベトナム人の学生、みんな英語で授業受けている学生で、英語とかもベトナム人のほうがずっとできて、途中でベトナム人に論破されて泣かされて、優秀な子も、「えーん」って泣きながら、「先生、助けてください」って来るんです。そういうときに、私は「戦いなさい」「あなたなら負けない」と追い返すんですね。戦って、勝って帰ってきて、そういうのを見るのがすごく私大好きで。結局、そういうふうに学生同士がやりとりすると、学生がタフになって、最終的にはベトナムの学生と仲良くなって、みんな号泣しながら空港で分かれるっていうのが、最後のお決まりのパターンなんです。本当にこのプログラム大変で、毎年やるのやめようかと思うんですが、コロナになってやめてますが、やっぱり、空港で学生たちが泣き合いながら、「また、絶対帰ってくる」と言ってるのを見てると、やって良かったなとしみじみ思うところです。

学生連れてフィールドに行くときに、農家さんがどういうふうに、私たちを見てるかという、誰かまた連れてきたんだねっていう慣れた感覚でいるのかなと。私としては、半農半XのXの部分として、地域を案内するサービスを私たちに提供していただくというような感じかなと思っています。もう一つあるのは、やっぱり、生活とか農的暮らしっていうのが単調になりがちなので、その中に、海外からやってきて、また注目されてるみたいな感じで、ちょっと生活に張りが出るっていうのはいいのかなとったりしています。

私自身は、学生が役に立つ存在としては見ていなくて、ベトナムの学生と一緒に農村を訪問して、現場のリアリティーを感じてもらえるだけで十分かなと思います。ただ、学生からすると相当、私、やっぱり、厳しいみたいで、事前に予習とかいろんな準備をするもので、学生には、もしかすると、私がこう思ってるっていう感覚はなくて、たくさん要求しているのかもしれないです。

ゼミ単位で行っている高千穂の棚田なのですが、これは、きっかけは、大学院の学生さん、梅田学園という自動車学校の副社長との出会いです。自動車学校も少子化で、教習所に通う人が少なくなったりと、あと、夏休みと春休みに免許取る人が多くて、教官の労働力の平準化が課題になる中で、農業に参入された経緯があります。特に、棚田を守る活動に関心があった人たちが集まって、しかも、教官は農業機械運転も得意ということで、また、梅田学園は社会人野球をすごく頑張ってるところでもあって、そういういろんな要素も絡まって、棚田での米づくりを始めたという人がいます。

そこで、2021年度から棚田オーナー制を開始するというのを聞いて、ちょうどいいってことで私自身もオーナーになって、学生と田植え活動などにも参加しました。学生は、野球ばかりやっていて、「野球部の選手がいるよ」って誘ってみたんですけど、最初は、「いや、興味ありません」って言われてしまって、うーんと思って、何かいろいろ言ったら、私が一生懸命だったからかついてきてくれた。

この青いTシャツの人たちが梅田学園の方々で、この右の方が梅田さん、修士2年生の梅田学園の副社長さんですね。彼らが、ゼミ生です。そして、私の、オーナーになった水田ですね。学生と共に、こんな感じで参加しました。

ゼミ生に棚田の話したら、全員が「棚田見たことない」って言うのにちょっとびっくりしたんですけど、地方の学生でも棚田を見たことがない。そういった中で参加してもらったら、学生からは、ゼミの発表ではこういうふうに言ってくれました。「普段見ることができないような景観」だったりとか、「このような景観なくなってほしくないと思った」とか、あと、「田植えが楽しい」と思っていたり、「新鮮だった」と。「毎日するのは大変だけど、たまにするのは楽しい」とか、率直な感想だなと思ったのですが、やっぱり、何よりも教員

としてうれしかったのが、「これをきっかけに、中山間地域と都市部をつなぐ活動に参加したい」と言っていたり、「もっと棚田オーナー制について知りたい」と。最初、行くのは嫌だって言っていたのが、ここまで変化するものかと、すごく頼もしく思ったところです。

気付きとして、私は野球で釣ろうとしたんですが、野球じゃなかったと。この学生は、体を動かすことが好きだったということが、関わってみて初めて分かったってことです。私自身も学生も、地域の方にとっては、得体のしれない存在で、関わってみて初めて、それぞれを分かり合えるのかなと思いました。

ニーズを踏まえてどうするか、どう支援するかというのが、元々、国際協力の現場で行われてきたことだったのですが、それで一向に良くならない。支援者として、地域の人を行為主体として見ていないのではないか。ニーズ上の欠落を補填(ほてん)するという考え方がよくなかった。地域にいる人自身が、患者ではなくて、ケアの対象ではなくて、行為主体というふうに考えなくてはいけない。だから、アマルティア・センの言葉なのですが、「彼らのニーズは何かってということではなくて、彼らが本来の力を発揮する自由を与えられたならば、どう行動するか、そして、君はどのようにしてその自由を拡大できるかっていうことを考えなくてはいけない」という指摘には、はっと気付かされました。

実際、私が見てきた棚田地域の課題って、具体的に何かなと思ったときに、いろいろな課題はあるのですが、気になるのが、信頼を寄せられている地域の人がどんどん痩せていってるんじゃないかと。それは、農地を管理できなくなってくる高齢者がたくさん出てくる中で、その農地を引き受けて管理してくれる人が、やっぱり、この人だったら任せられるとか、この人をお願いしたいってということで、すごく頑張って動ける人が動いてくださってるんですが、見えないところすごく努力されている。1人が背負うことができるのも限度があるよなど、最近思っています。

そもそも、棚田は大変な場所にあることが多くて、機械も入りにくかったり、いろいろあって、どう考えても、労力とかのこと考えると、米は買ったほうが安い。でも、農地を耕作するために、管理するために、地域の信頼されている人が、無理して農地を管理している現実を見てきた。やっぱり、地域で信頼されて頑張っている方に何とか協力できないものかっていうのは、私自身も思ったりします。

どうしたらいいんだろうと思っていたときに出会ったのが、この「九州つなぎ隊」という、「みんなのくらしターミナル」というNPOがされている九州全体のネットワークです。九州つなぎ隊のホームページに「今動ける人同士が縦横無尽につながって、いろいろな問題にフィットしていく。小さなつながりを幾つも積み重ねて連鎖させていけば、互いに支え合っていくような流れに発展できるのではないか」と書いてあります。大学生は、お金がないけど動ける人だなと思い、この仕組みの中にちょっと乗っからせていただくっていうこともあるのかなと思っているところです。

重要な視点として、農作業を、1人の人が全部するのではない。素人でもできる人手の要る作業を明確化してもらったら、その部分に九州つなぎ隊は応援に行っているみたいなんですね。もちろん、何度も経験したら熟練して、熟練者しかできないことをできたりとか、あると思うんですが、タスクとのマッチングで、素人でもできる部分が明らかになってきたっていうのと、あと、やるのであれば楽しくやるということが特徴としてあります。

これが1つの事例なんですけど、チューリップの球根を植える地道な作業を地域のなじみのおばさんたちとおしゃべりしながらやって、4カ月後こういうふうに美しくなる。この両方を学生とか、あと、同僚の先生とかと一緒に経験して、とてもいい気分になるという感じです。地域の方々も、若い人たちが来るとすごくうれしそうで、逆に、去っていく

ときに、「寂しい、寂しい」って地域のおばさん達が言うんですよね。だから、「また来なきゃな」となって、「またね」って、いつも去っていく感じです。

私自身が思うのは、先ほどの図なのですが、やっぱり、主体性っていうのは地域の側がないと、なかなか継続もしないし、難しい。ただ、外部人材としては、悩みとか、問題とか、課題を一緒に考えて、活動に寄り添って応援してって、その延長でできる範囲で楽しく実践するのかなと。

私たち、すごく限られたマンパワーで、卒業する学生とかがいるのですが、こういうふうにネットワークでつながったら、卒業しても継続する学生もいるかもしれないし、あと、できないところも、ネットワークだから、できる人がカバーし合えるっていうのがある。

まとめとして、農山村の現状を学生に知ってもらった後に、社会に出て活躍してもらうっていうのを喜びと思っていただいている地域の方がいるような気がしますし、私たち自身は役には立てないんですが、気持ちで寄り添って、農村網の一パーツであったり、一ノードにはなれるのかなと思います。

役に立つことを目的にするというよりも、寄り添って、結果的に、こんな大好きな棚田がいい形で将来につながればなと願うところです。ありがとうございます。

落合：ありがとうございます。すごい面白い話で、やっぱり、受け入れ側になった経験があるってということも、非常に、他の3人とはちょっと違うところなのかなと。また、その辺りもお話を聞かせていただければと思います。ありがとうございます。大変面白かったです。

落合： 次、じゃあ、内川さん、よろしいでしょうか。お願いいたします。

◆信州大学・内川義行さん

内川： 皆さんバックグラウンドも考えておられることもそれぞれで、面白いなと思ってお聞きしていました。まずは準備したものを、私も話してみたいと思います。自分がどのように棚田地域に関わり、研究・教育、地域貢献をどう考えているのかという話です。

はじめにスタート地点、原点みたいな話なんですけど、自分は信州大学出身で、そこで教えていただいた恩師が木村和弘先生で、当時は急傾斜地水田と言っていましたけど、はじめにみたのが棚田の非常に劣悪な労働環境ではまず道路がないんですよね。だから、機械を入れたくても入れられない。平坦地では機械の種類も乗用型なのに棚田では歩行型で、かつ道がないので、田越しにはしごのようなものを掛けて機械を無理やり進入させるみたいな。

私が90年代ぐらいに学生のときにも、やっぱり姨捨の棚田とか、そういうとこでそのような光景を見て、これ何とかしなきゃいけないんだよっていう話を盛んに言われたりして。また水路もない。上流の排水が下流の用水になっていて、自分の思うような田んぼづくり、品種にしてもできないんですよね。共同体的な規制の中で何とかやってる、こういう中では、やっぱりうまく続かないんじゃないかというのがスタート、原点です。

それで、どんどんと90年代は棚田は荒れてるところばかりになって。耕作放棄が増えていて、地域の人たちは田んぼがあるから、森林とか他の資源もあるんですけど、田んぼがあるから住んでんだよねっていうのはよくあって、田んぼがなくなったら、じゃあ、どうなるのっていうことになって、地域の消滅とか、そういうことが叫ばれてきてましたし、耕作放棄が要因で、災害の因子とか、後で話されると思いますけど、武山先生がやっておられる獣害の話とかにもつながるわけで、これはやっぱり、何とかしなければと。

教わっていた木村先生の耕作放棄地の発生メカニズムについては素因・誘因論というのがあって。そもそも、人がいないとか、生産調整とかいろいろあるけど、そういうこと以上に、素因としてまずは耕作のやりにくさ。耕地条件が悪いところからどんどんやめられていくので、その条件を最低限、基礎条件として変えるっていうことが、絶対に必要だっていうことが当時、われわれ学生だった頃は、そういうことでした。そこで、整備技術を開発しようということで、そのお手伝いというか、その研究チームに参画するっていう形での取組み・研究を始めたわけです。

当時、木村先生と、新潟大学をおやめになりました有田先生が、特に急傾斜地水田の整備工法を研究されていた。平坦地では、四角い長方形区画が席卷していたわけですけど、湾曲している傾斜地形のところに、どういう区画を設計すべきかと。長方形区画ではいろんな不備があるということで、等高線型工法というものを開発されていて、技術は生まれてきたわけですけども、そのとき、横方向には段差ができにくくなるんですけども、どうしても上下間の区画間段差っていうのは、生じてしまって、ここでの草刈り労力の大変さとか、そこでの事故、農作業事故というのがすごく多くて、与えられた使命が、このことを考えなさいということで、それを考えるテーマが、卒業論文と修士論文の研究だったんです。多くの棚田を耕作されている農家の、特にほ場整備をされた方にお聞きして大体、年間何回ぐらい、どういう刈り方で、どういうふうに作業して、どこが一番しんどいんですかとか、そういう話の聞き取りをたくさんして、実際にそれで自分たちでも実験をやってみて、心拍計を付けて、どこが一番きつくなるのかなんていうことを確認したりして分かったのが、法面の途中の小段、足場がとにかくないんですよね。ほ場整備すると法面が一様な斜面になって、足を滑らせて草刈中にざっくり足を切ってしまうとかいうことが多くて、それをなくすためには、当時は、動力刈払機で刈るときに、刈幅に合わせて小段をつくらいいんじゃないかっていうのを編み出していった。

最近では自走式のものもありますけども、やはりこういう小段があるほうが良いと思ってるんですけど、これが、2000年には場整備の設計基準に載せていただけたってして、そういう意味では研究的貢献というのは、木村先生や有田先生が当時はまとめていただいたんですけども、自分の中では、やっぱりすごくうれしかった部分ですね。

ところが、実際にそういうことは出してみたものの、整備を行わなかったところとか、できなかった棚田も多く残っていて、これは皆さんご存じのとおり、残された棚田はどうするのっていう話が出てきた。整備以外の方法で保全すべきと考える人も増えて、その1つの例が棚田オーナー制度、あるいは文化財化みたいなことで守っていこうっていう動きがとて強くなってきて、この辺を考えていこうっていうのが、次なるテーマとして取り組んでいったところなんです。

ただ、これはどうしても、守れる面積が圧倒的に少ないということが前提、基本的にあるとは思っています。そして整備したところと、していないところが混在した状態がうまれてきた。整備してないところは、非常に古く近世ぐらいから変わってないところとか、千曲市の姨捨棚田はそういうのが両方見られるような状態になって、この歴史的変遷と一緒にみられる状態を文化財にしたほうがいいんじゃないかと思ひまして。それで、多様な区画が産業遺産的に残っている、しかも、ずっと続けてやっておられることによって、動態的になっている。そういうことを、千曲市の姨捨棚田で、重要文化的景観選定の計画書づくりをサポートしたんですけど、そこで載せました。

古い形態の棚田はその景観を残す。本格的な整備まではできなかったんだけど、道路とかを少しずつ入れたような場所は、そういう段階のものとして何とか維持していこう。

それから、3つ目は、さっき言った等高線工法をここでも入れたんですけども、こういうところはこういうものがあるよっていうことをもっとアピールできる場にする。そして、オーナー制度。農業者以外が耕作するっていうところもありますよみたいなことで、こんな保全方法の提案をしてきたりしたところです。

これまでがちょっと長かったですが個人的な棚田との研究での関わりの経緯で、ここから現在の大学での学生を交えた地域との関わりの話になります。

青鬼地区というのは白馬村なんですけど、そこは棚田百選にもなっていて、建物が、かやぶき屋根を今はトタンで覆ってしまったんですけど、重要伝統的建造物群ということで文化財になっています。この指定には棚田も含んでいます。今は10戸未満の集落になってしまって…。田んぼに水を引く水路が、山腹水路なんですよ。3キロぐらい上流から引いているんですけど、僕らが調査に行ったときに地元の代表の方から、「だんだん水を引いてくるための準備に必要な水路掃除作業ができなくなってきて…」と。「先生たち、手伝ってくんないかね」みたいな話をもらって、学生たちに話し「やってみる？」と言ったら、「やってみよう」と言うんで、支援を始めて毎年4月に行っているんです。山際のところをヘルメットかぶって、落下したら命の危険もあるようなところなんですけど、そういうところ行きながらも春先に、葉っぱや土とかがたたくさん詰まった水路をかきだして掃除する。技能はあまり必要なく体力がある程度あればよい。大勢いたほうがありがたいという作業なので、学生達でも比較的やりやすい。やってみると、当然若いので力もあるし、あまり技能的には確かに優れてないんだけど、いてくれると助かるよっていうことで、終わった後にはいつも、それこそシシ肉だとか、山菜だとか振る舞ってくれてみんな楽しみながら喜んでます。コロナ禍で去年からは行けてないんですけども、こういうのを続けたりしたりしているところです。

こうしたことを通して感じるのは、自分も教員になって、学生たちもそうなんですけど、棚田のことを研究しているのに、棚田のことをそもそも良く知らないということなんです。それが最初の頃、すごくあって。うちは幸い、近くにすぐ農村がちょっと行けばあるので、そうした学習の場が不可欠だと強く感じています。

そこで大学のすぐ近くの名もない棚田なんですけど、たまたま卒業生が農家をやっていて、その人に協力してもらいながら、10年ぐらいゼミナールで実習的に学生達と棚田耕作をしました。何年か前にいったんやめて、今の学生はやってないんですけども。苗代づくりから始まって、一通り全部やってみるみたいなことを、学生たちは半強制で、うちに来たらこういうことやろうねみたいなことでやって、自分もすごくいろんなことを感じる機会になりました。「こんなことやってるから全然、研究成果上がんないんだろ」なんてことなんですけども、これにより地域の一角の荒れていたところが少し戻ったりとか、水路の掃除とかを地域の人と一緒にしたりとかっていうことで、農村の暮らしに少し触れたりする機会にもなっていました。

こういうことから感じるのは、地域研究・教育を行う者として、やっぱりこうした地域を知る場所、協力してもらい受入れてくれる場所は、絶対不可欠だと思うんですよ。一方で、地域にとってメリットというのも絶対必要だと思うので、それがどこにあるのかっていうのを忘れてしまって、ただ入って行くのもよくない。やっぱり、今は地域の持続・振興、とにかく地域が続くということが、中山間地では特に大事なことで、そこにどれだけ関わられるのかとは思っています。

その時に問題は、地域の持続とか振興そのものの中身。どのように持続するのが良いのかというところは、どんどん変わってきている。以前は特産品つくって、とにかくお金

を得られる状況ができれば、人が来るんだからとか、残れるんだからとかという話が多かったと思うし、そういう部分は今でも続いていると思いますけど、それだけで良いのかというところも問われているんじゃないかなと思っています。もちろん短期的にやらなきゃいけない問題もある。だけど中長期に考えたときにはどうなんだろうっていうことも、考える必要があるのかなと。今までの解決方法だけでは限界が来ている、次のフェーズ、時期に来ているのかなと思っています。

それを強く感じるのは、やっぱりこの新型コロナウイルスの影響ですね。それと、地球環境問題がそれに併せてというか、その前からも言っていたわけですが、すごく身につまされるような状況として、みんなが一斉に感じ始めたっていうところがあると思っています。より包括的なというか、より上位にある課題にも答えることが求められてきた。そうした課題には反するような単なるブランド開発とかの話だけだったら、地球環境とか、そうした問題には良くないよねみたいなことが起こり得る状況が生じてきた。それに答えていかなきゃいけないんじゃないかというふうには感じています。

それと、もう一つは社会状況、中山間地域の社会状況の変化。農村だけれどもほとんどがもう非農家になっている。約7～8割が非農家って今言われていますけれども、そういう状況になっても、我々が対象とする方は農家や林家の人が多いんですけど、そのときに従来型の農林業の産業論みたいな話、特にわれわれは農学部なので、農林業関係の話になりがちなんですけど、そういうことだけでいいのかどうか。

特に今日のメンバー、皆さん農村計画分野なので、農村生活の在り方とか、先ほど井上さんの話も、暮らしの話とかありましたけど、このコロナ禍だからこそ、こういう農村で暮らすすべての人々が、生活を楽しんで生きる生き方っていうのを模索する必要があると。農村側からも、都市側からも改めて見直されつつあるっていうところがあると思うんです。

あと最後のところですが、大学が今の研究・教育の体制の中で、地域が求めているアドバイザー、コンサルタント的業務が対応可能かといったら、僕はちょっと限界なんだろうなと正直思っているんです。なぜなら、すでに話に出ていますけど、大学側のスタッフというは、基本的には学生・教員ですが今、質・量ともに圧倒的に不足してきているということ。フィールド系の教員の補充が厳しい中で、学生教育が十分にできているかというどうしても手薄になっていたり、学生数はいるようにみえるけれどその質的には地域が求めていることに追いつけるようなことにはなっていないのが現状かと。また、地域支援のための資金は大学によって異なると思いますが基本的には厳しいのでは。少なくとも研究費としては、地域貢献は副次的機能とみられています。さらにこれも大学側の事情ですが、学内では地域貢献に対する評価は必ずしも高くないことが多いのではないかな。あまり評価されない。ゆえにこれを積極的に内発的にやろうという形には、なかなかかなりにくい状況にあるというのが多いのではないかと考えています。

そうした状況を踏まえて、大学が向かうべきこと考えている方向性みたいなことをおわりに幾つか話したいと思います。ひとつは、新たな棚田保全策に向けてということで、まずは農家の人々が棚田を棚田として守ってくっていうことじゃなくてもいいんじゃないのかと。元々、生業、暮らしの場として棚田はあったわけで、どんなにつくっても、量的には、お金を稼ぐ、農業としてやるというものでは基本ないと思うんですよね。だからこそ暮らしの中にきちんと息づいてやるっていう在り方は、もう一回、農法とかも含めて、先ほど海外の話もありましたけども、無農薬だとか、化学肥料使わないとか、そういう需要だとかあるわけですし、そういうやり方が日本でだったらどういうふうにできるのかとか、そういうことをすごく考えるようになっていきます、最近。

今、畑作なんですけど、近くは無農薬・無化学肥料でやっている農家の方と共同して、家庭菜園スクールを走らせ始めたところなんですけど、環境に配慮した農村生活、こういうふうにできるよねみたいなモデルみたいなものつくれたら、これも棚田版でできるんじゃないのかなみたいな気がしています。こういうことができたら環境問題、より上位の問題とかもみんな注目しているので、レクリエーションなんだけど、身近な食を一定量自給できたりとか、環境意識も高められたりとか、子どもとか家族にいろんな教育的要素も含めて学べるものというツールとしてはすごく有益なんじゃないかなみたいな気がしてきて。農村の7～8割の人が非農家になってる中で、こういう課題を検討するっていうのもありかなみたと思ったりしています。

もう一つは、過疎でそもそも人がいない、年取って労力もない、それを農家の人たちだけでできないから、若い学生たちが来て手伝うっていうのは、従来のやり方を変えないで労力提供しようという考えだと思うんですけど、その方法自体を変えないと駄目なんじゃないのか。これは武山先生の科研とかも使わせてもらったんですけど、山地酪農っていうもので。要するに、棚田は棚田として守りきれないところが耕作放棄になってるとか、その最後の背後にある旧里山の下草刈りもできないような森林なんかを動物と共存して対応する方法です。例えばヨーロッパ、チロルのアルム農業とか「アルプスの少女ハイジ」じゃないですけど、そういうところでは動物がいることによる地域の変化、観光になったりとか、土地利用計画の話なんですよ。隣接する土地も含めて、棚田をどう位置付けていくのかみたいなことから考えることっていうのは、すごく農村計画的に必要で、面白いんじゃないかなと。今、これも、根羽村というところと連携協定を結んでやっています。

具体的にはヨーロッパのように、森林限界2,000メートル以上のところで放牧するんじゃなくて、旧里山エリアにバッファゾーンというような形で動物の放牧エリアがあって、集落や棚田がそういうことによって守られる可能性を持つみたいな話です。生産物のブランド化とか、機械化、スマート農業みたいなことばかりがどうしても注目を浴びますが、そんなにお金投入できないし、みたいなところもあるし、自然環境との調和とか、そういうことを考えたら、このようなやり方もあるのでは、と思ったりしています。山地酪農に関していえば、里山の手入れができない遊休農地の問題とか、鳥獣害は直接効くわけじゃないけど、バッファゾーンがあるという意味、あと下草が飼料になるということはすごいことだと思うんです。資源ですよ。それとヨーロッパでもそうなんです、生産品の高付加価値にもつながる。グラスフェッドといって、濃厚飼料ではなく、草を食べているということは動物にとって自然なことの良いねとか、人間にとっても放牧、1ヘクタール1～2頭の密度なんですけど、野生動物と同程度の密度なので、糞尿も産業廃棄物にならないし、飼料の輸入とか、そういうことにもつながらない。観光、景観とか、そうした面でも効果・影響の可能性があるとことを考えています。

そして最後に、学生たちとやってたような無名の無数の棚田について。文化財化とか、やっぱり、そういうやり方で守れる量はごくわずかなので、これを特に、災害の話とかもあるので、棚田どうしを連携させることで「流域共生圏」という考えを構想できないか。流域沿いに上下流関係にある棚田地域をネットワーク化して、例えば、そこで生産されたお米は、下流の人が購入することによってその地域が守られると。上下流部との関係性を持ちながら守っていけるとか、さらに環境配慮の点でも意義がありますとか。うまく出していく方法も模索してもいいんじゃないか。この間、棚田学会のシンポジウムで話をさせてもらった経緯もあったので使いました。

ということでいろいろ考えるところはあるんですけども、さっき言ったように、大学が地域に連携して何かやるっていうことに今限界を感じている中で、妄想なんですけれど、病院、大学病院あるじゃないですか。大学病院って、存在意義はものすごく大きいと思うんですよ。その地域でいろいろ病気を抱えてる人が来て、そこで高度な治療を受けられる。こういうものを地域問題に対する「病院」という形でつくれないか。地域問題解決センター？みたいなものをつくらない限りは、地域貢献を小さな手弁当レベルで、何とか学、何とか研究室のところでやっていても根本的な解決には程遠く、難しいんじゃないかと。

そうすると、大学病院の先生は応用研究、臨床をしながら成果も出すし、そこは学生インターンの場合だから、学びの場になっていると思うんですよ。学生がここで学べるみたいな。これは、大学の各学部や研究室とはちょっと違う形で、学ぶ仕組みになるんじゃないかなとか思ったりとかして、これも全く、まだ稚拙なレベルの話かと思うんですけども、とにかく、学部のそういう基礎研究とか、独立した応用研究みたいな形ができたりとか、インターン制度、という形で総合研究とか、相互協力みたいなことができればいいなと思います。

地域の側からもそうしたあり方を求めてもらうことはできないか、一種の基金のような形で、各自治体から理解が得られれば良いなど。地方大学なんか特にそうですが、各地域の問題を解決・貢献しなさいと言われますが、そういう理解をむしろ地域に積極的に求めたほうが、資金の面も含めて対応の可能性があるのではないか。そのセンターが地域問題に関する主治医みたいなことになれるのではないかという考えです。

まとまらないかもしれませんが、以上です。

落合： ありがとうございます。またまた大変興味深い話で、それぞれみんな、状況が違うから、困ってることとかいうか、悩んでもそれぞれ違うなと思って、面白く聞きました。特に、包括的にとかっていう話は、確かに、われわれはそういうの、先を考えていかないといけないのかなっていうのを改めて思ったりしました。

落合： じゃあ、武山さん、お願いいたします。

◆愛媛大学・武山絵美さん

武山： 私も、愛媛に来て18年になっていて、驚愕(きょうがく)の感じです。自分自身も四国の出身ということもあって、ずっと愛媛に親しみを持って関わってきて、何となく雰囲気も分かり、やっと今になってできることがあるなっていう感じがします。

ですから、井上先生のお悩みを聞いて、あった、あったという、非常に強い共感を覚えました。だんだん自分も慣れてきて、ようやく18年たって、地域の皆さんにも認知をいただいて、そんなに悪目立ちしなくなってきたっていうんでしょうか。こういう人いるよねっていうことも皆さんに知っていただいて、違和感なく現場に出られるようになったのかなっていう感想を持っています。

私の場合は、皆さんご存じのとおり、イノシシの研究を始めまして。特に、山際の農地を守りたいっていう思いから、野生動物の問題を何とかしなければ守れない。致し方なく、動物の問題に手を伸ばして。

この野生動物の問題というのは非常に新しい問題なので、ちょっと知っているだけでお声をかけていただけるんですよ。地域の皆さんから、「ちょっと、学習会で話してくれないか」とか、「行政さん向けの講演会をしてくださらないか」とか。あと、「受託研究を

受けてもらえないか」ということで、研究資金もいただけるような状況で、地元にも、ある程度、普通に入るよりはウエルカムの状態に入れるという状況があります。

現在お世話になっているフィールドは、愛媛県松山市の中島という島で、かんきつ栽培をしている瀬戸内の島です。ここは元々、イノシシがいなかったところに、平成13年に新たに、泳いでイノシシが入った、広島県のほうから入ったという地域です。

きっかけは、平成24から5年度に、愛媛県から受託研究をいただいたという経緯があります。その前に、愛媛県と愛媛大学が連携協定を結んでいて、愛媛県のほうから鳥獣害の研究をしてほしいという要望が大学にあって、学長のほうからやってほしいという依頼があって、受託研究を受けることになったと。ですから、私からすると、棚からぼたもちじゃないですけども、じっとしていたら、急に降って湧いた話だったという状況です。

それで、当初、私は野生動物の専門家でも何でもありませんので、これ、できるのかなって思ったんですけども、当時、研究資金もなくて本当に困っていて。さらには、フィールドも、既に多くの研究者の皆さんが地域に入っているようなところに新たに入っかなきゃいけないんですね。それで、なかなか入るきっかけをつかめないっていうところもあったりして、これは飛びつくしかないなっていうことで、意を決してやり始めたという経緯があります。

さらには、平成26から7には、松山市さんでも野生動物の被害対策に予算が付いて、私のほうに相談をいただいて、調査に取り組んだということです。

平成28年度以降は、地元の組織と連携して、ずっと調査を継続している状態です。当然、市や県のご担当者は、調査に同行くださったりとか、データをいただいたりとかいう形でのサポートはありますけれども、資金的には私が研究費を取ってくるという形で、地元に入らせていただいているということです。

それで、私はどうしても研究がしたかったので、地域貢献は、誤解を受けるかもしれないんですけども、二の次な感じだったんですね、自分にとっては。とにかく、現場がどうなっているのか学びたい、知りたいということで現場に入ったという経緯があります。

しかし、地元の皆さんに教えていただかなきゃいけないので、さらにはデータもいただかなきゃいけないので、どうしても地元で協力をお願いしなければいけなかった。協力をしていただくからには、当然、何かしら現場に戻したいという思いの中で試行錯誤してきて、今現在、こういうことをやろうとしています。一部やれていて、一部やれてないです。

何かというと、OODAループというのをつくろうとしています。OODAループっていうのは、ここにちょっと書きましたけれども、アメリカの軍事研究家ジョン・ボイドさんが提唱されているらしくて、戦略を立てるスキームなんですけれども、1つ目のOが、Observeですね。2つ目が、Orientで、Decide、Actionというふうになると。これを回すということです。

何がPDCAと違うかということ、Pっていうのは、最初からPlanから始まってしまうんですが、そもそもPlanをどうやってつくるのよ、始まらないじゃないって現場の悩みですね。それであれば、まず、当然、Observeから始まるでしょ。まず、地域をしっかりと観察して、データを取って、提案をしていく。A案、B案、C案、それがOrientですね。それで、地元が意思決定をして、自ら動きだすっていうところを研究者が後押しする。ObserveとOrientのOOのところを研究者がやり、現場にDecideできる情報を提供することで今、ウィンウィン関係をつくろうとしています。

具体的には、このObserveは、地域の皆さんと一緒にイノシシのデータを集めています。

捕獲したイノシシをきっちと計測していただく。研究のために、重さと長さをきっちと測っていただく。さらには、地元と協力して、島の中にいっぱいカメラを付けて密度分析をする。さらに、子宮をサンプリングしたり、血液をサンプリングしたりして。今、共同研究で、生態学の先生方と共同研究をしているので、そこにサンプルを送る。

実は、生態学の分野の先生方っていうのは、現場で、地元の人たちに協力していただいてサンプルを集めるノウハウが基本的にはないのですね。基本的には研究者が現場に行って、サンプルを集めて、持って帰るっていう。そうすると、サンプルがなかなか集められないんですね。しかし、私は地域と共同させていただく中で、農家さんから全てのデータを年間通じていただく仕組みをつくることができる。ですから、私たちと、そういう生態学の分野の先生方とコラボレーションすると、非常にいい研究ができるということも分かってきました。

土地利用調査も、データを収集する部分は、地元と研究者の協働。行政さんも関わってきますね。このOrientの部分は、研究者の仕事です。われわれが研究としてやる。これは、土地利用のネットワーク分析をしたりとか、GISを使って分析したりとか。さらに、RESTモデルというのがあるんですけども、それで密度分析をしたりする。捕獲個体のデータを有意差とかいろいろ分析して、状況を分析する。

私としてはこのDecideの部分が肝で、「橋渡す」ということが極めて重要だと思っています。つまり、私たちたちが研究で分析した結果をできるだけ早く現場に戻す。かつ、現場に有益な見せ方で戻す。現場の人が何を知りたいかというニーズを捉えて、研究成果の中からマッチングできるものを戻すという形で、説明会を開いたりとかして説明します。それで、計画書の案をつくったりして、「これで、5年間の野生動物対策計画どうですか」みたいな提案をしたりします。

その後、地元がその案に基づいてDecideして、Actionすると。Actionすると、今度は、現場の様子が変わるので、変化をビフォー、アフターで捉えて、また研究になるという。こういうことをしたら現場の様子がこう変わりましたっていうのは、非常にいい研究になります。手法の有効性とか、そういうものを検証する研究にもなります。

私がこの現場に入るときに心掛けていることは、私は鳥獣害対策を行わない。ですから、私は狩猟免許も取らないです。取ってしまうと自分が捕獲することになり、自分が対策の主体になってしまいそうで。私は私にしかできない方法で地元貢献するんだっていうことを、変なプライドですけども、自分に課してるというところがあります。具体的には、必ず早く調査結果を現場に戻すこと、研究成果を上げること。先ほど、内川先生のお話で、私もそうだったんですが、私たち、臨床医みたいなイメージあると思うんですね。地元のお困り事を専門家として治療させていただける可能性がある。しかし、その治療っていうのは、患者お一人、お一人の体調とか、特性とか、そういったものをしっかり調査した上で、検査した上でないと、その個人に適切な治療法というのは提案できないはずなんですね。他の患者に効いたから、あなたにも効くでしょっていうような提案は、本来できないので、私たちはしっかり現場を調査して、適切な診断を下し、治療方法を提案するということができるんじゃないかなというふうに思っています。

そのときに、やはり、気を付けていることは、現場の方が気付かなかったことに私たちが気付いてみせないと、現場からは、この人要らんなって思われます、すぐに。もう一つは、現場の方が何となくは分かっているんだけど、明確にびしっと数字でお示ししたりすると、「お」って、「先生が来てくれたけん、分かったな」っていうふうに、ありがたいというふうに見えていただけます。

さらには、現場に散らばっていた情報を組み合わせて、メタ知識を生み出してお示しすることも、地元の方には喜んでいただける。日々のお忙しい中で、何となくはそうだろうなと思っていただけども、外の人間がしっかり客観的に調査してくれたことで、やっぱりそうだったかと、やるしかないなっていうふうに思っただけのような情報が提供できる。

そして、研究結果が、実際の現場の対策にどのように役立つか示す。これは、強く私が心掛けていることです。ただ単に、イノシシこうでしたよ、耕作放棄地率こうでしたよっていうふうに、調査結果をそのままお示ししても、現場の皆さんにとっては、「それで?」、「まあ、そうでしょうよ」っていうことで止まってしまいます。そうじゃなくて、批判を受けようとも、私は具体的にはこうしたほうがいいと思いますっていうことをデータに基づいて示すように心掛けています。そのことでしか、私としては現場の役に立ちようがないなっていう思いでやっています。

私がつりくんでいることは、知識共有型に相当するのかなと思います。地元のコンサルタントとして、また、地元と行政の橋渡し役として、この現場では一定の役割を担えているなっていう実感があります。

しかし、落合さんの話をお伺いしてるときに、私には学生の視点がないなっていうことに、ちょっと、はっとさせられました。この現場では、私は完全に、教育者じゃなくて研究者として地元とコラボレーションしている。こういうやり方をやっている現場を1つ持っているというご紹介でした。

もう一つは、実は、これは落合さんと一緒に行かせていただいたのがきっかけなんです、内子町の泉谷という百選の棚田で活動をしています。平成21年に内子町が景観農振をつくるとおっしゃったときに、落合さんに声を掛けていただいて、一緒に現場の調査に協力したのがきっかけです。

その後、地域設計・計画演習という授業を持っているんですが、毎年、3年生20名程度を1日フィールドワークに連れていかせていただいています。その後、学生には、棚田振興計画を立案させるという授業をしています。その中から、一部、宿泊施設や農業体験等のアイデアを行政さんに吸い上げていただいて、実現したというのもあります。

実は、このとき、学生にヘルメットをかぶらせて稲木を片付けるっていうお手伝いをしています。私としては学生に、どれだけ棚田を維持管理するのが大変かっていうのを身をもって体験させる意図なんですけれども、現場には、若干なりともお手伝いになっているのかなというふうには思います。ただ、学生の安全をどう確保するのかっていうのは、今の教員にとってはものすごく重たい問題でして、毎年、毎年、祈るような気持ちでやっているというのが現状で、いつまで続けられるかなという感じです。

もう一つは、泉谷には棚田を守る会という会があって、オーナー制度をやっていたんですが、実は、昨年度、オーナー制度をやめられました。その後、「先生、オーナーとか関係ないけん、1枚つくってみるか」と、声を掛けていただいて、今年から農村計画学研究室・棚田班というのを立ち上げて、4回生を班長として、月1回、棚田に草刈りに行ったり、かしつくりに行ったり、今週末も実は、稲刈りに行くんですけども、やっています。これは、完全に農業体験で、何のお役にも立たない。私たちが、棚田について知るっていうだけです。

ただ、非常に面白かったのは、田植えをさせたんですけども、私、農業土木ですので、土地改良を教えてるんですね。基盤整備とか。その中で、例えば、機械をターンさせるのがいかに大変で、整形区画だとどれだけ楽かとか、作土の深さとか、いろいろ説明するん

ですけど、やっぱり、学生に1回体験させると、飲み込みが全く、当然ながら違ったと。いかに、ほ場整備で労働生産性の変化っていうことが起こるかっていうことをリアルに分かってもらえた。

私が教えてる学生っていうのは、行政に就職したり、コンサルに就職したりする学生ですので、そういった学生が、体験に基づいて、実感に基づく設計とか計画の立案をしてもらえるっていうことが非常に大きなメリットだな、教育上のメリットだなというふうに感じています。多くの先生方が、そこは指摘されたところですね。

私が日頃考えてるのですが、正直、全然、有効な労働力にはなり得ない。邪魔しに行っているだけですね。実は、現場は、先ほどちょっと言いましたように、オーナー制をやめたかったのですね。棚田じまいをするという宣言をされてます。つまり、木をちょっとずつ植えていくと。「棚田を山に返す」っていうふうに、農家さんが今おっしゃっています。学生の中には、「いや、この棚田を守りたい」って言う学生もいるんですけども、私たちとしては、持ち主の意向に沿っていこうと、寄り添っていこうと、見届けようっていうような話を今しているところです。

ただ、一方で、どこかで誰かやりたいっていう人が出てきたときに、やれるような状態で凍結保存できないか、そんなことを学生たちといろいろ話をしているところです。

現場に今行っているのは、一緒に棚田を楽しませていただくというスタンス。さらには、教育の場として。

あとは、これは私がすごく重要視していることなんですけど、研究者である私の感性を磨き続けなければ、ものすごい自分が落ちる、全然役に立たない人になってしまう感覚があるんです、自分で。とんちんかんなことを言うというか、自分の推察が全く当たってこないっていうか。農家さんなり、現場の空気感を踏まえない発言を、いろんな委員会とか講演の場で、そういう現場感がない発言をしてしまうんじゃないかっていうすごい危機感があって。できるだけ現場に出て、自分の感性を磨きたいっていう気持ちがあるので、そういった意味で、現場をお貸しいただいているっていう気持ちがあります。

ほんとうは労働力が現場から求められてるなっていうことは強く感じるんですが、労働力となり得るとすれば、私一人じゃ絶対役に立たないので、集団、つまり、学生を絶対に巻き込まないと、現場のニーズに答えられないわけですね。しかし、毎年学生メンバーは入れ替わりますので、やれる学生とやれない学生、当然います。これは、良し悪しじゃなくて、学生にも個性がありますので。だから、毎年継続してやれるかなっていうところは、躊躇するところです。

さらには、やはり、地方大学の悩みとして、修士課程、博士課程の学生が少ないです。さらには、昨今、就職活動を長いことやっていますので、そうすると、4回生主体で活動させている分には、毎年ゼロから体制を整え直すループに入ってしまったって、疲れ果てるっていうことがあります。

さらに、先ほどちらっと言いましたが、安全確保の問題が極めて重たく、のしかかっています。1つは、昔であれば、われわれ、車を運転して学生だけで現場に行っていたんですけども、落合さんとも行きましたけれども。しかし今は、学生に運転させるなど。タクシードライバーさんのように、全ての行程を教員が運転するわけですね。

さらには、愛媛大学農学部ですと、学生だけでレンタカー借りさせて行かせることも、許可を取れば可能なんですけど、その申請書を教員が書かなきゃいけないっていう極めて重たい状況があります。

さらには、公共交通機関で行くのであれば、田舎ですから、駅で降りてそこからどうす

んのっていう問題とか、そのお金はどうやって出すのっていう問題。やっぱり、学生によっては、バイト代では出せない。バイトして学費を稼いでいるような学生が、地方にはいっぱいいますので、経費の負担は学生にさせられないっていうところが大きい問題ですね。

さらに、私がもし経費を獲得してきたとしても、研究費は取ってこれるんですが、地域連携のためのお金っていうのは出せなくて、かつ、科研費とか受託研究費の使い道っていうのは、かなり厳しい目で見られます。利用目的以外に使えないので、地域貢献には使えない。さらには、報告書も求められて、それも教員には大きな負担です。

さらには、安全教育を事前に実施したりとか、大変な思いをします。さらには、昔は、泊まりがけで、「農家さんと飲むのが研究の一部や」みたいな感じだったんですけども、今、なかなか、飲酒っていうのも、学生をしっかりと見張っとかないと、何かあったらまずいとか。

あと、やっぱり、若手の助手が、皆さんの研究室にもいらっしゃらないと思うんですね。そうすると、本当に、年配の教員1人で学生全員を見なきゃいけないっていうことのプレッシャーも半端ないかなと思いますね。

すいません、これは愚痴ですけども、行政の皆さんっていうのは、落合さんがご指摘されたように、元気な学生が地域をかき回してくれるみたいなことに、ご期待をいただくわけですけども、行政の担当者の方が代わられて、そういう方針も結構、知らない間に変わってたりするので、対応が難しいっていうこともあります。

すいません、これ、完全に愚痴ですけども、「時間を持て余している教員や学生さん、現場で活動してみませんか」っていうスタンスで話を持ってこられる場合は、対応が難しいですね。さらには、「学生には、大学での座学よりも、社会での実践が必要でしょ」っていうようなスタンスで、話を持ってこられるケースもあって。われわれは、やはり、座学をしっかりと身に付けた学生が、現場と座学を行き来することによって育つというような理念で学生を育てているんですが。すいません、めったにない話ですけども、そういう思いをすることもあって、そういうことがあるとちょっと傷つくものですから、協働活動はもうやりたくないな、嫌だなとしばらく引きずってしまったって、モチベーションが上がってこないっていうことはあります。

また、学生と共に地域で活動するための事務手続き、準備、計画、打ち合わせ等に多くの手間がかかっても、その価値があるならかけるんですけども、地域にどのようなメリットをもたらすことができるのかっていう実感が、正直ない。地元の役に立ったという感覚がないので、どうしても、自分の中でまだ、もやもやしてる感じがあります。

その点では、研究成果に期待してくださる地元、私がお話しした一番目の例ですね。つまり、先生にデータを渡せば、私たちが分からないことを分析して、戻してくれると。だから、先生の研究は自分たちの研究なんだと思ってくださる地域であったりとか。あとは、教育の重要性。農家さんっていうのは、若い人を育てなきゃいけないっていう気持ちをすごく持ってくださいしている方が、多いと思うんですね。「若い人を育てるのは、わしらの仕事や」と、ほんとにボランティアに、使命感を持って学生を受け入れてくださる地域もたくさんあるので。そういったことを言うてくださるような、行政ではなくて地元の方がいらっしゃれば、われわれは現場で、教育や研究を継続できるなっていう実感を持っています。

その分、私たちは、その成果を何とか地元にお戻しする。それは、目に見える労働力じゃなくても、そういう気持ちを寄せることであったりとか、あと、提案することであったりとか、何か戻すという意識を持っておくということが、極めて重要なんじゃないかなと思っています。以上です。

◆意見交換

落合： ありがとうございます。とても大変興味深い話で、四者四様の、いろいろな地域への思いとか、学生と一緒にいったときの思いみたいなことが聞けて。ただ、結構、皆さんからは、「あんまり学生は役に立たないんじゃないか」みたいな、どうしてもそういう、そうなのかなって思ったりして、どうしたもんかなっていうふうに思ってるところあるんですが、お約束の時間があと少ししかないので、じっくりいろんな話をしたかったんですが、これは、先ほど内川さんもおっしゃられてましたけども、そんなすぐ終わるような話じゃないねということなので。

落合： でも、1つ、2つぐらい皆さんから少しお話をうかがいたいです。

いろいろな視点を皆さんと共有ができたので、そこをもう少し、今後は膨らましていくことが、この棚田サミットの場になるのか、また、別のところになるのかっていうのはありますがそんな話もできればいいなと思います。先ほども言いましたように、四者四様なんで、必ずしも1つのストーリーにっていうふうなところはならないんですが。

あと1つだけ、皆さんにもう一回聞きたいと思ったのは、そもそも、私が今回、このお話を皆さんにお声掛けをしたのは、学生に農村のことを知ってもらうという教育面でプラスを得つつ、かつ、地元の人たちから何かをもらうだけじゃなくて、何かお返しができるような方法がないかなと、そういう考え方がないかなというところが元だったんですね。学生を連れて地域に調査で入るときに、学生に対して何を求めるのか。学生に対して何を、こういうことを注意してねと言うのか、それとも、学生に対して、こういうのを学んでほしいとかっていうことと、もう一つは、地域の人たちに対して、私たち地域に入ります、そのときに、どういうお話をすべきなのかと。

地域に入るっていう状況が、今回、お話伺ったら、全然スタンスが違うんですね。私みたいに、30人、40人の学生を連れて行って、マイクロバスと、他に車2台ぐらい出してもらって入っていくっていうのと、4年生の学生3人、4人連れて、地域の中に、卒業論文のテーマを持って入っていくっていうのは、随分違うと思うんですけども、全然、状況違うままで結構です。皆さんが今、大学で、学生、大学院生と一緒に地域に入るときに、どういうふうなところを、学生の教育のために、それから、地域貢献のために気を付けたいかと、気を付けなきゃいけないなと思ってることについて、先ほどお話しいただいた中と重複する形でも全く問題ないですので、それを今日は少しお話をいただいて、終わりにしたいなというふうに思います。じゃあ、先ほどの順番でよろしいでしょうか。井上さんからよろしいでしょうか。お願いいたします。

井上： 私の場合、冒頭に申し上げたように、必修科目のため行かなければならないから参加する学生と、個別に卒業研究につなげるために必死な思いでフィールドに行く学生の2パターンを見ている関係で、分けて話します。単位を取るために行かされてる感満載の、遠足に行くような気分で、お客さまとしてしか行かないような、何なら、ご飯がどうのと文句言うような、そういう感じの学生を見て、最初、教員になり立てのときはびっくりしました。高校まで、全部先生が準備したものを机の上に置かれて答えて、お母さんが準備したご飯を素直に食べるっていうことしかしたことがない、そういう学生なので、やっぱり、一番は想像力の欠如が大前提に、学生の側にあるんだなっていうのを理解しました。

ということは、その想像力を補うために、どれだけこの実習を組むために、事前に、地域の方が準備してくださったのか、どれだけ1つのことをやるために、私も含めていろんな人が汗をかいてるのかっていうことが分かるようなことをするっていうのと、あと、私、机の見えるところに貼ってるんですけど、「参加しなければ決意なし」って書いてるんです

よ。というのは、どうしても、私がしたほうが楽なんですね。私が全部準備して段取りしたほうが楽で、ちゃちゃっとやったほうが楽なんですけど、ぐっところえて、これを見て、学生が参加しないと、学生が決意することもないということで、気長に、学生がやるのを待つというのをやらないと、行かされてる感は消滅しないなっていうことで、とにかく、学生に、調べたりとか、自分で段取りを組むとか、ものすごく嫌われますけど、そういうことを学生にしてもらおうっていうことをまず念頭に置くっていうのが、必修の授業の場合ですね。

ゼミのほうは、やっぱり、ゼミとしての文化をつくっていかなくちゃいけないなと思っていまして、そういう意味では、私から学生、学生でも先輩から後輩に対して、姿勢が受け継がれるっていうのが、やっぱり、一番重要なところかなと思っていまして。なので、それは、新しく学部が立ち上がって、最初からできるっていうことがすごく、ある意味、いいことだったかもしれないんですけど、1年生のときに遠足みたいに行かされてる感じでフィールドに行ったことがある学生が、私のゼミに来て初めて、「フィールドワークが面白いっていうことが分かりました、先生」って言ってくれたりとかして。でも、それは、やっぱり、厳しさもあって、先生から言われるよりも、先輩から言われるほうが、ちゃんとしなくちゃいけないっていう学生側の姿勢にもあるみたいです。

やっぱり、そういう意味では、私自身が身を正さなくてはいけない。例えば、地域と私の関係で言うと、やっぱり、私自身がたくさん、ここだけの話ですけども、専門家に許否されてきた実務家時代の経験があります。何か言ったら、「そんなの無理だね」って言われたり、「そんな素人考えじゃ駄目だね」みたいな感じでずっと否定されて、何度も悔しく思ったことがあったので、そういう意味では、頑張ろうとしている人たちが言えることが、ちょっと、「ん？」と思ったとしても、それは、頑張ろうと思った気持ちが重要だなっていうことで、やっぱり、一番リスペクトして、気持ちに寄り添うっていうことを第一に考える。そういうことが学生にも伝わっていればいいなと思っています。それが、だんだん、文化として地域との向き合い方っていうところにも反映できたらと思っています。

落合： はい、ありがとうございました。では、内川さん、お願いします。

内川： まず、学生に対してというところですけども、前提として、先ほどの皆さんの話聞いて感じるのは、僕は基本的に学習型、学ばせていただきますみたいなことでしかないのかなと。交流と言うと、貢献もしてるみたいなことを期待しちゃうけれど、そこはすごくハードル高いし難しいので、むしろ、学習型と言っちゃったほうが分かりやすい。学ばせてくださいみたいな。

そのときには、学ぶ人に何か伝えたい人が地域にいてくれたら良いなと。

特に、3回生よりも前の人たちには、地域が学習する場として位置付けられるんだろうなと思います。卒業研究に入った人たちは、それなりに貢献できる可能性があるので、そこは、きちんと分けして。もちろん、特定のテーマに対してだとは思いますが、研究型として分ける。完全には分けられないかもしれないですけど。もちろん学ぶ部分はあるので。

そういうことができる場、地域というのは、結局、信頼関係を今まで築いてきているところなんですね。他の先生方も多分そうだと思うんですけど、長く付き合ってるところじゃないと、いきなりぽっと行って、受け入れてくれるわけじゃない。「それをとにかく壊さないでね」っていうことは、学生には言っています。「土足で人の家に入らないでしょ」と。「ちゃんと、それはみんな、続いてくものなんだよね」っていうことは、言って

いるところです。

地域に対しては、とにかく「学習者に対しては温かく見守ってください」みたいな感じでお願いする感じで、地元の特に住民の方にはお願いするみたいな感じです。

もう一つは行政の方ですけど、行政は期待をすごくする部分も、場合によってはありますよね。だけど実際「学習を支援するという部分をサポートしてほしい、一緒に考えていただけないですか」とお願いする。もう一つは、短期的でなく中長期的に、見てもらうような視点を持ってほしいなっていうふうには、これは言っていないですけど、あります。次のステージのための投資っていうか、大学が限界に来ているので、地域貢献をする状態には、正直なかなかなれない。それを可能にするための場づくりを、やっぱり、行政も一緒になってつくることから参画しないと、なかなか今の状態で求められるだけっていうのではうまくいかないんじゃないかなと思っていますところ。以上です。

落合： ありがとうございます。そうしましたら、武山さん、よろしいでしょうか。

武山： 地方大学の先生方は実感されると思うんですけど、地元の国立大学に対する地域の方のレスポンスっていうのは、非常に強いものがあるんですね。うちも、愛大、愛大って言って、皆さんに大切にさせていただいて、「愛大生のためやったら、何でもするよ」と言ってくださって、すごくレスポンスしてくださるんですね、申し訳ないぐらいに。それに対して、ときに学生が勘違いしてしまうことがあります。「やってあげている」とか「来てあげている」みたいな感じで。ですから、それが一番怖い。皆さん、おっしゃっていたことだと思うんですけども。

心掛けてることは2つあって、1つは、まさに、今、内川先生がおっしゃったことですけど、「先輩方が築いてきた信頼であり、それを私たちが次の後輩たちに渡せるかどうかっていうこと、君たちにかかっているよね」っていうことを、行きの車の中とか、船の中とかで、やっぱり、ちょっと説教がましいかもしれないですけど、伝えるっていうことは心掛けています。さらには、「あなたたちが就職したら、今度は学生を受け入れてね」っていうこともお願いをして、これが継続するように心掛けてはいます。

もう一つは、私自身が最大のレスポンスを現場で、農家さんや行政さんに表現する背中を見せるっていうことを強く意識しています。学生が見たときに、「先生はこういうふうに思ってるんだな」っていうことが暗に伝わるように、最大限の言葉遣いで学生に示す。当然、口頭でも指導するけれども、自分自身がこんなにも現場に対してレスポンス持っているんだっていうことを学生に見せることを意図的に心掛けてやっています。

もう一つ、現場とのお付き合いが長い中でこの現場は信頼できるなとか、この方とお付き合いが長くなってきてお互い理解できているなと思えた場合です。さっき井上先生おっしゃったんですけど、私たち教育者としては、学生の自発性とか、ともすると、失敗するかもしれないものをぐっと我慢して、事前に止めずに、見ておかなきゃいけない瞬間ってあるんですよね。なので、そういった私たちの気持ちを現場にお伝えして、つまり、「もしかしたら、失敗するかもしれないし、失礼があるかもしれないけれども、ほんとにそういうことがあったら申し訳ないんだけど、彼らの成長のために許していただけないか」っていうこともお伝えをするようにしています。それで、彼らが失敗したら、私が平謝りに謝るっていうことも、当然、心掛けています。

なので、コミュニケーションですかね、トータルで言えば。私自身が現場の皆さんに、どんな気持ちで現場に行っているのか、どんな悩みがあるのかっていうことをきちっとお伝えすることで、うまくいくようにできたらいいなと思っていますところ。以上です。
落合：ありがとうございます。私が学生と一緒に調査連れてって、どんなふうに振る舞っ

たらいいのか、どんなことでお役に立てるのか、皆さんに聞いたら、いろんないいヒントが出るのかなと思ったら、同じように苦労してるっていうふうなお話が伺えたということで、やっぱり、簡単にはできることじゃないから、今後いろいろ相談しながら、ぜひ何か考えていければと思います。

さらに、地域の人たちが諦めモードっていうか、「もういいよ、大変だから」っていうような人たちを元気づけるとか、前向きになってもらって、少し頑張ってもらう、そういうエンパワメントみたいなところの話もできればなと思ってたんですけども、それは、やっぱり、かなりハードルが高いということが分かったので、ただ……

井上： その点で、1つだけ、後で話していいですか。

落合： はい。ただ、そういうことも今後できていけばいいなと思っているので、その辺りはまた、次の課題として、今後一緒に考えさせてください。よろしくお願いします。

井上さん、ございますでしょうか。

井上： そのエンパワメントで言い忘れたっていうことを最後に言わせていただいて。

落合： はい、どうぞ。

井上： 私、地域にずっと入ったりとか、最近も結構、長期間滞在させてもらったりとかして、入るときに、農家さんが全然私に期待してなくて、「井上先生は、この地域好きか」って、いつも聞かれるんですよ。「楽しんでる？」とか、そういうことを聞かれるんですね。私も、その地域が好きで好きでたまらなくなっているわけですよ。滞在期間が長いほど。だから、そういうのを率直に言うわけですね。「別に、何もしてくれなくてよくて、ここに来て、楽しい時間を過ごしてくれたらいいんだ」っていうふうにもいつもおっしゃってくれて、それは学生に対しても同じように思われているみたいです。だから、学生がその地域を好きと思うことが、何よりも、もう諦めモードになっていようが、すごく誇りに感じたり、まだやっていけると希望に思えるような。それこそ、武山先生が冷凍保存みたいな話されてましたけど、私もそういうことたまに思うことがあるんですけど、時代が変わったら、世の中が変わったら、内川先生がおっしゃっていたみたいに、コロナとかで、やっぱり、価値観とかいろいろ変わる中で、その山奥の地域が好きと思えるような人が増えるような時代になったりとか、多分、あるんだろうなと思うんですよね。

だから、エンパワメントが形に見えなくても、好きと思えるファンが学生にも広がっていくっていうことが、そういうことが、最終的にエンパワメントにもつながるような気がします。

すいません、私、最初に取っちゃって、おいしいところを。

落合：ありがとうございます。大事な話ですよ。僕は、ダイレクトに何かできないかなって思ってたんですけども、回り回ってみたいところの話も、着実にできるところから一歩ずつっていうのはすごい大事だなと、基本的なところが大事だなっていうことを改めて考えさせられました。ありがとうございます。

じゃあ、時間もそろそろ迫ってきてますので、これで閉じたいと思います。今日は、ありがとうございます。

内川： お疲れさまでした。ありがとうございます。

井上： ありがとうございます。

1



第26回全国棚田（千枚田）サミット

分科会「棚田地域で外部人材ができること」

農村地域での調査研究や教育に関する
大学の悩みと本音

2021年9月

早稲田大学社会科学総合学術院 准教授
落合基継

2

本分科会の趣旨

落合が学生を引率して農村地域にて調査する際に、

- ◆「単にお客さんになるのではなく、なにか地域のためにできるような活動をするにはどうしたらよいのか」、という思いがありながら、
- ◆「経験の少ない学生が限られた訪問回数の中でどのような貢献ができるのか、またこういった大学の活動が地域のみなさんからはどのように思われているのか」、という不安もある。
- ◆外部人材の1つである「大学」が地域とどのようにお付き合いや交流をし、どのような形で貢献できるのか、について全国で日々動しんでおられる大学教員とこれまでの経験や問題意識を共有し、
- ◆棚田サミット参加者に多くいらっしゃる地元の棚田保全のグループや自治体職員のみなさまにも共有していただき、今後の交流をよりよいものにしていきたい。

3

登壇者の紹介

井上果子（宮崎大学地域資源創成学部 准教授）

内川義行（信州大学農学部 准教授）

武山絵美（愛媛大学農学部 教授）

落合基継（早稲田大学社会科学部 准教授）
（敬称略）

4

早稲田大学 農村デザイン研究ゼミ

- ◆配属は、2年生10月に。
- ◆現在、4年生23名、3年生24名が所属。2年生13名所属予定。
- ◆学生は、山形県大蔵村四ヶ村地区、静岡県伊豆市茅野地区、その他にて活動
- ◆山形と静岡では、学生が“班”を作り活動（詳細は後述）
- ◆訪問や関わりは、「継続的」を考えている。継続して訪問することで、地域に学生なりに具体的な貢献ができるのではないかと考えている。
- ◆「その他」では、耕作放棄地、食育、農村交通、都市農業など

5

山形県大蔵村四ヶ村地区での活動



6

山形県大蔵村四ヶ村地区での活動

- ◆訪問のきっかけ：山形県庁職員からの紹介（落合より地区紹介の依頼）
- ◆落合より役場・地域への説明：「早稲田の学生は都市地域出身者が多く、農村部のことは知らないなので、まずは訪問させてほしい。継続的に訪問し10教えてもらったら、1でも2でもお返しできれば、と考えている。」
- ◆班は、①農業班、②集落班、③環境班、④文化班、⑤6次産業化班、⑥観光班、の編成。横串を通すように、1)SNS班、2)映像班、3)GIS班。
- ◆訪問：年2回（夏休み9月と春休み2月）、2泊3日
- ◆学生としては、学生なりに地域に貢献できれば、とのスタンス
- ◆現地のお考え（落合の想像）
 - ・山形県：大学・学生には地域活性化に貢献してほしい
 - ・村役場：お客さんとして受け入れ
 - ・四ヶ村地区：お客さんとして受け入れ

7

静岡県伊豆市茅野地区での活動



8

静岡県伊豆市茅野地区での活動

- ◆訪問のきっかけ：静岡県庁職員からの紹介（落合より地区紹介の依頼）
- ◆落合より役場・地域への説明：「早稲田の学生は都市地域出身者が多く、農村部のことは知らないなので、まずは訪問させてほしい。継続的に訪問し10教えてもらったら、1でも2でもお返しできれば、と考えている。」
- ◆班は、①観光・レジャー班、②広報班、③食資源活用班、④少子高齢化移住対策班、⑤獣害対策班、の編成。横串を通すように、1)SNS班、2)映像班、3)GIS班。
- ◆訪問：年2回（夏休み9月と春休み2月）、2泊3日、および必要に応じて
- ◆学生としては、学生なりに地域に貢献できれば、とのスタンス
- ◆現地のお考え（落合の想像）
 - ・静岡県：大学・学生には地域活性化に貢献してほしい
 - ・市役所：静観
 - ・茅野地区：地域の活動に参加・貢献してほしい（班ごとに、地域住民3名程度を担当として）

9

大学の地域での活動の目的

大学の地域での活動の「目的」 — 教育効果と地域貢献 —

- ◆学生が現場・実践で農村・農業を知ること
- ◆地域が学生を受け入れることで維持・発展につなげること

それに対して重要なことは、

- ◇受け入れ側（地域側）と訪問側（大学）の「思い」の共有
- ◇その上で、地域の維持・発展に少しでも貢献できれば（大学側は、訪問でただで教育的には得るものがある）

10

大学と地域の連携のあり方

＜大学と地域の連携のタイプ＞

- ◆**交流型**
地域の農家や住民とともに、農作業やイベントをおこなう活動タイプ
- ◆**価値創出型**
主にグループ単位での活動を計画的におこなない、地域の新しい価値発見を目指すタイプ
- ◆**課題解決実践型**
地域の抱える課題に対して、具体的な実践活動を通して解決を試みるタイプ
- ◆**知識共有型**
教員や大学院生が中心となり、専門知識をもって地域課題の解決に貢献しているタイプ
- ◆**見学受け入れ型**
学生が地域に一時的に訪問し、インタビュー等をし勉強するタイプ

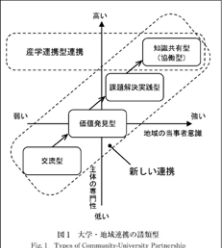


図1 大学・地域連携の活動型
Fig. 1 Types of Community-University Partnership

中塚雅也・小田切南英：大学地域連携の実態と課題、農村計画学会誌 Vol. 35, No. 1, 2016年6月

11

大学側と地域側とのマッチング

	大学側		地域側	
	教員	学生	行政	地域
見学				
交流		●		
価値創出				●
課題解決実践	●		●	
知識共有				

12

大学側と地域側とのマッチング

	大学側		地域側	
	教員	学生	行政	地域
見学				
交流		●		
価値創出				●
課題解決実践	●	●	●	●
知識共有				

13

大学側と地域側とのマッチング

	大学側		地域側	
	教員	学生	行政	地域
見学				
交流	●	●	●	●
価値創出	●		●	●
課題解決実践	●		●	●
知識共有				

14

大学側と地域側とのマッチング

	大学側		地域側	
	教員	学生	行政	地域
見学				
交流		●		
価値創出	●	●	●	●
課題解決実践	●	●	●	●
知識共有				

15

大学側と地域側とのマッチング

◇教員の学生へのアプローチ — 教育効果のために —

- ・**レベルの設定と深化**
 - 『学生がどこまでできるか』を判断する
 - 教育効果を考慮すると、なるべく“高く”設定したい（地域と要調整）
 - 学生が地域を理解し、連携を深化させる
- ・**学生への伝達**
 - 学生に地域で活動することの意義を説明
 - 「当事者性」の説明
 - 地域の思いの伝達

◇教員の地域側へのアプローチ — 地域貢献のために —

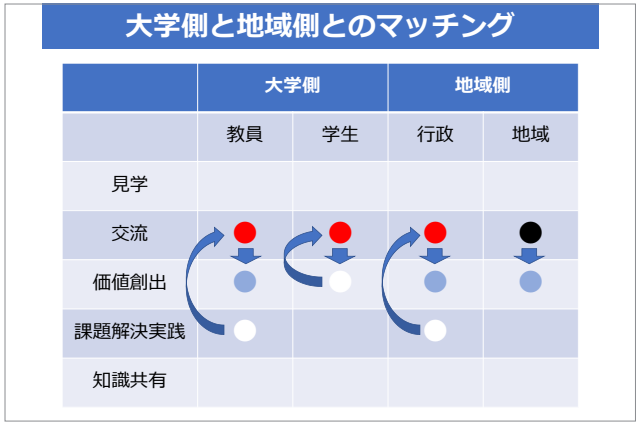
- ・**地域への伝達**
 - 大学側の考え・状況について、事前に正確に伝える
 - 「当事者性」について大学は理解していることを伝える
- ・**地域の深化**
 - 継続的に訪問し、実際に学生の姿勢を確認していただき、対応を深化していく

16

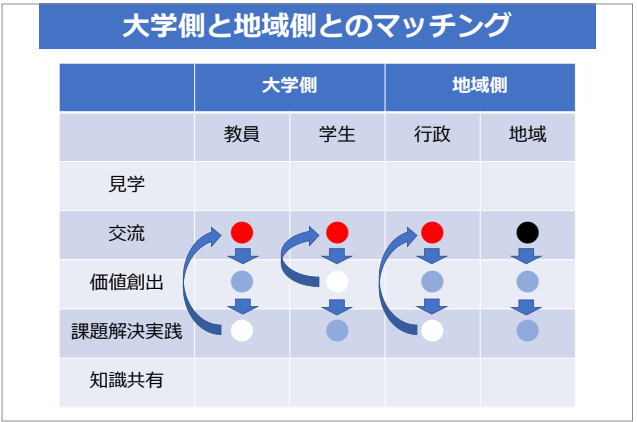
大学側と地域側とのマッチング

	大学側		地域側	
	教員	学生	行政	地域
見学				
交流	●	●	●	●
価値創出	●	●	●	●
課題解決実践	●	●	●	●
知識共有				

17



18



19

- 大学が地域で調査するときここがけることは？
- ◆学生と地域に訪問するときに、学生に注意して伝えていることはあるか？
 - ◆学生と地域に訪問するときに、役場の人、地域の人に伝えるときに注意していることはあるか？
 - ◆地域に学生と訪問して、「ちょっと困ったな」という経験は？
 - ◆学生と地域と訪問するときに、受け入れ側の人をお願いしたいことは？
 - ◆学生と地域を訪問する際に、大学側（訪問する側）として気をつけることはなにか？

資料 — 井上 果子 氏 —

1

全国棚田（千枚田）サミット

分科会
農村地域での調査研究や教育に関する
大学の悩みと本音

「気持ち」でつながる
農村網の構築を目指して

2021年9月

宮崎大学地域資源創成学部 井上果子

2

自己紹介（農村ネイティブ&地域づくり@ベトナムなど）

- 生まれ・育ち：長崎県北松浦郡佐々町（二女）
- 1995-1999：留学（カナダ/イギリス）
- 2000-2003：海外（途上国）の公共事業に予算をつける立場（政府系金融機関）
- 2003-2009：政策協議、事業評価など案件によって立場が変化（国際協力コンサルタント）
- 2009-2012：紅河デルタ農村研究（2012：博士（国際協力学））
- 2012-2015：ベトナム紅河デルタ農村住民とコメづくり・販売 → NGO・研究・実践者（地域とは約10年のつきあい）（教育・研究関係者・企業等から受け入れを依頼される立場）
- 2016-現在：研究・教育で日本（特に宮崎県）の地域に訪問

4 地域の課題、人づくり（教育）と向き合う

3

ベトナムでの実践・アクションリサーチ（実務経験を活かしてマネジメント）

- ・無農薬・減/無化肥、SRI農法による稲作の推進
- ・農家グループによる稲作管理体制の構築、トレーサビリティの確保のための生産履歴記録
- ・消費者、販売・流通業者と生産者をつなぐ+信頼関係構築

農家@農村

消費者@都市

SRI農法・適正技術の移転

トラストシステム（適正稲作管理・トレーサビリティ体制）構築

マーケティング、消費者ニーズの把握・対応

4

1

集落自治力を意識したプロジェクト化（皆でロゴ+商品名を検討）

2

3

4

5

1

2

7

2

現地訪問希望者の受入

- ベトナム研究者が、別事業で参加：うまくいかず撤退
- 日本企業の視察受入：ベトナムのコーディネート団体が強引に手配（現地はかなり労力・費用をかけて対応；困り果てて日本企業にコンタクトするも、現地のことを一切知らない）
- 教育プログラム受入
 - ・予算を出す団体から教育にふさわしいか評価される
 - ・地域の人々のために、環境配慮のためのごみ箱を寄贈いただく
- 日本の調査研究者：調査で長いアンケートへの回答依頼・時間を使って回答するも、その後、フィードバックなし。

現地側は受入ることから得られるわかりやすいメリットはあまりない。お役にたてるのであれば、という「善意」で対応

（裏腹に、「収奪」の積み重ねで、警戒している地域もある。）

9

3

わかりにくい「博士（国際協力学）」をもつ「女性」教員が地域づくりの研究・教育に関わろうとすると・・・

- 地域有力者からの依頼に応じて地域の国際事業に協力 → 「女性は・・・」（サポート役に徹しなければならない）
- 地域実習の計画づくりに参加しようとする → 「英語・国際・・・」（決められたプログラムをこなす教員として地域実習に参加）
- 地域と学生・教員の間でトラブル → 批判の矛先に

他にも「ずっけ」エピソードは数知れず・・・

11

解決策：できることを地道に積み重ねる

- ・ベトナムで実習を企画・実施する（大学が持つ国際教育のニーズとも合致）
 - ・ベトナム異文化農村振興体験学習
- ・研究グループに（手を挙げて）入れてもらい、フィールドワークを行う
 - ・高千穂郷・椎葉山地域研究 → 何度も通ううちに地域の人々と親しくなる（過疎化・高齢化が進む地域の「継承」について考える。）
- ・生活者として、地域に溶け込む
 - ・近所の直売所のおばさん達と仲良くなる
 - 地域の農家さんやベトナム人実習生コミュニティのことを教えてもらい、研究や学生の卒業研究へと発展
- ・教育者として、地域で生活・活動する学生を応援しながら研究・教育に活かす
 - ・院生の棚田での活動に参加する（学生の卒業研究のテーマとして発展）

6

1

2

3

ベトナムで注目されるようになると・・・

引用：井上果子, et al. (2016) 農村振興プロジェクトに見る農村社会のリアリティ。ベトナム紅河デルタ3農村集落の比較研究。農村計画学誌, 2016, 35, 論文特集号: 266-273.

8

3

これまでの経験・知見を活かしてがんばるぞ～！

満を持して、帰国！
大学教員となり、やる気満々

そんな甘くなかった・・・

10

3

専門性と地域の期待

わかりやすい（ニーズとの関係明瞭）

＜スティグマ＞
障がい者
外国人
女性

＜大学＞
協定
産学連携など
私（海外）

＜私と学生（日本）＞
地域・大学側の見方によってB, C, Dのいずれか

＜外部人材＞
地域おこし協力隊
緑のふるさと協力隊
集落支援員

＜当初の自己イメージ＞
・農山村社会経済
・地域づくり
・事業マネジメント
・事業評価
・国際協調・交渉

12

3-1

日越共同学習（同じバスで移動）

ベトナムのお宅訪問&インタビュー

フィールド訪問

国連FAO（ベトナム事務所）訪問

13

3-1

2016年度以降：実習で学生と現地へ
(ベトナム農村振興体験学習)

- ベトナム農家さん・親戚のような存在
 - 地域側：「誰か連れて、また来たのだね」という（慣れた）感覚
 - 半農半Xの「X」として、地域を案内するサービスを提供して頂く
 - 生活や農的暮らしにハリになる？

- 学生≠「役に立つ」存在

学生に期待すること：ベトナムの学生と一緒に、農村を訪問し、現場のリアリティを感じてもらえれば十分。

13

14

3-2

ゼミ単位での活動
(例) 高千穂町の棚田

大学院の社会人学生＝自動車学校（梅田学園）の副社長
(山間地出身の祖父→棚田を守る活動に関心あり)

- ◆自動車学校経営上の（労働時間平準化など）課題解決も念頭に教習所教官（農業機械運転も得意&元野球部など）とともに棚田でのコメ作りを始める。
- ◆2021年度に棚田オーナー制を開始（収益は、現地宿泊費に当て、遠方から通う教官の健康維持に役立てる）

→井上：棚田オーナーになる。学生とともに「田んぼアート」の田植えに参加。
(野球が好きな学生を、「梅田学園は、野球部が活躍しているよ」と誘ってみた。)

14

15

3-2

青いTシャツが眩しい元野球部員：棚田を地域の方々と一緒に守る
(そこに学生がちょっとだけ邪魔する)



15

16

3-2



オーナーになった水田

田んぼアートに学生とともに参加

「KAKO LAB.」
と彫刻してある
(うれしい)



16

17

3-2

参加した学生の感想

- ・普段見ることのできないような景観
→このような景観がなくなってしまうのが生まれる
- ・自然に触れることで癒しのような効果がある
- ・田植え体験は初めての体験で新鮮
→毎日するのは大変かもしれないが、たまにするのは楽しい

- ・地域の方にも何人か声をかけていただけてうれしい
- ・参加している人と一体感のようなものが生まれる
- ・参加している人たちはとても楽しんでいた
- ・アートが出来上がるのが楽しみである

<今後>
中山間地域と都市部をつなぐ活動に参加したい。
棚田オーナー制について知りたい。

ゼミ生すべて「棚田見たことない」

17

18

3-2

気づき

学生は、「野球」が好きだけでも、（根っこにあったのは）「身体を動かすこと」が好き、ということだった。

→景観が素晴らしい棚田で身体を動かす作業を気持ちいい！楽しい！と感じる学生だった。

教員も学生も、他者にとっては「得体のしれない」存在
→関わってみてはじめてそれぞれが何を得意とし、何を楽しいと思い、何を好きなのか、わかりあえる。

18

19

4

国際協力の現場で培われてきた学び

従来の発想：人間のニーズ上の欠落を補填する
→誤り：人間を行為主体（Agents）ではなく、ケアの対象（Patients）と扱っている

課題を抱える人々を前にして考えるべきことは、「彼らのニーズは何か、ということではなく、もし彼らが本来の力を発揮する自由を与えられたらばどう行動するか、そして君はどのようにしてその自由を拡大できるか、ということである。」

(アマルティア・センの発言：穂坂光彦 (2017) P.20)

引用：穂坂光彦 (2017)：『開発福祉の視点』、『地域共生の開発福祉』（日本福祉大学アジア福祉社会開発研究センター編）ミネルヴァ書房、pp19-35。

19

20

4

地域の課題@棚田地域（中山間地域）

中山間地域等直接支払制度：集落協定をもって、集落の棚田・農地を共同で管理

- 高齢化が進み、身体が無理がきかなくなり、どうしても耕作できなくなる高齢者が出てくる
- 残された動ける人が管理する農地面積が増える

「Aさん、農繁期に6kg痩せたと言った」

一人が背負うことができることにも限界がある！！

注：Aさん＝農地を引き受けて管理してくれている人

コメは（耕作するより）買った方が安い。
農地を耕作するために、地域の人々に信頼されている人が無理して農地を管理している現実。

20

21

4

でも・・・
少しは役に立っていないのか？？？
役に立てたら、（自分が）うれしい。

地域が抱える課題とは？
地域の課題に寄り添いつつ、素人でも結果的に役に立っている活動をされている「九州つなぎ隊」から教えていただいたこと

21

22

4

九州つなぎ隊（<https://9tt.jp/about.html>）

「いま動ける人」同士が、場所や分野の枠にとらわれず設備無尽に「つながって」情報を共有し、多種多様な問題にフィットするための、具体的な行動への道筋を立てる。

「小さなつながり」をいくつも積み重ねて連鎖させれば、住民レベルで日常的に助け合い、支え合っているような流れに展開できる。

大学生＝（お金はないけど）動ける人
「縦横無尽につながる」農村網の1ノードとなる！

22

23

4

仕組みづくりの上で必要となるStep

Step 1：農作業の細分化（＝「関わりしろ」の明確化）

- ・内部化されている一連の農作業を細かくタスクに分ける

Step 2：タスクを多様なプレーヤーとマッチング

- ・A:素人でもできる人手のいる作業（種付け、収穫など）→例：学生、ボランティアなどの外部人材（学生とともに参加）
- ・B:農地に定期的に通えないときできないこと（水管理など）→例：農家、地域内の半農半X人材など
- ・C:熟練者しかできないこと（農業機械を使った農作業など）→例：農家、農業法人への外注など

Step 3：やるのであれば、楽しく！

- ・地域住民と外部からの参加者にとって、楽しさと喜びあふれる体験
- ・成功体験や成果（収穫など）を確認する機会への参加

23

24

4



九州つなぎ隊より20人程度（子ども含む）参加

大学：参加しながら現場から学びを得る。

24

25

4

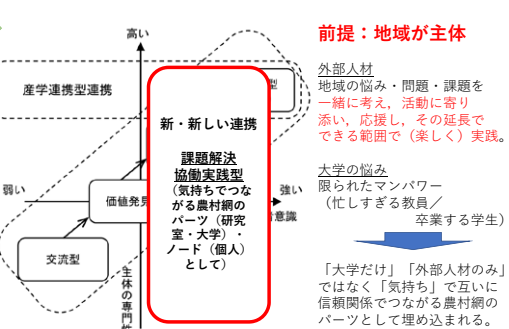


図1 大学・地域連携の諸類型
Fig.1 Types of Community-University Partnership

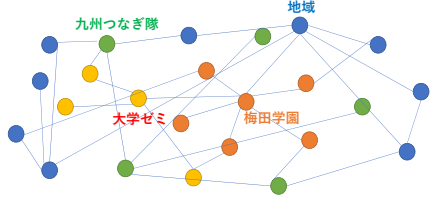
25

26

4

まとめ

- ・地域側：農山村の現状を学生に知ってもらった後に、社会に出て活躍してもらうこと（人づくりに貢献していること）を喜びと思っていたらどう？！
- ・（役に立っていないもの）地域が主体的に行う活動に、「気持ち」で寄り添い、つながる農村網の1パーツや1ノードにはなれるかも？！



26

27



大好きな棚田の風景
勝手な思い：（素敵な場所だから）後世に引き継ぎたい

27

資料 内川 義行 氏

1

2021/09/17 棚田サミット オンライン・シンポジウム
＜農村地域での調査研究や教育に関する大学の悩みと本音＞

信州大学学術研究院 農学系
内川 義行

棚田地域での研究・教育・地域貢献を考える

2

報告のながれ

1. 棚田との関わり
2. 感じている課題
3. 考えている方向性

3

【1.棚田との関わり】研究の原点：劣悪な労働環境、道路・水路なしの耕地条件（急傾斜地水田）農業土木分野として作業環境の面からの研究アプローチ

写真：南良和(1967)

4

増大する耕作放棄地：懸念される地域の消滅、災害、獣害等の諸因子にも…

5

表 棚田の耕作放棄化の要因と影響（木村先生の素因・誘因論）

素因	耕作放棄につながる圃場の物理的要因＝耕地条件の悪さ
1)機械利用の良否	①機械搬入の良否(区画と道路との関係) ②機械作業の良否(区画の規模・形状等)
2)通作の便の良否	①距離 ②幅員・路面の状態等
3)土壌条件の良否	
4)水利条件の良否	
5)日照条件の良否	
誘因	耕作放棄の動機形成要因(インバウト)
1)外的要因	農家を取り巻く条件(生産調整等)
2)内的要因	農家内部の条件(労働力の減少等)

影響の種類 内容

直接的影響 隣接する耕作放棄地から受ける影響
病害虫・鳥獣害・日陰田の発生等

間接的影響 耕地管理の共同性による影響
道路・水路等の維持管理不良

木村和弘「山間急傾斜地水田の荒廃化と全村園圃整備計画」農業土木学会誌51(5)1993より一部改変

6

等高線型工法による区画整備技術（木村・有田両先生のもとで…）

千曲市続捨地区 等高線型整備
残る上下区画間の段差

7

法面への足場小段設置の具体指針提示

卒業論文・修士論文研究

田圃整備による一様な畦畔法面 ⇒ 一定勾配の法面確保・凹凸の解消
⇒ 足場小段(ステップ)の設置 ⇒ 不安定な足場解消 スリッパ・転倒防止

2000年から農林水産省ほ場整備「計画設計基準」に採用

8

しかし整備を行わなかった、できなかった棚田も多く残った……

残された棚田を整備以外の方法で「保全」すべきと考える人々が
(例：棚田オーナー制度、文化財化… 守れる面積は圧倒的に少ないが…)

長野県白鳥村青鬼地区

9

棚田の区画形態がもつ時系列性 一多様な区画形態がもつ「動態的産業遺産価値」一

長野県千曲市 続捨棚田のゾーニングによる「文化財化」と「保全」計画策定支援

11

大学近くの「名もなき棚田」を借りて…10年間

教員になり、学生達も自分も、棚田のことを研究するのによく知らないことだらけ…
やってみよう！ 卒業生の農家に協力してもらいはじめてみるが…

13

【3. 考えている方向性】新たな棚田保全策にむけて

非農家が主体となる農村で、彼らが創出する
環境に配慮した農村生活のための
家庭菜園技術と農園計画
(棚田地域版も模索中)

一般市民が楽しみながらもこれら環境問題への意識を高め、行動を変革するすべとして家庭菜園のもつ意義は
少なくない。家庭菜園はレクリエーションでありながら身近な食の一定量自給や食生活、環境意識を変化させる機
縁になると同時に子供や家族への啓蒙・教育的要素も含むなど、極めて総合的要素に富むと考えられるためである。

特に農山村地域では、非農家割合が7割以上に増大する中、利用可能な空間は十分あり、またコロナ禍では都会
からの移住を含めその人気や期待は高まっている。しかし、現在おこなわれている家庭菜園の中には環境に配慮し
た形態は少なく、農業や肥料を全く用いない方法はいくつかの取組みや参考図書はあるが、普及や理解には障壁
が多い。

長野県南箕輪村で「環境配慮型」家庭菜園普及の課題・可能性について試験研究中

15

地域の持続的管理システム 過疎・高齢化 人手不足の中で…

各種土地利用(森林、草地、水田、畑地等)の中で「棚田」を位置づけ、
相補関係を形成する仕組みも必要では？

人口減少 労力不足 ⇒ 商品ブランド化 機械化 スマート農業等だけでなく
自然環境との調和を活かし
動物と共存する方法なども十分あるのでは？

内川義行(2018)：中山間地域の新たな土地利用としての山地農業の意義と課題、農業農村工学会誌6(11)、p.989-992

10

白鳥村 青鬼(あおに)地区 ＜棚田百選 重要伝統的建造物群＞
保全に苦しむ山腹用水路(3km)掃除の支援協力(毎年4月末)

12

【2. 感じている課題】

・地域研究・教育を行う者として、地域を知る「場」(協力してもらえ地域)の存在は不可欠
・一方で、地域社会にとっての真のメリットはどこにあるか？ ⇒ **地域の持続・振興(？)**

・現在、「地域の持続・振興」の中身こそが変化、問われているのでは！
地域では、短期・中長期課題が山積みだが 解決方法は従来の方向性では限界か？

・地球環境問題や新型コロナウイルス問題などの、より包括的な課題にも応える必要が
(包括的課題に反するブランド品開発や6次産業化では、地域も地球も持続できない…)

・中山間地域の農村でさう約8割が非農家となった状況
従来型の対農産業主体の研究や方法??
コロナ禍で特に注目される、農村生活の新しいあり方

・大学が現行体制で「コンサルタントやアドバイザー」的
業務実施との限界
(スタッフの質・量不足、資金難、学内での業績低評価…)

従来の現状はよく示されているが、
時代は少し変化している状況も…?

図1 大学・地域連携型研究開発
Fig.1 Types of University-Community Partnership
中庭賢也、小田切悠美(2016)：大学地域連携の実態と
課題、農村計画学会誌3(2/1)

14

地域の持続的管理システム 過疎・高齢化 人手不足の中で…

山地酪農：長野県根羽村で試験研究中（武山科研・村受託研究）
棚田以外の土地利用(転換)や隣接地も含む保全策

根羽村との連携協定のもと
高橋地区内の林間地、遊休農地に試験放牧2018年～
(管理農地化)

林間地に放牧し、下刈り効果にもなる
若手根羽農家 中野牧場(HPより)

16

地域の持続的管理システム 過疎・高齢化 人手不足の中で…

土地(空間)利用

森 林：里山荒廃・生産林の人手不足
農 地：遊休農地、耕作放棄地
農 山 村：土砂災害、鳥獣被害など

山地酪農

産業

林 業：下草採取 ⇒ 飼料利用
農 業：高付加価値化
畜 産：酪農・刈草 ⇒ 飼料利用
理 理(畜産物加工等付加価値)
他 産 業：観光・学び、農機、環境、動物、食

生命

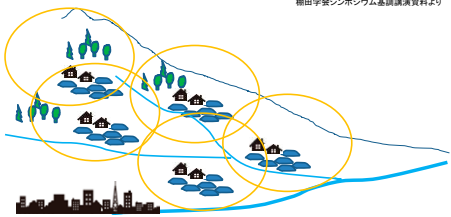
人 間：若い羊不足解消(給餌・糞尿処理不要)
家畜との共存
動 物：健康増進
アニマルウェルフェア
食：グラスフェッド(安全・安心)

図 山地酪農の各種効果・影響

内川義行(2018)：中山間地域の新たな土地利用としての山地農業の意義と課題、農業農村工学会誌6(11)

17

【3. 考えている方向性】無名な棚田地域間による共生圏づくり

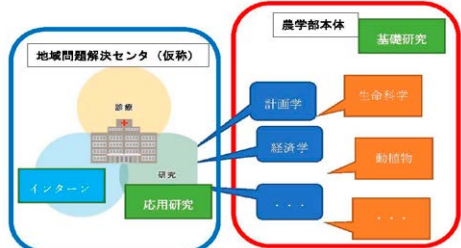


中山間地域の棚田は流域最上流部に位置する
棚田だけでなく周辺の森林や動物との共存も含め相互関係を展開
社会的価値(環境・教育・流域治水(防災)・共生...)
流域共生圏構想? (社会システムと支援制度構築)
・棚田米の流域内生産・消費関係の構築
・流域内非農家による多様な自家米生産支援
・環境配慮型農業による環境共生、災害抑制

18

【3. 考えている方向性】大学が本気で地域連携するためには...

「地域社会問題 臨床センター構想(妄想?)」



より明確な地域連携・貢献が望まれるならば【大学病院的】な仕組みが必要では??
・学部の基礎的研究とは独立して、現場応用(臨床)研究に特化
・インターン制度による、地域を知る教育の場
・多様な研究分野との協力
・資金は、各自治体等や地域からの提供を基盤に、主治医的に地域と連携?

5

現在、お世話になっているフィールドー愛媛県内子町泉谷(100選棚田)



6

少しでも「労働力」となり得るとすれば集団、つまり学生を巻き込む必要がある。しかし...

- 【体制の問題】
 - 地域での活動に興味があり、かつリーダーシップを発揮できる学生が必要。しかし、毎年、学生メンバーは入れ替わる。継続性が担保できないため、やり始めるのに躊躇する。
 - 地方大学では修士課程・博士課程の学生が少なく、学生間でノウハウが継承されない。また、就職活動でずいぶん時間が取られる(1月～8月)。4回生主体では、毎年ゼロから体制を立ち上げ直すループ。
- 【学生の安全確保の問題】
 - 学生の安全確保への大学の意識の高まり: 公用車を運転させられないため、教員が車で引率することが大きな負担。本来、地方大学であれば、学生が現場に行きたい放題のはずなのに。
 - 公共交通機関で近くまで行く(そこからどうするか?)、レンタカーを借りるとしても、どこから経費を出すか、自由に使える学内経費の量が極めて小さい。研究費としての外部資金は研究者の努力次第で確保できるが、地域連携のための費用は継続的、無条件に確保できない。確保できても何らかの成果報告が単年度ごとに求められ、これを(卒論、修論等とは別に)別途まとめるのは結局教員。
 - たとえば草刈り機を使わせる際には、講習、ヘルメット、フェイスシールドが必要。フィールドへ学生を出す際の事前の届け出書類作成、安全確保計画の立案、安全教育の実施、等、安全確保に係る手続きに手間がかかる。
 - 大勢で泊まりがけ・飲酒等も教員1名では安全管理が難しい(そもそも学生は日頃からあまり飲酒をしなくなっている印象)。昔は農家の方と飲むのが一番の勉強だと言われていたが、研究室を年配の教授1名で主催するケースが増えている。若手の助手等の不在は痛い。
 - 学生が自らサークル活動等で自主的に活動してくれるのであれば良いのだが、...

7

行政の皆さんからはアイデア豊富で元気な若者の参画を期待される。しかし...

- 行政担当者が数年おきに変わる。変わるたびにイチから大学の考え方を説明する。しかし、担当者の方により、担当者との関係性、やり方、考え方が変わるので、大学も巻き込まれる。
- 大学教員や大学生が「暇」と思われたり、学生には大学での「産学」よりも社会での「実践」が必要と思われたりしている、と感じることがある。大学教員としては産学あつての実践との意識が強く、ミスマッチがある。
- 継続性が期待できない大学には、実質的な効果に期待が持てないと思う。

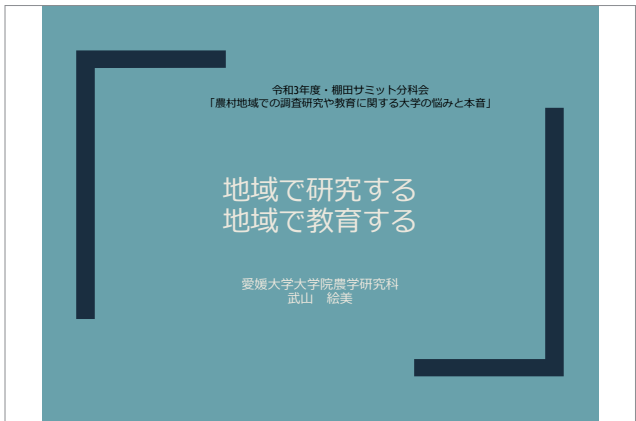


さらに、学生とともに地域で活動するための事務手続き、準備、計画、打合せ等に多くの手間をかけても、地域にどのようなメリットをもたらすことができたのか、実感がない。地元役に立ったという感覚は無い。

研究成果に期待、教育の重要性を実感してくださる地元の方がいれば、地域での研究・教育活動を継続できる。その成果を地元に戻すことで現場に喜ばれ、大学側も喜びを感じることができ。労働力に期待してくださる場合は、その期待に応えるのが難しい。

資料 — 武山 絵美 氏 —

1



2

現在、お世話になっているフィールドー愛媛県松山市中島(21.2km²)

- H11年度、イノシシが新たに侵入し、樹園地にて甚大な被害を被る。
- H24～25年度: 愛媛県と愛媛大学の連携協定に基づき、愛媛県より鳥獣害対策に係る調査を受託。県が選定した調査地の一つ。
- H26～27年度: 松山市より調査を受託。
- H28年度～: 地元組織「中島イノシシ被害防止対策連絡協議会」との協働により、調査を継続。市や県担当者のサポートは継続。



3

「イノシシの密度管理に係る地域主体のOODA ループ」の開発



4

心がけていること

- 私は鳥獣害対策を行わない。行うのは地元。
- 必ず、早く、調査結果を現場に戻す

研究成果をあける
それが的確な地域診断になる

- 現場の方が気づかなかったことに、気づく。
- 現場の方がなんとなくわかっていることを、明確にわかるようにする。
- 現場に散らばっていた情報を組み合わせ、メタ知識を生み出す。
- そして、研究結果は実際の対策にどのように役に立つのかを示す。

そのことでしか現場役に立ちようがない

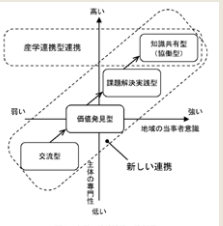


図1 大学・地域連携の図解
Fig. 1 Types of Community-University Partnership

中塚・小田切 (2016) が示す「④知識共有型」に相当。地元のコンサルタントとして、また地元と行政との橋渡し役として、一定の役割を担っていると実感。

テーマ 「中山間地域のスマート農業を考える」

伊那市新産業技術推進協議会スマート農業作業部会
信州大学農学部准教授 渡邊 修 氏



1. はじめに

スマート農業はロボット技術や情報通信技術 (ICT (Information and Communications Technology)) を活用して、省力化や精密化などを進めた次世代農業を指すものである。我が国の農業を巡る高齢化や新規就農者の不足等の厳しい状況の下で、農林水産業の競争力を強化し、農業を魅力ある産業とするとともに、担い手とその意欲と能力を存分に発揮できる環境を創出していくためには、農業技術において省力化・軽労化や精密化・情報化などの視点からその革新を図っていくことが重要となる。他分野ではロボット技術やICT等の活用が進展し、これらの技術革新が競争力の強化につながっており、農業分野でもその活用が様々な課題の解決や農業の成長産業化に向けた強力な推進力となることが期待される。スマート農業の明確な定義はないが、情報通信技術を高度に活用し、農業に関するデータの標準化と情報基盤整備を進めることと捉えることができる。

中山間地は、人口減少、高齢化、耕作放棄といった条件不利地の側面があるため、例えば大規模農地エリアで自動運転の大型機械を導入したときに得られる省力化やコスト削減の効果などは得にくい。しかし、中山間地のすべてが非効率で生産性が低いわけではなく、地域性を活かした特産物の生産、山間地特有の冷涼な気候での高品質農産物の生産など、中山間地の強みもある。中山間地でどのようなスマート農業技術が導入可能であるのか、国内での取り組みは始まったばかりであり、実証データの収集と評価はこれからである。

ここでは中山間地でのスマート農業の先進地の一つである長野県伊那市での取り組みを紹介しながら、農家や法人に技術を導入したときの問題点等を整理したい。伊那市では平成28年度にIoT、AI、ロボットなどの新産業技術を活用した産業イノベーションの構築に向け、先駆的ノウハウと技術集積を有する企業や研究機関等の参画を得ながら、産学官による「伊那市新産業技術推進協議会」を組織し、農業分野だけでなく、他分野の連携を意図したビジョンを作成した(図1)。さらに「スマート農業」、「ドローン物流」、「スマート林業」、「インテリジェント交通」、「ICT教育」の5つの部会を構成し、スマート農業作業部会では、伊那市内12農業者にICT機器等を導入し、伊那谷の新たな営農のあり方を議論するための実証試験を行ってきた。ここでは伊那市でのスマート農業実証事業の経過報告を兼ねながら、中山間地のスマート農業のあり方を考えてみたい。

2. 長野県伊那市におけるスマート農業技術の実証

伊那市新産業技術推進協議会スマート農業作業部会では、伊那谷の新たな営農のあり方を考えながら、スマート農業技術の普及につなげるため、平成28年度から順次、伊那市内12農業者(うち農業法人3)にスマート農業機器を導入した(表1、図2)。農業用のICT機器はすでに市販されているものを対象に、コストや各メーカーの性能等を比較し、農業者の聞き取りを進めて導入した。ここでは実際に各農業者が導入したICT技術の内容と導入効果について整理する。

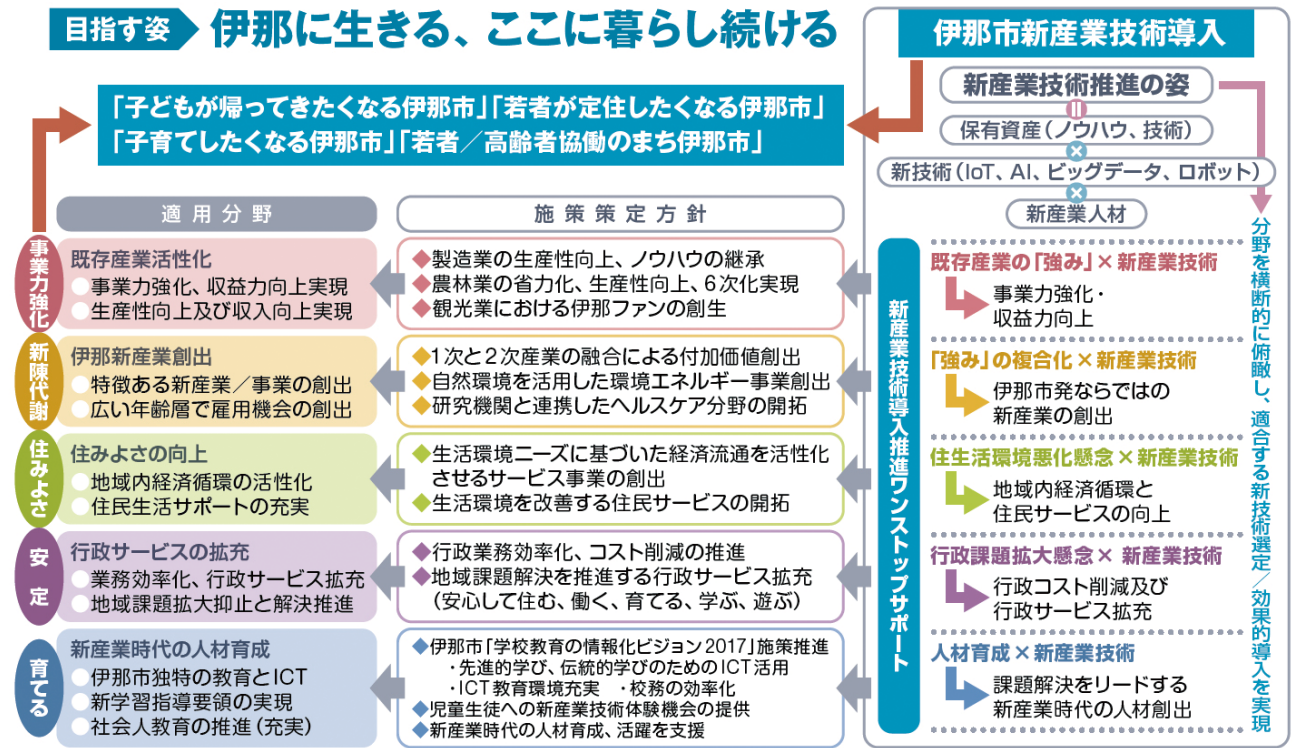


図1 伊那市新産業技術推進協議会のビジョンの全体像

表1 伊那市12農業者へのICT機器の導入状況

実証参加主体	規 模	導入機器					ICT機器導入目的
		自動 給水栓	農地 センサー	施設内環境 監視制御 システム	自走 草刈機	農地・営農 管理 システム	
1 農事組合法人T	水田:784筆	11基 (国33基)				K社製	水田の水見回りの省力化、 高度な水管理
2 農事組合法人Y	水田:120筆 畑:120筆		16基			N社製 K社製	水田の水見回りの省力化、 生育状況の記録
3 水田農家O	水田:166筆					N社製	
4 畑作農家K	畑:28筆		2基				土壌環境データの蓄積・ 生育状況の記録
5 花き・野菜農家Y	花き施設:2棟 野菜施設:1棟			1式			作業労力の軽減、施設内 環境データの蓄積
6 施設園芸農家O				1式			
7 果樹農家K	果樹:10筆				1基	N社製	作業労力の軽減、農作業 安全性確保
8 農事組合法人YN	水田:771筆					N社製	
9 水田農家Y	水田:219筆					Y社製	
10 水田農家U	水田:200筆					K社製	作業圃場の間違い削減、 各圃場の作付け記録、蓄 積、技術の継承
11 水田農家K	水田:138筆					Y社製	
12 水田農家M	畑:9筆					N社製	

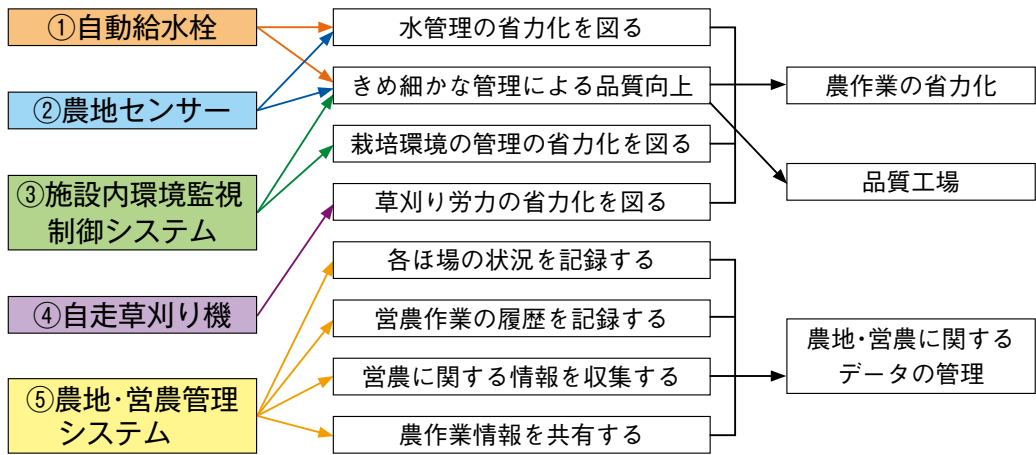


図2 農地や施設に導入したICT機器と営農目的

2-1. 自動給水栓

自動給水栓は、水田の水位をスマホでモニターし、取水口の自動開閉とスマホからの遠隔制御を行うことで、高度な水管理に対応できる。田植え後の水管理は、筆数が多いと人員と時間確保が大きな問題となるため、水管理の省力化技術は現場で強く求められている。水管理の省力化の課題は中山間地だけでなく全国の水田で共通となっている。自動給水栓の導入により、現場に出向く回数は確実に削減でき、移動にかかる燃料費等の削減にも大きく寄与するため、省力化のメリットを実感しやすい。自動給水栓を11基導入した伊那市内の農業法人Tでは、水管理と生育調査に費やしていた年間74時間が、年間36.3時間に削減され、省力効果は32,000円/年と算定された(図3)。

◆自動給水栓を活用した省力化(水管理時間、移動ルート)

課題・目的	【課題】 高齢化に伴い、労働力が減少している。 【目的】 自動給水栓を活用して、水管理のための見回り時間、給水栓操作時間を省力化する。
効果	◆見回り時間(水管理と生育調査)は、従来の年74.0時間から、年36.3時間となり、約50%削減された。省力効果は32,000円/年と算定される。 ●従来の移動時間:30分/回、水管理人が自動給水栓12台を操作する前提で試験的に見回った時の時間 ●従来の見回り回数:1日2回、栽培期間(5/25~8/31)で日降雨量10mm以下の日数74日、水管理時間:栽培期間中、営農管理システムに登録された水管理に要した時間を集計 ●生育調査時間、生育調査回数:担当者から聞き取り、1回あたりのアプリ操作回数、年間操作回数:担当者から聞き取り、労務単価:時給850円(一般農作業、JA上伊那宮田支所H30)
評価	長野県近傍の平均管理時間3.3時間/10a(※)に対して、導入前4.5時間/10aから、導入後2.2時間/10aとなり、同一規模の経営体の平均よりも短くなった。用水不足や土砂混入がない場合さらなる少量化が見込まれる。 ※長野県を含む1都8県における水稻作付規模5.0ha以上の畦畔草刈・水管理を含む作業時間:農業経営統計調査(H28)
普及に向けた課題	◆用水量が不足する地区では、各筆に自動給水栓を設置するだけでは給水できない場合がある。 ◆自動給水栓は、砂礫やゴミ混じりの用水ではゲート部分につまりが発生する場合がある。

図3 農業法人Tにおける自動給水栓の導入効果と省力化の算定

伊那市の実証地では自動給水栓を活用し、夕方に一定時間掛け流しを行い、夜間の間断灌水による品質向上を目指している(図2)。夜間灌水は人手の確保が困難で農家の負担も大きいため、これまでほとんど取り組まれていない。自動給水栓と水管理アプリを適切に活用することで、自動給水栓を活用した水稻の品質向上が期待されている。伊那市内での令和2年度の実証試験では、導入効果はあまり得られていないが、高温障害を回避する方法の一つとして注目されている(図4)。また、水田の高度な水管理は肥料や除草剤の効率的な使用にもつながる。水稻除草剤は水位が適切に保持されていれば、有効成分が水田全体に広がるため雑草防除に大きな効果が期待できる。土質等によって減水深が大きい水田では、田面が一部露出し除草剤の効果が発揮できないことがある。移植直後の自動給水栓による水位の確保は、除草剤等の投入量を必要最低限にできる技術として評価できるであろう。

◆自動給水栓を活用した品質向上

課題・目的	【課題】 作物の差別化(高品質米や低コスト米など)をおこなえていない。 【目的】 自動給水栓を活用し、夕方に一定時間かけ流しをおこない品質向上効果を確認する(夜間かんがい)。
経過	◆導入後、出穂期から20日間、①午後3時から2時間、②午後5時から2時間、自動給水栓によるかけ流しかんがいを実施した(①、②各ほ場)。 ◆水口の地温は慣行区(最低地温22℃)より1℃低下した。水尻の地温低下は見られなかった。
効果	●夜間かんがいを2ほ場で実施したが、収量・タンパク質含有量の調査および農業者の実感の両方で大きな差は確認できなかった。 ●令和2年度は品質向上効果は見られなかったが、地温の低下や作業労力が増えないことは確認できた。 従来管理のは場で栽培した作物の販売価格:農業者からの聞き取り。10俵×13,000円/俵。 自動給水栓で管理したことで得られた付加価値:農業者から聞き取り。今回、現況では差が出ていない。
評価	今回の実証中、水口の地温は慣行区(最低地温22℃)より1℃低下することが確認された。高温期も取水源の水温が低い場合、かけ流し時間を増加することで高温障害対策への応用が期待できる。
普及に向けた課題	◆夜間かんがいには、かけ流しで実施するため、地域の合意形成が必要な場合がある。また、給水する用水の水温がほ場より低いことが必要であるため、用水の温水を確認する必要がある。 ◆自動給水栓により、夜間かんがいや間断かんがい等のきめ細かな水管理が可能となる。しかしどのようにセンサー値を活用すれば品質向上や収量増加につながるかの数値目標等が定まっていない。

図4 自動給水栓を活用した品質向上の取り組み

自動給水栓導入の問題点は、筆数が多くなるとコストが跳ね上がる点である。筆面積が小さく、筆数が多い中山間地では、自動給水栓を複数導入するのはコストの面で難しい。今回実証を行った農業法人では、伊那市の取り組みに加え、農水省のスマート農業加速化実証プロジェクトに参画することで、多くの台数を導入しているが、中山間地の導入事例としては特殊なケースと言える。一方、大規模圃場が広がり水確保の容易なエリアでは、少数の機器導入で大きな効果が得られる。大規模農地エリアと小規模圃場が分散する中山間地で同じ機器を導入するのは、費用対効果の面でさらなる検討が必要である。

2-2. 農地センサー

農地センサーは、水田の水位センサー、カメラによる露地の確認、気温や土壌水分等のモニタリングなどの機能がある。2-1で紹介した自動給水栓はコストの面から導入が困難であるが、生産現場では水位をモニターできればよい、という意見も多くあった。水管理のためにすべての圃場を回るのはではなく、水位が下がった圃場を優先的に回るといった使い方、水管理の省力化につなげることができる。農地センサー(水位のモニター)を導入することで、経営規模拡大につながる、という意見も見られた。農地センサーの通信で注目されている技術は、LPWA (Low Power Wide Area)という免許不要の小電力長距離通信に対応したセンサー端末である。LPWAにはLoRaWANやSigfoxなどの規格があり、920MHz帯を使って数バイトの小さな情報を受信局へ送り、ユーザがメール等で現場の情報を取得する技術である(表2)。LPWAは電力消費が小さく、乾電池のみで1年近く屋外での通信が可能となる端末もあり、多数の端末を設置しても通信費を低く抑えることができる。水位や気温センサーを搭載したLPWA端末が開発・普及することで、中山間地で多数の端末を設置し、農地モニタリングが可能になると期待される。露地や育苗用ハウスでの気温のモニタリングを簡易に行いたい、という要望は多くあるため、今後は、通信費やメンテナンス費用を含め低コストの機器導入が重要となるであろう。

表2 農地センサーで使われている通信規格の比較

項目	通信方式				
	3G、4G	無線LAN	LPWA (高出力250mW)	LPWA (標準20mW)	LPWA (Sigfox等)
通信エリア	携帯圏内	数100m	数10km	数km	携帯圏内
受信局	携帯基地局	独自設置	独自設置	独自設置	携帯基地
免許(電波法)	不要	不要	要	不要	不要
外部電源	必要	必要	一部必要	不要	不要
電池寿命	—	—	数ヶ月	1年前後	1年前後
通信コスト	高	低	低	低	低

2-3. 農地営農管理システム

農地・営農管理システムは、1. 営農作業の履歴の記録、2. 営農に関する情報の収集、3. 農作業情報を共有、といった目的で導入されている(図2)。農地・営農管理システムは、農機具メーカーを中心に開発・販売されており、筆数の多い農業法人での導入が進みつつある。基本システムとしては、圃場区画を地図上で作成・表示し、圃場面積の計算、作業履歴、作付け品目、肥料・農薬等の使用量、作物生産量などの情報を一元的に管理する。営農管理に関する情報の電

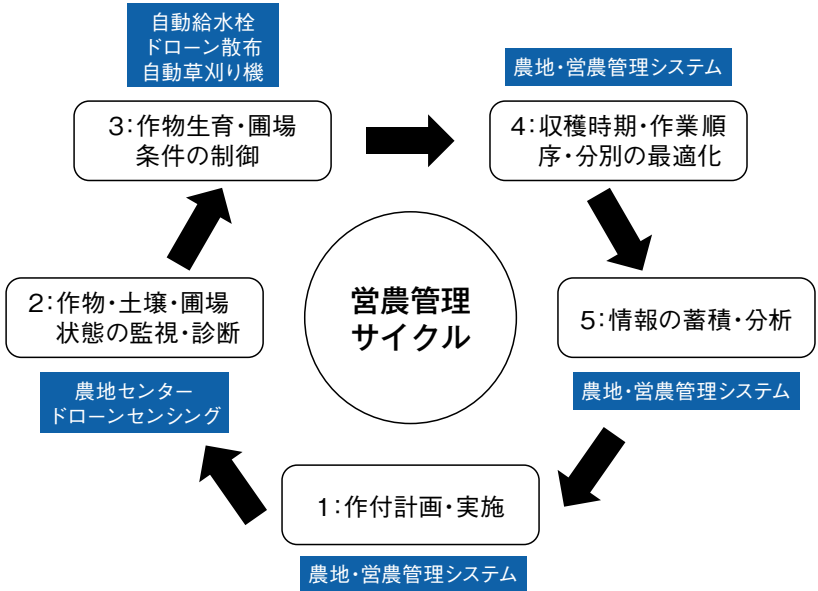


図5 営農管理サイクルにおけるスマート農業技術の適用
(高解像度光学衛星センサーによる植物・土壌情報計測とスマート農業への応用、井上吉雄、2017を一部改変)

子化、データベース化を行うことで、営農管理サイクルに組み込まれる(図5)。農業は基本的に土地利用型の産業であるため、地図情報と連携した情報管理が重視され、地図と連携した情報管理によって、栽培情報の見える化、作業実施の進捗、作業間違いの軽減、高品質生産が可能な圃場の特定などを行うことができる(図6)。



図6 農地・営農管理システムの表示例 A: 圃場区画情報、B: 食味・収量のデータ

伊那市内で農地・営農管理システムを導入するときに挙げられた課題を以下に示した。
● 利用権設定時の面積と耕作面積が一致しない圃場が多数あり、肥料や農薬の資材の計算が実態と合わないケースがある。

- 作業状況、過程、予定を作業者間で共有できていない。
- 毎年、作付計画を作成する作業に時間がかかる。
- 年に数カ所は場間違いが発生している。
- 後継者には場の作業記録を残しておきたい。
- 出荷申請時にJAに提出する資料の作成に時間がかかる。など。

伊那市内で農地営農管理システムを導入した当初は、スマホやタブレットでの入力が面倒で入力に時間がかかり、導入効果を実感しにくい意見が多く出された。特に高齢者にとってスマホでの作業は苦痛を伴うという意見もあった。各メーカーが開発した農地・営農管理システムは、他のシステムとの連携を考慮していないことが多く、一度システムを導入すると新しいものへ乗り換える自由度が小さい点も懸念された。今後は、地理座標を付与した圃場区画のポリゴン情報、CSV形式でのデータを整備し、これを汎用型のGIS(地理情報システム)等で管理し、データを簡易に共有できるシステムの構築も視野に入れる必要がある。

農地営農管理システムで評価が高い点は、農地・営農記録を電子化により、JAなどに提出する裁判管理日誌を電子申請でき、作成時間が短縮できたこと、記録を後継者に引き継ぐことが容易になること、作付計画立案作業の省力化が進むこと、肥料や水が抜けやすい圃場を特定しやすいこと、圃場作業の間違いが大幅に減少したことなどが挙げられた。

2-4. スマート農業におけるドローンの活用

近年普及しているドローンは、高性能カメラ、GPS制御システム、機体制御アプリ、低価格化などで、農業分野で利用が拡大している。農地観測におけるドローンの有用性として、観測時期をユーザーが決定できる自由があり、生育診断に対応した多時期観測が可能になる。また、解像度の高い画像で地物の判別が容易なこと、GPS制御による自律飛行で撮影で鳥瞰的な視野で圃場観測できること、三次元復元で測量が可能なこと、分光反射(マルチスペクトルカメラ)により、植生指数などの解析が可能なことなどが挙げられる(図7)。

観測頻度
時間分解能

- ユーザに自由度が高い
- 多時期観測
- 導入コスト低い

空間分解能

- 超高解像度画像(1~2cm/pix)
- オルソモザイク画像

三次元復元

- 鳥瞰的視野
- 自律飛行

三次元復元

- SfM(Structure from Motion)
- 三次元測量 バイオマス量推定

特殊カメラ

- マルチスペクトルカメラ
- サーモカメラ

図7 圃場観測におけるドローンの有用性

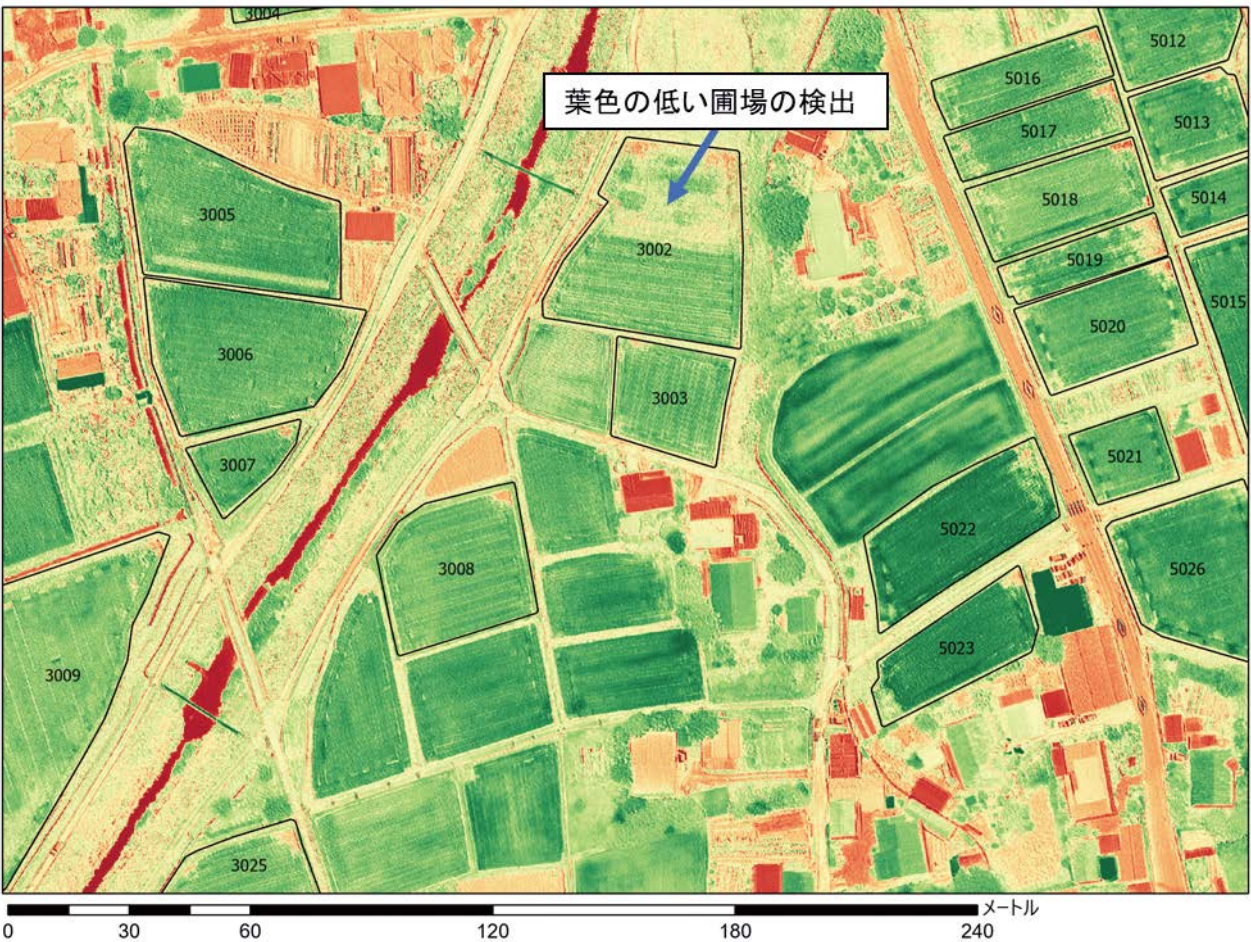


図8 ドローンに搭載したマルチスペクトルカメラで算出した植生指数マップ。葉色の低い圃場を検出



図9 農薬散布ドローンによる粒剤の散布作

伊那市内で農業法人の実証圃場で2020年7月末に高度130mから、マルチスペクトルカメラを搭載したドローンによる空撮を行った(図8)。圃場番号3002は、2圃場を合筆した後に作付けを行っているが、圃場の北側半分の葉色が低いことが認識できる。生育途中で生育状態を診断することで、追肥による収量確保に貢献できると思われる。観測をおこなった農業法人は田植え同時施肥で栽培しており、生育途中での追肥作業を想定していないため、このデータが法人の営農活動に直接使える部分は少ないが、営農管理サイクルの中で、情報分析・蓄積を続けることで、次年度以降の作付け計画に反映できると思われる。

スマート農業技術として現場の評価が高いものは、ドローンによる農薬散布である。田面から高度約2mで散布用ドローンを飛行させ、ここでは30a圃場に3kg剤を散布する時間は約3分であることが示された。これまで動力散布器を背負い田内を歩いて散布していた作業が、ドローン散布機器の導入で作業者の負担を大きく減らすことができ、作業時間の短縮に大きく貢献できる。粒剤は液剤と比較してドリフト(農地外への飛散)が小さいことから、薬剤投入を必要最小限にできる点も大きい。農薬散布ドローンは、比較的面積が小さい圃場でも省力効果が実感しやすいため、実演会に参加した近隣の農家からはすぐに導入したい、という意見が多く出ており、急速に普及が進むであろう。小さい圃場で適用しやすい技術は中山間地へのスマート農業技術の導入で極めて大事な点であると思われる。

3. まとめ

長野県伊那市では、ほぼ全ての集落で農事組合法人が設立され、これまで地域の農業を支えてきたが、農家人口の減少、高齢化等で、現状では農業そのものが衰退するリスクがある。農林業を中心とした一次産業が発達する伊那市の問題は、中山間地での農業問題を扱う上でよいモデルとなるため、どのようなスマート農業技術の導入が有用か、伊那市新産業技術推進協議会の中で検討を進めてきた。集落営農や農業法人による規模拡大が進む中で、多数の水田の水管理問題がまず大きいと感じた。管理する筆数が少なければ問題は顕在化しないが、少人数で多数の圃場水管理を行う場面は今後も増加するため、水位制御や水位のモニタリングを効率的に行うシステムの導入は不可欠である。自動給水栓は導入コストが大きな問題となるため、減価償却を考慮した導入モデルを地域の実情や経営規模などで精査する必要がある。いくつかの農家と法人に農地センサーを導入した結果、水位のみのモニタリングでも省力化に大きく貢献できる意見が出された。農地センサーは通信とクラウドによって農家がリモートで現地情報を取得する仕組みであるが、通信費を低く抑えることができるシステムを導入することで、問題解決に大きく踏み出すことができると感じた。多数のセンサーを農地に設置するには、やはりコストの問題が大きい、小電力長距離通信に対応したLPWAは、通信コストを下げることで可能になるため、農地センサーの活用場面が広がると思われる。異常高温や豪雨が頻発する近年において、農地センサーによる露地の気温、湿度、地温等のデータ収集の重要性が指摘されており、農家や農業法人が独自に気象データを集め、これを栽培管理に活かすことで、安定した栽培や農産物の高品質化に向けて大きな強みになる。農地・営農管理システムは、各農家や法人で導入がようやく始まったばかりで、あるため、導入効果を実感しにくい、営農データ、作業データを次の世代に残す点で、大きく評価されると思われる。ドローンによるセンシングは、まだ適用場面を絞りきれていないが、短時間で多数の圃場の生育情報を取得できる点で、今後普及が進むかもしれない。小さい農地でも導入効果の大きい、農薬散布ドローンは、導入した農家や周辺の農家の評価が非常に高い点で、今後、国内で急速に普及が見込まれる。

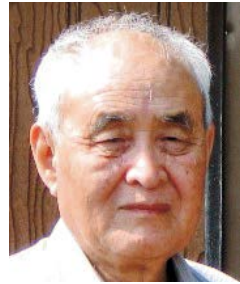
〈渡辺 修氏 プロフィール〉
• 2002～2005年 農研機構 近畿中国四国農業研究センター研究員
• 2005年 信州大学農学部助教授
• 2007年 信州大学農学部准教授

参 考
□ 伊那市新産業技術推進協議会
(<https://www.inacity.jp/shisei/inashiseisakusesaku/shinsangyougijutu/20180510162249202.html>)

第4分科会報告

テーマ 「棚田地域振興法成立の背景とその活用」

NPO法人棚田ネットワーク代表 中島 峰広 氏



1 初出文献の棚田は谷地田だった

棚田という言葉の初出文献は室町前期、1406(応永6)年の日付がある高野山文書「高野山學道衆堅義料田寄進状」1)とされている。それによれば「作ハ三郎也、一反ハ上ミニ池アリ、池ノ水ヲ引ク也、根本ハ糯田ト名ク、今ハ山田ニテ棚二似タル故二、タナ田ト云…」とある。その場所はその後の研究で特定されており2)、和歌山県紀の川市紀の川中流左岸、現在はモモ畑になっている山際の谷地田の棚田であった。

しかし、糯田とことわっているのは、モチはウルチよりも冷水に強いが、収量が劣るため、ウルチが栽培される普通水田より一段低い水田とみなしていたのではないかと考えられる。

2 棚田は出現以来、近年にいたるまで蔑視されてきた

棚田は出現時だけでなく、その後も蔑視されてきた。江戸中期久留米藩士だった大石久敬が百姓一揆に連座して脱藩、諸国を遍歴して得た知見を活かし1744(寛政6)年高崎藩士になって完成させた田制・税制の農政に関する手引書が「地方凡例録」である。それによれば「山田・谷田と名を付は、山の洞谷間等にある田にて、至て土地あしく、猪鹿の荒らしも強く、下下田の位にも成りがたき分を山田・谷田と名付く…総て山間の田は…檀あるゆへ、棚田とも膳田とも唱ふ…」とある。3)つまり下下田以下で、位がないというのだから課税の対象にもならなかったのではないだろうか。

さらに蔑視は近年に至るまでおよび、1970(昭和40)年、農水省はそれまで高揚程の揚水機を設置してまで台地の開田を進めていたにもかかわらず、米余りで生産調整が始まると、すぐに迫りくる木材自由化の見通しもなく、棚田を廃止しスギ林への転換を奨励したのである。結果は惨めなもので、ことに中国地方の山間部には立派な石垣の上に手入れもされないスギ林が荒れ放題に放置され無残な姿をさらしている。この光景を広島の民俗学者として知られる神田三亀男は「人間の営みあわれ石崖の棚田ことごとく杉の茂れり」「棚田杉植えて空しよ手入れせぬ杉の雪折れ谷に朽ちおり」と嘆き、痛烈な農政批判を行っている。

3 棚田を称賛する人もいた

このように棚田は長い間蔑視されてきたが、一方で称賛する人もいた。昭和期における農政学の権威東畑精一が昭和初期アメリカでひらかれた経済学会に出席した折、最終日のデイナーミーティングで同席したある地理学者に「貴方の国にはエジプトのピラミッドに比すべき偉大なものがあるのをご存知か」と問われた。奈良の大仏のことかなどと考え、逡巡していると「貴方のように農民生活を研究している人でも気が付きませんか」と畳みかけられ兜をぬいだ。「それは日本を旅行すると列車のなかから随所に見られる棚田ですよ」「あれは農民の労働、勤勉の結晶、その労力はエジプトのピラミッドを作った労力にも匹敵するものですよ」「私は貴方の国でいろいろなものを見せてもらったが、棚田を超えるものはなかった」と絶賛された。4)

しかし、このエピソードの紹介が1940(昭和15)年であったため、すぐに始まる第二次世界大戦、そして戦後の食料大增産時代を迎え、不幸にも注目されることはなかった。因みに「ある地理学者」とは昭和初期に日本を訪れ、アメリカを代表する学会誌Annalsに「静岡県の地理学的研究」5)

という論文を発表しているウイスコンシン大学のトレワース教授だったと考えられる。

それからおよそ半世紀後、今度は歴史小説の大御所司馬遼太郎によって棚田に賛辞が与えられるのである。司馬は「街道をゆく」シリーズの一つ、幕末の志士坂本竜馬が土佐から陸路長州へ脱藩した道として知られる「禰原街道」を執筆している。

その取材をも兼ね1985年8月兵役時代の同期会に出席するため高知を訪ねている。その折に高知県庁に勤め農業畑一筋、県内の農業に通曉し数年前に退職した同期兵の県職と宿を同じくした。酒を酌み交わし、宴たけなわの時「禰原町史」の口絵写真で見た禰原町神在居の千枚田を思い出し「禰原の千枚田はえらいものやな」とほめ「万里ノ長城も人類の遺産だけど、禰原の随所にあるという千枚田も大遺産やな」と絶賛したのである。6)

さすがに、言い過ぎたと思ったのか、稿をまとめる時には「信州の田毎の月や能登半島の北端(輪島市白米の千枚田のことか)などは築城的な大構造であるが、全国のそういう構造の棚田を総和すると万里ノ長城に匹敵するほどの土木作業量であるかもしれない。私はただ禰原に代表させただけで、しかも禰原は代表の名誉に耐えうるものだと思ったのである」と補足している。

4 禰原町での第1回全国棚田(千枚田)サミット開催

宴席には県職員の配慮で禰原町長中越準一も同席していた。中越町長は司馬遼太郎の絶賛を聞き、棚田を活用した町起こしができるのではないかと考え早速事業に着手。1992年小規模農地の都市住民への貸付を可能にした「特定農地貸付に関する農地法の特例に関する法律」の施行を機に棚田オーナー制を立ち上げた。7)これは都市住民が小面積の棚田(1㌥程度)を有料(3万円前後)で借り受け、地元農民の指導により田植、稲刈などのイナ作を体験、収穫物(白米30㌔)を持ち帰ることができるという仕組み。筆者はオーナー制について地域に与えるインパクトとして来訪回数が最も大きな要素と考え、回数3回までを体験・交流型と飯米確保・交流型、4～9回までを作業参加交流型、10回以上を就農交流型の4類型に分類している。民間で行われている棚田保全の最も重要な取り組みであり、私が把握しているものだけでも全国100か所近い地域で実施されてきた。8)

さらに1995年にはカントリーミュージカル・ふるさとキャラバンの主宰者石塚克彦の協力をえて禰原町で全国棚田(千枚田)サミットの開催を実現。9)高知県でも最奥部の禰原町に、棚田連絡協議会に属する20市町村を含む80市町村の代表者、一般市民や学識経験者などの個人会員、報道関係者など延べ1,200名の人々が参加、棚田保全の狼煙をあげた。10)これを機にして全国のマスコミ関係者が盛んに棚田を取り上げるようになり、棚田は一躍注目される存在になったのである。

5 第1回棚田サミット後の展開

サミット後の棚田に対する関心の高まりのなかで、1995年12月都市住民による棚田の応援団である棚田ネットワーク(代表筆者)の設立、1999年7月の棚田百選の選定(134か所の百選地を訪ねた選定委員は筆者のみ)、同年8月には棚田保全を標榜する棚田学会(三代目会長筆者)が設立されるのである11)。

政府もまた「棚田地域等緊急保全対策事業」や「棚田地域水と土保全基金事業」などを展開するのであるが、最も効果的だったのが2000年度から実施された「中山間地域等直接支払制度」であった。これは、傾斜20分の1以上の水田、すなわち棚田を5年間継続して耕作すれば10㌥当たり毎年21,000円の現金を支給するという制度。それまでの国の施策は主として用水路や道路、ビニールハウスなどの施設、あるいは農機具の購入などモノに対する補助が中心であったものが、施策の名称通り農民の懐に現金を入れるという画期的な施策だったのである。12)

6 棚田の現状

このような棚田保全を支援する団体の設立や政府による施策の展開にもかかわらず、担い手の高齢化による離農や後継者の欠如などにより、棚田の耕作放棄は止まらなかったのである。それでは現在どれだけの棚田があるのか。農水省にも資料がないので推測するしかない。推測するのに最も適切な資料が前述した5年間の時限立法「中山間地域等直接支払制度」の対象面積である。助成金を得るためには5年間の耕作の継続が義務づけられているので、その対象面積(傾斜20分の1以上の斜面にある急斜地水田)は現存する棚田面積と考えてよいだろう。

そこで表により各年次の対象面積を示すと、事業の理解度が低かった初年度を除くと14～15万㌦で推移していることがわかる。これらの数字と私が分布図を作成した1988年次の資料における棚田面積22.3万 haを比較すると約33%、つまり3分の1ほどが減少していることになる。他方、見逃してならないのは20年間の棚田面積が15～16万㌦で推移している事実であり、直接支払によって棚田の耕作放棄に歯止めかかったともいえるのである。

表 中山間地域等直接支払制度の急斜地水田の対象面

期	年度	対象面積 (㌦)	期	年度	対象面積 (㌦)
1	2000	129,237	3	2010	153,555
〃	2001	152,474	〃	2011	155,777
〃	2002	158,280	〃	2012	156,927
〃	2003	159,280	〃	2013	157,641
〃	2004	160,729	〃	2014	157,942
2	2005	155,132	4	2015	147,116
〃	2006	158,938	〃	2016	148,724
〃	2007	157,922	〃	2017	149,388
〃	2008	158,120	〃	2018	149,757
〃	2009	158,167	〃	2019	150,555

資料 農水省農村振興局 年次別直接支払交付金の実施状況

7 棚田地域の振興を支えた3団体の活動

棚田が置かれている状況は依然として厳しいが、棚田関連3団体、すなわち全国棚田連絡協議会・棚田ネットワーク・棚田学会の棚田保全を標榜する着実な活動が棚田地域の振興を支えてきた。

まず全国棚田連絡協議会は、既述したように1995年壽原町で開かれた第1回サミット以来、2006年宮崎県日南市で開催された第12回大会までは各市町村の自主的な申し出により次回開催地を決定していた。しかし、これ以降は平成の市町村合併や財政上の問題などにより、開催を申し出る団体がなくなり、サミットは終了の危機を迎えた。しかし、協議会は終えるのは忍びないとして、サミット開催を促す「棚田サミット開催地検討委員会」を立ち上げ、その活動により継続を図ったのである。13)

実際には選挙で選ばれる市町村の首長が勧誘をするわけにもいかず、個人会員の理事であった筆者が委員長に就任、手弁当で全国を駆け巡り、数回の首長訪問のほか集落の総会にまで出席してサミット開催を懇願、2020年開催予定であった山形県大蔵村のほか2021年滋賀県高島市、2022年和歌山県那智勝浦町までの28回大会まで決定していたのである。しかし、周知のごとくコロナの蔓延により26回大会が中止となり、大蔵村以下は1年遅れで開催されることになった

のである。

その内容は、棚田ネットワークの会員が企画の段階から全面的に協力した第8回鴨川市開催のサミットあたりから形式が整い、それまでの高額講演料を払うわりには実りのない有名人の講演をやめ、講演料の心配のない知事などが行う基調講演、保全の取り組みを議論する分科会、自慢の棚田を紹介する事例報告と現地見学会、最後に全員が集い、飲食をともにしながら各自が実施している保全活動を紹介しあう全体交流会などで構成され、棚田保全の気運を盛り上げるものである。

次に筆者が代表を務める棚田ネットワークは、事務局長を務めた高野光世の呼びかけに応じた関東周辺に在住する棚田連絡協議会の個人会員の集いとして始まり、筆者が代表になった。当初棚田支援市民ネットワークと称し、その字義通り、棚田保全を支援する都市住民の組織として出発した。すぐに機関紙「棚田に吹く風」14)を発行したが、東京から棚田のある現地へ出かけての支援は思い通りにはならず、自前の事務所もなく、大学の研究室や喫茶店などを転々として会合を重ねる状態であった。15)

それでも日本船舶振興会からの助成金を得て、新潟県の情報発信拠点、表参道新潟館・ネスパスを会場にして3年間にわたり棚田講座を開設した。講師として棚田学会初代会長の東大名誉教授石井進、水田の生きもの研究の権威農水省農業環境技術研究所の守山弘、棚田学会四代目会長の東京農工大学教授千賀裕太郎、農と自然の研究所代表理事の宇根豊など第一級の研究者を講師として招き、これらの人たちを通じて人脈を築くとともに、棚田ネットワークの認知度を高め、全国的規模で会員の拡大を図ることができた。16)

転機は、まず2002年にNPO法人となり名称を棚田支援市民ネットワークから棚田ネットワークに改称、さらに2004年に東京都西新宿のビルに事務所を開設したことにより訪れた。この頃より棚田ネットワークは棚田のある現地と企業や個人をつなぐ中間支援団体としての役割を意識するようになっていた。

記憶に残る取り組みとしては、東京ボランティアセンターの紹介により昨今コロナワクチンで話題になっている世界的な製薬会社アストラゼネカ社のCSR活動をサポートしたことである。会社の計画では、2006年からの5年間10～11月の1営業日をCday(CSR活動の日)として社長以下全国に展開する3,000人の従業員をボランティア活動に従事させるというもの。この提案を受けて、棚田ネットワークでは過疎・高齢化する山村地域を支援するという名目で、最終年の2010年には棚田地域を中心とする北は北海道富良野市から南は沖縄県国頭村に至る60か所を、これまで代表が棚田地域を歩いて築いてきた人脈を活用して紹介、11月に実施されたCdayを成功させたのである。17)

もう一つの取り組みが日本経済新聞社により毎年12月に晴海のビッグサイトを会場にして開催されるエコプロへの参加である。これは、環境にかかわるあらゆる企業や大学、研究機関、NGO・NPO法人、自治体などの団体が製品の紹介やそれぞれの主張を開示する場であり、3日間の日程で実施されている。

ネットでは2003年からNGO・NPO法人コーナーに単独出店、棚田のPR活動を開始した。2012年からは全国で活動する保存会(6団体程度)を誘い共同出店するようになり、さらに2014年から棚田連絡協議会からの予算を得て10～15団体の共同出店を実現、広い会場の一角に各保存会の幟を立て棚田村を出現させた。そのPR効果は絶大で安倍首相夫人が激励に訪れるというハプニングを生むほどであった。

最後の棚田学会は、棚田を研究するアカデミックな団体であるので、社会に対して棚田保全の活動を積極的に行っているわけではないが、研究の対象である棚田の保全を標榜する特異な研究団体でもある。その趣旨の一環として学会は毎年顕著な棚田保全の活動を実現している各

地の棚田保存会に棚田学会賞を授与している。これまでに壽原町千枚田ふるさと会、輪島市白米千枚田愛耕会、熊野市丸山千枚田保存会、鴨川市大山千枚田保存会、明日香村稲渕棚田ルネッサンス実行委員会、唐津市蕨野棚田保存会、伊根と新井の千枚田を愛する会など27団体がその対象になっている。

このように、3団体はそれぞれ独自の活動により、棚田を不要とする風潮に抗いながらその保全を唱え、諸問題を克服、施策の実現に向けて汗を流してきたのである。

8 全国棚田連絡協議会によるロビー活動と棚田地域振興法の成立

前述したように棚田関連3団体による地道な保全活動が棚田地域振興法の成立を促したが、直接的には全国棚田連絡協議会の理事によるロビー活動が大ききな力になった。そのきっかけは筆者が1999年2月に古今書院から出版した「日本の棚田」の出版記念祝賀会が2003年4月に帝国ホテル・牡丹の間で開催されたことにある。

祝賀会にはそれまで全く面識のなかった2人の国会議員が出席していた。その一人が和歌山県選出の参議院議員西博義さんだ。西さんは当時地元海南市海老谷で実施されていた棚田オーナー制に参加、棚田の現状を十分に認識していたので、席上私に棚田振興議員連盟の結成を約束したのである。

西さんは、約束通り行動を開始、2004年2月に自民・公明・民主・共産の議員40名で構成される棚田振興議員連盟を立ち上げた。会長佐賀県選出の衆議院議員保利耕輔、事務局長西博義、顧問に綿貫民輔・羽田孜・森山真弓・武部勤など錚々たる顔ぶれであった。筆者は2004年6月衆議院第一議員会館第2会議室で開かれた議員連盟の勉強会で「棚田保全の潮流」というタイトルで講演、2005年からは東京で棚田連絡協議会の理事会が開かれる2月に理事の資格で議員会館を訪ね、会長と事務局長に表敬訪問を行ってきた。

これが棚田連絡協議会の会長・副会長による正式訪問となり、本格的なロビー活動として機能するようになったのが2008年からである。さらに、2012年からは表敬訪問の前に農水省地域振興課の課長以下の職員と意見交換を行うのが慣例化し、地元の要求を中央に伝えるパイプも構築された。

この交換会で印象に残っているのは2012年の初めての意見交換会の席で当時の上勝町長笠松さんが現行の中山間地域直接支払を10倍にすれば棚田地域の担い手問題は解決するという発言だ。現実的でないということで問題にされなかったが、私は今でも正鵠を射た意見だったと思っている。

その後、棚田振興議員連盟は保利会長と西事務局長が2014年に政界を引退、一時活動を停止したが、筆者が2015年佐賀県玄海町で開催されたサミットに出席していた地元選出の古川康衆議院議員に再建の協力を依頼、それを真摯に受け止めた同議員の尽力により再建が図られた。その結果、2017年に会長和歌山県選出の参議院議員鶴保庸介、会長代行宮崎県選出の衆議院議員江藤拓、事務局長古川康のメンバーで新棚田振興議員連盟が結成されたのである。

こうした動向を踏まえ2018年2月に自民党は「棚田支援に関するプロジェクトチーム」を立ち上げた。棚田振興議員連盟の設立時からのメンバーであり、会長代行でもある江藤拓が座長、長野県選出の衆議院議員宮下一郎を座長代理とし、棚田保全の施策をまとめ当初自民党単独での成案を目指した。しかし、会期末が迫るなか廃案を恐れ、衆参両院の全会一致で2019年6月に棚田地域振興法は成立、同年8月に施行された。

後述するように政策自体は地味なものであるが、その第1条で「貴重な国民的財産である棚田を保全し、棚田地域の有する多面にわたる機能の維持増進を図り、もって棚田地域の持続的発展および国民生活の安定向上に寄与することを目的とする」とし、棚田の価値が高らかに宣言

されたのである。18)かつて国は棚田を生産性の低い水田として切り捨て、スギ林への転換を促した方針からすれば180度の政策転換であったといえる。同時にわれわれは法案の成立が棚田関連3団体の20数年に及ぶ地道な努力の成果であることを自覚し、誇りに思わなければならない。

9 棚田地域振興法の活用

最初に述べなければならないことは、棚田地域振興法が文化庁の文化的景観同様、ボトムアップの施策ということだ。立案に向けて作業を行っていた農水省地域振興課の担当課長が私に繰り返し強調して述べたことは、中山間直接支払のように具体的な施策が上から降りてくるのではなく、地元農民が自分たちに必要なものを上に向けて要求し、具体化する施策ということであった。

実際の作業としては、まずボトムアップ方式により地元民が声を発し、行政がその声を聴いて棚田地域振興地域の指定を行うのである。この時の地域の単位は中山間地域等直接支払の制度と同じで昭和の市町村大合併前の行政単位、すなわち旧旧市町村単位で特定農山村、過疎、豪雪地域などの指定を受けていればよい。そして、中山間地域等直接支払と同様面積1㌖以上、傾斜20分1以上の水田であることが条件だ。

次に、地域指定が完了したら、地域内の農業者、農業者の組織する団体(最も一般的に考えられるもので〇〇保存会とよばれるような組織)、農業者以外の地域住民などにより自らが声を発することにより指定棚田地域振興協議会の設立が認められるのである。

これで要件は整い、農林水産省が独自に実施する施策は中山間地域直接支払の1万円加算のみである。他はここでもボトムアップ方式が貫徹され、地元の振興協議会が、すでに総務省・文部科学省・文化庁・農林水産省・国土交通省・観光庁・環境省などで用意している事業のなかから必要と思われる施策を選び導入するというものだ。

たとえば、保全活動に人材を必要とするならば総務省所管の「地域おこし協力隊」を活用すればよい。あるいは棚田で小中学生の農業体験をさせようとする場合は文部科学省の「健全育成のための体験活動推進事業」を導入すればよい。しかし、実際に各省庁の事業に通暁しているひとは少ないであろうから、導入の方法や各省庁で用意する事業のなかからどれを選ぶかわからなければ、省庁や都道府県に配置されている農村地域では馴染みのない言葉、コンシェルジュに相談すればよいことになっているのである。

〈注〉

1)東京帝国大学編纂(1904):「大日本古文書之三」富山房 746p
棚田の初出文献については、高木徳郎がここで示す文献より70年ほど古い建武5(1338)年の文献を紹介している。しかしこれは棚田の文字と面積の記載があるのみで場所も特定されていないので、ここでは「寄進状」の文献を用いることにする。
高木徳郎(2006)棚田の所見資料について 日本の原風景棚田 NO 7 111～115
2)中島峰広(1999):「日本の棚田―保全への取組み」古今書院 237p
海老沢衷・樋口泰範・安藤利通(2001)すばらしきもの・棚田 日本の源風景・棚田 NO2 2～13
3)大石慎三郎校訂(1969):「地方凡例録 上巻」近藤出版社 345p
4)東畑精一(1940):「米」中央公論社 339p
5)Glenn T Trewartha(1928) A Geographic Study in Shizuoka Prefecture, Japan Annals of the Association of American Geographers 18-3 127～259
6)司馬遼太郎(1985.86)椿原街道 週刊朝日 12月20日 2月7日号
7)中島峰広(2018)無位の棚田に価値を与えた人たち 棚田学会誌 No19 95～101

8) 中島峰広(2007) 棚田オーナー制度の発展・類型と評価 農村と都市をむすぶ編集部(全農林労働組合)26～35p 各地で行われているオーナー制の面積・会費・収穫量などの数字は標準的なもので壽原町の会費は四万十川の源流に因み40,010円とされた

9) 前掲9)

10) 第1回全国棚田(千枚田)サミットは1995年9月28～29日に開催された

11) 中島峰広(2015):「棚田保全の歩みー文化的景観と棚田オーナー制度」古今書院 255p

12) 全国農業会議所発行のパンフ「中山間地域等直接支払制度のあらまし」1999年11月

13) 前掲9)

14) NPO法人棚田ネットワーク会報誌 2021年夏号が第120号

15) 前掲9)

16) 棚田ネットワーク:「棚田の学校講義録集」 第二期(2001)241p 第三期(2002)252p

17) AstraZeneca(2007):「高齢化する村を応援するプロジェクト」58p

18) 農林水産省(2019) 棚田地域振興法案要綱

〈中島 峰広氏 プロフィール〉

- ・早稲田大学名誉教授 学術博士
- ・NPO法人棚田ネットワーク代表
- ・全国棚田連絡協議会理事 全国棚田サミット開催地選定委員会委員
- ・日本の棚田百選選定委員
- ・長野県千曲市名勝娯捨(田毎の月)整備委員会委員
- ・著書『日本の棚田ー保全への取組み』『百選の棚田を歩く』『続・百選の棚田を歩く』
『棚田 その守り人』『棚田保全の歩み』 出版はすべて古今書院
監修『全国棚田ガイド』 家の光

交流会・見学会



交流会及び宿泊地の「肘折温泉郷」の全景



交流会場の「肘折いでゆ館」
(写真は肘折七夕ランタンフェスタ開催時)



肘折温泉街



名物の朝市(5～11月の毎朝)



肘折の灯
(夏期間、各旅館の軒先に灯籠が灯る)



国の登録有形文化財に指定されている
肘折ダムと初恋足湯

現地見学会 コース1

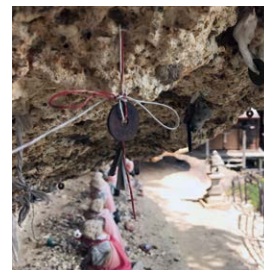
ー日本の棚田百選「四ヶ村の棚田」とパワースポット地蔵倉ー

(肘折温泉) → (地蔵倉) → (湯の台高原そば畑) → (四ヶ村の棚田)
(豊牧の棚田→滝の沢の棚田→沼の台の棚田→平林の棚田) → (閉会式会場)



地蔵倉

肘折温泉開湯伝説の地。付近は、表面に穴の空いた岩に覆われており、糸を通し結べる穴を見つけると良縁成就。縁結び、子宝のパワースポットとして、カップルに人気。月山、肘折カルデラが一望できます。



湯の台高原そば畑

60ha(東京ドーム13個分)を超える広大なそば畑がひろがります。花の見ごろは、8月下旬から9月上旬。



四ヶ村の棚田 (豊牧の棚田)



四ヶ村の棚田 (滝の沢の棚田)

現地見学会 コース2

ー日本の棚田百選「四ヶ村の棚田」と小水力発電ー

(肘折温泉) → (湯の台高原そば畑) → (四ヶ村の棚田) (豊牧の棚田→滝の沢の棚田→沼の台の棚田→平林の棚田) → (小水力発電施設) → (閉会式会場)



湯の台高原そば畑



四ヶ村の棚田 (豊牧の棚田)



小水力発電施設 (おおくら升玉水力発電所)

大蔵村(49%出資)と民間2社が共同で建設。カーボンニュートラルの実現に向け、国土交通省の砂防ダムを利用し低コストで建設。年間可能発電電力量3,500MWh(約1,000世帯分)全て売電(年間で約1億円)



ダムと全景



四ヶ村の棚田 (平林の棚田)



発電機と制御盤

ー日本の棚田百選「四ヶ村の棚田」とトマト団地見学ー

肘折温泉 → 湯の台高原そば畑 → 四ヶ村の棚田 (沼の台の棚田 → 平林の棚田 → 豊牧の棚田 → 滝の沢の棚田) → トマト団地 → 閉会式会場



湯の台高原そば畑



四ヶ村の棚田 (沼の台の棚田)



トマト団地

大蔵村で生産されるトマトは山形県一の生産量を誇っています。寒暖差により甘味が凝縮され 酸味とのバランスが人気で、主に関東圏を中心に「大蔵ブランド」として高い評価を得ています。



四ヶ村の棚田 (平林の棚田)



トマトハウス内



選果場



2021 棚田再生宣言



四ヶ村地区



「さなぶり」の朝

2021 棚田再生宣言

皆さん、こんにちは。

私は、大蔵村四ヶ村の棚田で農業をしている中島秀幸と申します。水稲3haとリンドウ1haの栽培を中心に家族4人で農作業にあたっています。

四ヶ村の棚田は、標高300m位に位置し豊かな自然に囲まれ、日当たりがよく、綺麗な水や寒暖差など農作物の栽培にとってたくさんの恵みを与えてくれます。

一方、棚田(中山間地)での農業は、決して容易なものではありません。平野部に比べ作業面や管理面で手間暇もかかります。また、人口の減少や高齢化による担い手不足という問題もあります。貴重な棚田を今後も維持できるか不安な面もありますが、誰よりもこの地域を愛し、棚田の恩恵を受けながら好きな農業を続けられることに感謝し、棚田で生きる者の一人として、代表して決意を表明し「2021 棚田再生宣言」とさせていただきます。

○私たちは、棚田を愛し、試行錯誤しながら地域の仲間と共に、共同・共働して農業を続けていきます。

○私たちは、豊かな自然環境の地で育てた美味しい「棚田米」を、誇りをもってこれからも栽培し皆さんに提供していきます。

○私たちは、社会の変化に相応したスマート農業など新しい棚田地域の農業にチャレンジしていきます。

○私たちは、棚田の魅力を広く発信し、たくさんの人と交流を創っていきます。

○私たちは、棚田の景観や素晴らしさを、子ども達にしっかりと伝えていきます。

○私たちは、これからも暖かい明かりが灯る棚田地域の暮らしをまもっていきます。

以上、宣言します。

私は、今回の棚田サミットで全国の仲間の皆さんとお会いするのを楽しみにしていましたが、コロナ禍の影響で中止になり大変残念に思います。

機会がありましたら、是非、山形県大蔵村、四ヶ村の棚田へお出で下さい。お待ちしておりますのでこれからもよろしくお願いいたします。

令和3年9月10日



山形県大蔵村 中島秀幸

仲間とラジコン草刈機の操作講習会



次期開催地あいさつ

第27回 全国棚田(千枚田)サミット 高島市 開催!

開催日：令和4年
10月1日(土)
～2日(日)

会場：滋賀県高島市

・・・お問い合わせ・・・
第27回 全国棚田(千枚田)サミット 実行委員会事務局
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
高島市役所 農村整備課
TEL.0740-25-8529 FAX.0740-25-8519
E-mail: nouson@city.takashima.lg.jp

～棚田サミットとは～
人々に安らぎや癒しを与える日本の原風景。
また、教育や防災など様々な機能を持つ
「棚田」の魅力を見つめ直し、農村環境を
守る仲間が集まる全国サミットを令和4年度
滋賀県高島市で開催します!

過去の開催状況等は「全国棚田(千枚田)連絡協議会」ホームページをご覧ください。 tanada-japan.com

※次期開催地のごあいさつは、令和3年9月9日にホームページ等でご覧いただいた内容です。

次期開催地あいさつ

滋賀県高島市長 **福井 正明 様**



皆さんこんにちは、滋賀県高島市長の福井でございます。
この機会に一言ご挨拶をさせていただきます。まずは、先程、ご挨拶をいただきました山形県大蔵村の加藤村長におかれましては、第26回全国棚田サミットの開催に向け、本当に長きに渡りご準備をいただき、色々のご苦労いただいたにも関わりませず、今回のコロナ禍の中で止む無く中止という苦渋の決断をいただきました。さぞかし残念であろうと本当に心から拝察するところであります。また同時に、実行委員会をはじめ、ご準備いただきました関係者の皆様に対しまして心から敬意と感謝を申し上げる次第でもあります。

そのような中で、先程、加藤村長様から、この全国棚田連絡協議会旗をお引き受けをさせていただきました。来年、令和4年度は、私も滋賀県高島市で第27回の全国棚田サミットを開催をさせていただくこととしておりまして、現在、その準備に取り組んでいるところでもあります。どうぞ、全国から高島市にお越しいただきますよう心からご期待と歓迎をさせていただきますので、どうかよろしくお願いを申し上げます。

(高島市を映像で紹介しながら)

ここで、少し高島市の紹介をさせていただきます。
ここ滋賀県高島市は琵琶湖の北西部に位置しており、古くから京都・奈良の都と北陸を結ぶ交通の要衝として栄えてきました。
また、滋賀県全体の面積の1/6を占める琵琶湖は、その水は京阪神の約1,450万人の皆様の生活用水として提供し、その琵琶湖の水の1/3はここ高島市から琵琶湖に注いでいる、まさに「琵琶湖源流のまち」でもあります。
同時にこのように高島市は琵琶湖から里山にかけての農山漁村集落が点在し、奥山から琵琶湖に注ぐ水の流れがつくりあげた様々な暮らしや文化、日本の原風景ともいうべき風土が育まれてきた地域でもあります。

市内には今回のテーマであります棚田サミットに関わりまして日本の棚田百選の「畑の棚田」をはじめ、日本街路樹百景に選ばれ全国紅葉名所ランキングでここ数年、全国で連続1位に指定されている「メタセコイア並木」など、現在15もの百選に選定されているそれぞれの地域があります。

このようにいわゆる歴史、自然、文化などがそれぞれの地域に息づき受け継がれております自然に寄り添う生活文化が独特の生活様式を形成し、更には日本遺産にも複数箇所が認定されているという土地柄でもあります。

このように、本当に自然豊かな高島市は清らかな湧水と湿潤な気候に恵まれ、古くから発酵食文化が育まれてもきています。どうか全国から来年開催いたしますサミットに参加をいただきます皆様には、そうした自然やあるいわ景観、あるいわ高島ならではの食文化に触れていただければと思っております。

結びになりますが、現在のコロナ禍の中で、全国の皆様と共にこの難局を乗り越え、そして一日も早い日常生活が取り戻せますことをご祈念申し上げますとともに、我が国の農業農村の多面的な特性のひとつであります日本の原風景の棚田が将来に渡りその保全に繋がりますことを心からご期待申し上げまして、次期開催地からのご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(畑の棚田の紹介映像)

※各紹介映像は、YouTubeでご覧いただけます。
(<https://www.youtube.com/channel/UCwzUq63oT7jSUmT4O37VvUg>)
また、全国棚田(千枚田)連絡協議会及び山形県大蔵村のHPからもリンクできます。

四ヶ村の棚田の概要

*住 所	山形県最上郡大蔵村大字南山地内
*面 積	125ha
*棚 田 枚 数	約1,900枚
*法 面 構 造	土坡
*平 均 勾 配	1/10
*標 高	250m～350m
*主生産品種	米(はえぬき・里のゆき ほか)
*農作業時期	田植え 5月中旬 稲刈り 9月中旬

◎「四ヶ村」とは、豊牧・滝の沢・沼の台・平林の4集落を総称する呼び名です。
「四ヶ村の棚田」は、この4集落内にある各棚田で構成されています。



「四ヶ村の棚田」を動画でご覧いただけます。



四ヶ村の棚田 春夏秋冬



手塩に かけてきた風景 を 護

春には満々と水をたくわえ、夏には丈の伸びた稲が風に揺れ、秋には黄金色の穂がこうべを垂れる——。

「日本の棚田百選」にも選ばれている「四ヶ村の棚田」。四ヶ村は豊牧・滝の沢・沼の台・平林の4地区を総称する呼び方です。その歴史は古く、鎌倉時代初期の起源とされ、世帯数約100戸、人口約500人の四ヶ村には、120haにも及ぶ棚田が広がっています。高台から見る風景は穏やかで、棚田の向こうには山々が屏風のように連なります。季節ごとに様々な表情を見せる棚田は「日本の原風景」ともいえます。

この四ヶ村の棚田で毎年8月第1土曜日に開催される「四ヶ村棚田ほたる火コンサー

ト」。豊牧にある棚田を会場に、約1200本のろうそくがあぜ道に並べられ、夕暮れとともに優しい明りがともされます。広大な棚田では、そびえたった山々が反響板となり、ピアノとオカリナの澄んだ音色が響き渡る、一夜限りの幻想的な空間が浮かびあがります。

四ヶ村の美しい田園風景には、生きるために大地を耕した祖先の汗と涙がしみこんでいます。特に、傾斜が急な棚田の草刈りは重労働で、高齢化とともに農業をやめていく人も増えてきましたが、この棚田を今なお四ヶ村のみなさんが守り続けています。棚田を守り通してきた方々に敬意を払い、この美しい風景を後世につなぐための取り組みが今も続いています。



棚田米

平成27年に大蔵村棚田米生産販売組合を設立。組合員は四ヶ村で米づくりを行っている人々。田植えや収穫体験ができる「棚田米オーナー制度」やデザイン性の高い米袋の導入などが評価され、大蔵村棚田米生産販売組合は平成29年に、山形エクセレントデザイン大賞を受賞しました。生産者によって手間ひまかけて、大切に育てられた棚田米はオリジナルの米袋で消費者に届けられています。

